

長野県中央道埋蔵文化財  
包蔵地発掘調査報告書

上伊那郡飯島町内その3・駒ヶ根市内

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社  
長野

信州大学附属図書館



3470342225

210. 2  
M16

木忠書  
鈴茂蔵

# 長野県中央道埋蔵文化財 包蔵地発掘調査報告書

—上伊那郡飯島町内その3—

—駒ヶ根市内—

昭和47年度

日本道路公団名古屋支社  
長野県教育委員会

## 序

昭和47年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査の一環として、上伊那郡飯島町その3地区（飯島）8遺跡と、駒ヶ根市内8遺跡の発掘調査が、4月25日から9月1日にかけて実施された。

この飯島地区と駒ヶ根地区は、木曾山脈の南駒ヶ岳・西駒ヶ岳等諸峯を水源とする与田切川・中田切川・大田切川の流域にあたり、山麓に形成された複合層状地から天竜川に面する段丘先端にまで連なる広大な地域には、古くから遺跡の存在の多い所と知られ、従来学術・緊急発掘調査によって、縄文時代から歴史時代の遺構の確認例の多いこともあって、今回の発掘調査には、大きな期待が持たれていた。

発掘調査の結果は、報告書に見られるように、遺構遺物発見に濃淡の差異はあったが、うどん坂南遺跡の縄文時代早期の遺物集中状況、山溝遺跡の縄文時代中期の集落立地とその構成、大徳原北遺跡の縄文時代後期の土器片集中地の立地、うどん坂Ⅱ遺跡の縄文時代晩期土器片集中地の性格と東海系土器の移入経路、山溝・女体北遺跡の平安時代の住居立地等、各期各様の遺構・遺物の確認によって、学界に新発見をもたらすものも少なくない。

報告書刊行に当って、この発掘調査の実施に深いご理解をいただいた日本道路公団名古屋支社、同伊那工事事務所、余寒まだ去りやらない4月から炎暑の厳しい8月にかけて、長期間この調査に精励された大沢団長を始めとする調査員、連日の作業に積極的にご協力いただいた両地区の作業員各位、この調査に、ご支援いただいた、長野県伊那中央道事務所、飯島町、駒ヶ根市当局ならびに中央道用地被買収者組合等関係各位に対し、深甚な謝意を表する次第である。

昭和48年3月20日

長野県教育委員会教育長 小松孝志



## 例 言

1. 本書は、昭和47年度に日本道路公団と長野県教育委員会との契約に基づいた発掘調査のうち、上伊那郡飯島町内その3（飯島）、駒ヶ根市の調査報告書である。
2. 本書は、契約期間内（昭和48年3月20日）にまとめることが要求されており、なお、調査図は三地区の調査及び整理をしているために、調査結果について充分検討・研究する時間的な面がとれないためもあって、調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点を置いて、丸山が編集した。
3. 遺構関係の図面は丸山と今村調査補助員が整図した。ドットは焼土を表わし、住居址伊内埋壘は○で表記している。柱穴内とその附近の数字は深さをcmで表わしている。縮尺については図に示してある。
4. 土器実測図は山岡が整図した。土製品、土器把手実測図は井上が整図した。
5. 土器拓本は小松原と川上・木谷・磯部調査補助員が担当した。
6. 石器実測図は伊藤が担当した。
7. 土器の復元は小松原・丸山が担当した。
8. 写真撮影は今村・丸山が担当した。
9. 縄文時代土器については樋口昇一氏の指導を受けた。
10. 執筆は調査員が分担し、それぞれ文末に文責を記した。
11. 遺物は上伊那郡飯野町の調査団本部に保管し、実測図類も同所に保管してある。

# 目 次

## 飯島町内 その3

序

例 言

I 調査状況	1
1 調査にいたるまで	1
1) 中央道関係の経過	1
2) 発掘調査委託契約	9
3) 発掘調査開始までの準備	14
2 調査の実施と経過	16
1) 調査期間と経過	16
2) 発掘調査協力者	17
3) 現地指導・現地視察者	17
3 発掘調査の方法	18
II 飯島地区の概況	19
1 飯島地区の環境	19
2 飯島田辺地区の遺跡	21
1) 岩間地区上段の遺跡	21
2) 扇状地上部と段丘岩間面(岩間・上の原・赤坂)の遺跡	22
3) 高尾丘陵と太田沢に面する遺跡	22
4) 下位段丘石層根面と田切段丘の遺跡	23
5) 鳥居原の遺跡	23
III 調査遺跡	25
1 うどん坂南遺跡	25
1) 位 置	25
2) 遺構と遺物	25
3) ま と め	25
2 うどん坂Ⅱ遺跡	26
1) 位 置	26
2) 遺構と遺物	26
3) ま と め	27
3 うどん坂Ⅰ遺跡	28
1) 位 置	28
2) 遺 物	28

3) まとめ	28
4 山溝遺跡	29
1) 位置	29
2) 遺構と遺物	29
ア B地区	29
ア) 住居址 イ) 土 塚 ウ) 配石遺構 エ) その他の遺物	
イ E地区	33
ア) 住居址 イ) 土 塚 ウ) 溝状遺構 エ) その他の遺物	
3) まとめ	46
5 八幡林遺跡	47
1) 位置	47
2) 遺構と遺物	47
3) まとめ	47
6 石上神社前遺跡	48
1) 位置	48
2) 遺 物	48
3) まとめ	48
7 庚申平遺跡	49
1) 位置	49
2) 遺構と遺物	49
ア 1号住居址	49
イ 土 塚 (1~2)	49
ウ その他の遺物	49
3) まとめ	50
8 太田沢春H平遺跡	51
1) 位置	51
2) 遺 物	51
3) まとめ	51
あとがき	52

## 挿 図 目 次

第1図	飯島町内遺跡分布図	53
第2図	飯島地区中央道内各遺跡地形図	54
第3図	飯島地区中央道内各遺跡地形図	55
第4図	飯島地区中央道内各遺跡地形図	56
第5図	飯島地区中央道内各遺跡地形図	57
第6図	うどん坂南遺跡ビット、焼土	57
第7図	山溝遺跡遺構配置図	58
第8図	山溝遺跡1・2・3・5号住居址、土壇3	59
第9図	山溝遺跡4・6・7号住居址	60
第10図	山溝遺跡B区土壇群、土壇1・2	61
第11図	山溝遺跡配石址	62
第12図	山溝遺跡8・9号住居址	63
第13図	山溝遺跡11・13・14号住居址、土壇2	64
第14図	山溝遺跡15・16号住居址	65
第15図	山溝遺跡17・18号住居址、土壇5	66
第16図	山溝遺跡19・20号住居址	67
第17図	山溝遺跡21・22号住居址、土壇9	68
第18図	山溝遺跡23・24号住居址、土壇9	69
第19図	山溝遺跡25・26号住居址	70
第20図	山溝遺跡10・12号住居址、土壇4	71
第21図	山溝遺跡土壇1・3・6	72
第22図	山溝遺跡E区土壇群断面図	73
第23図	山溝遺跡E区土壇群配置図	73
第24図	茨中平遺跡1号住居址、土壇1・2	74
第25図	うどん坂南遺跡出土土器	75
第26図	うどん坂南遺跡出土石器	75
第27図	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	76
第28図	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	77
第29図	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	78
第30図	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	79
第31図	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	80

第32回	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	81
第33回	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	82
第34回	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	83
第35回	うどん坂Ⅱ遺跡出土土器	75
第36回	山満遺跡1・2・3号住居址出土土器	84
第37回	山満遺跡4・7号住居址出土土器	85
第38回	山満遺跡5号住居址覆土出土土器	86
第39回	山満遺跡5号住居址出土土器	87
第40回	山満遺跡5号住居址覆土出土土器	88
第41回	山満遺跡6号住居址覆土出土土器	89
第42回	山満遺跡B区出土土器	90
第43回	山満遺跡B区出土土器	91
第44回	山満遺跡B区出土土器	92
第45回	山満遺跡B区出土土器	93
第46回	山満遺跡出土土器	94
第47回	山満遺跡B区出土土器	95
第48回	山満遺跡出土土器	96
第49回	山満遺跡出土土器	97
第50回	山満遺跡14号住居址出土土器	98
第51回	山満遺跡出土土器	99
第52回	山満遺跡出土土器	100
第53回	山満遺跡出土土器	101
第54回	山満遺跡出土土器	102
第55回	山満遺跡出土土器	103
第56回	山満遺跡出土土器	104
第57回	山満遺跡出土土器	105
第58回	山満遺跡8号住居址出土土器	106
第59回	山満遺跡8号住居址出土土器	107
第60回	山満遺跡8号住居址出土土器	108
第61回	山満遺跡8号住居址出土土器	109
第62回	山満遺跡8号住居址出土土器	110
第63回	山満遺跡9号住居址出土土器	111
第64回	山満遺跡9号住居址出土土器	112
第65回	山満遺跡11号住居址出土土器	113
第66回	山満遺跡14号住居址出土土器	114
第67回	山満遺跡14号住居址出土土器	115

第68区	山溝遺跡14号住居址出土土器	116
第69区	山溝遺跡14号住居址出土土器	117
第70区	山溝遺跡14号住居址出土土器	118
第71区	山溝遺跡14号住居址出土土器	119
第72区	山溝遺跡15号住居址出土土器	120
第73区	山溝遺跡16号住居址出土土器	121
第74区	山溝遺跡17号住居址出土土器	122
第75区	山溝遺跡18号住居址出土土器	123
第76区	山溝遺跡18号住居址出土土器	124
第77区	山溝遺跡19号住居址出土土器	125
第78区	山溝遺跡19号住居址出土土器	126
第79区	山溝遺跡20号住居址出土土器	127
第80区	山溝遺跡20号住居址出土土器	128
第81区	山溝遺跡20号住居址出土土器	129
第82区	山溝遺跡20号住居址出土土器	130
第83区	山溝遺跡21号住居址出土土器	131
第84区	山溝遺跡21号住居址出土土器	132
第85区	山溝遺跡21号住居址出土土器	133
第86区	山溝遺跡21号住居址出土土器	134
第87区	山溝遺跡22号住居址出土土器	135
第88区	山溝遺跡22号住居址出土土器	136
第89区	山溝遺跡23号住居址出土土器	137
第90区	山溝遺跡23号住居址出土土器	138
第91区	山溝遺跡23号住居址出土土器	139
第92区	山溝遺跡24号住居址出土土器	140
第93区	山溝遺跡24号住居址出土土器	141
第94区	山溝遺跡24号住居址出土土器	142
第95区	山溝遺跡25号住居址出土土器	143
第96区	山溝遺跡25号住居址出土土器	144
第97区	山溝遺跡25号住居址出土土器	145
第98区	山溝遺跡26号住居址出土土器	146
第99区	山溝遺跡26号住居址出土土器	147
第100区	山溝遺跡26号住居址出土土器	148
第101区	山溝遺跡土壇出土土器	149
第102区	山溝遺跡土壇出土土器	150
第103区	山溝遺跡土壇13出土土器	151

第 104 图	山满遗址土城出土土器	152
第 105 图	山满遗址土城出土土器	153
第 106 图	山满遗址土城出土土器	154
第 107 图	山满遗址土城出土土器	155
第 108 图	山满遗址土城出土土器	156
第 109 图	山满遗址土城出土土器	157
第 110 图	山满遗址土城出土土器	158
第 111 图	山满遗址土城 91 出土土器	159
第 112 图	山满遗址 E 区出土土器	160
第 113 图	山满遗址 E 区出土土器	161
第 114 图	山满遗址 E 区出土土器	162
第 115 图	山满遗址 E 区出土土器	163
第 116 图	山满遗址 E 区出土土器	164
第 117 图	山满遗址 E 区出土土器	165
第 118 图	山满遗址 E 区出土土器	166
第 119 图	山满遗址 E 区出土土器	167
第 120 图	山满遗址 E 区出土土器	168
第 121 图	山满遗址 E 区出土土器	169
第 122 图	山满遗址 E 区出土土器·古钱·铁器	170
第 123 图	山满遗址出土土偶	171
第 124 图	山满遗址出土土制品·小形土器	172
第 125 图	山满遗址 F 区出土土制品	173
第 126 图	山满遗址 9 号住居址出土·铜把手	173
第 127 图	山满遗址 8 号住居址出土土器	174
第 128 图	山满遗址 9·10·11 号住居址出土土器	175
第 129 图	山满遗址 14 号住居址出土土器	176
第 130 图	山满遗址 15·16·18 号住居址出土土器	177
第 131 图	山满遗址 19·20 号住居址出土土器	178
第 132 图	山满遗址 21·22·23 号住居址出土土器	179
第 133 图	山满遗址 24·25·26 号住居址出土土器	180
第 134 图	山满遗址土城出土土器	181
第 135 图	山满遗址土城出土土器	184
第 136 图	山满遗址 E 区出土土器	182
第 137 图	山满遗址 E 区出土土器	183
第 138 图	山满遗址 F 区出土土器	184
第 139 图	八幡林遗址出土土器	185

第140 回	八幡林遺跡出土石器	185
第141 回	石上神社前遺跡出土石器	185
第142 回	石上神社前遺跡出土石器	185
第143 回	庚申平遺跡出土石器	186
第144 回	庚申平遺跡出土石器	185
第145 回	太田沢春日平遺跡出土石器	185
第146 回	太田沢春日平遺跡出土石器	185



## 図 版 目 次

第 1 図	うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝遺跡・航空写真	187
第 2 図	飯島町遺跡・うどん坂南遺跡	188
第 3 図	うどん坂南遺跡	189
第 4 図	うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ遺跡	190
第 5 図	うどん坂Ⅱ遺跡出土遺物(1)	191
第 6 図	うどん坂Ⅱ遺跡出土遺物(2)	192
第 7 図	山溝遺跡	193
第 8 図	山溝遺跡 (B 区)	194
第 9 図	山溝遺跡住居址	195
第 10 図	山溝遺跡 3・5 号住居址	196
第 11 図	山溝遺跡 6 号住居址・土壇群	197
第 12 図	山溝遺跡配石址	198
第 13 図	山溝遺跡住居址群 (B 区)	199
第 14 図	山溝遺跡土壇群 (F 区)	200
第 15 図	山溝遺跡 8 号住居址	201
第 16 図	山溝遺跡 8 号住居址出土土器 (1)	202
第 17 図	山溝遺跡 8 号住居址出土土器 (2)	203
第 18 図	山溝遺跡 9 号住居址	204
第 19 図	山溝遺跡 9 号住居址出土顔面把手	205
第 20 図	山溝遺跡 10 号住居址	206
第 21 図	山溝遺跡 11 号住居址	207
第 22 図	山溝遺跡 12 号住居址及び出土遺物	208
第 23 図	山溝遺跡 13・14 号住居址	209
第 24 図	山溝遺跡 14 号住居址出土土器	210
第 25 図	山溝遺跡 15 号住居址	211
第 26 図	山溝遺跡 16・18 号住居址	212
第 27 図	山溝遺跡 19 号住居址	213
第 28 図	山溝遺跡 20 号住居址	214
第 29 図	山溝遺跡 21 号住居址及び出土土器 (1)	215
第 30 図	山溝遺跡 21 号住居址出土土器 (2)	216
第 31 図	山溝遺跡 22 号住居址	217
第 32 図	山溝遺跡 22 号住居址出土土器	218
第 33 図	山溝遺跡 23 号住居址	219
第 34 図	山溝遺跡 23 号住居址出土土器	220

第35回	山溝遺跡24号住居址	221
第36回	山溝遺跡25号住居址	222
第37回	山溝遺跡25号住居址出土土器(1)	223
第38回	山溝遺跡25号住居址出土土器(2)	224
第39回	山溝遺跡25号住居址出土土器(3)	225
第40回	山溝遺跡26号住居址	226
第41回	山溝遺跡26号住居址出土土器	227
第42回	山溝遺跡土壌群、土壌4	228
第43回	山溝遺跡土壌5・6	229
第44回	山溝遺跡土壌13・19	230
第45回	山溝遺跡土壌24・26	231
第46回	山溝遺跡土壌29・31	232
第47回	山溝遺跡土壌59・60	233
第48回	山溝遺跡出土土器(1)	234
第49回	山溝遺跡出土土器(2)	235
第50回	山溝遺跡出土土器(3)	236
第51回	山溝遺跡遺物出土状態	237
第52回	八幡林・石上神社前遺跡	238
第53回	庚申平遺跡	239
第54回	太田沢春日平遺跡	240
第55回	発掘スナップ(1)	241
第56回	発掘スナップ(2)	242

# 1 調査状況

## 1 調査にいたるまで

### 1) 中央道関係の経過

#### ア 整備計画とその経過

昭和32年4月、高度経済成長政策の一つとして「国土開発縦貫自動車道建設法」が公布され、その中の一つに中央自動車道予定路線も発表された。その後、諏訪回り案に改正され、本線を西の宮線、岡谷から分岐し長野へ通ずるものを長野線と呼ぶ。昭和41年7月に五縦貫道整備計画が決定され、その後道路整備施行命令が日本道路公団に出されている。中央自動車道西の宮線は、小牧・東京間やく360km、そのうち長野県内は、岐阜県中津川市から恵那山トンネルで伊那谷に通じ、天竜川に沿って北上し、諏訪盆地を横切り、八ヶ岳山麓を通過して山梨県に至るやく122kmとなっている。

昭和41年、日本道路公団名古屋支社は飯田市に飯田工事事務所を設置し、その後の進展に伴い恵那山トンネル東工事事務所、伊那市・諏訪市にも工事事務所が設けられた。長野県でもこれに呼応して、県庁内に長野県中央建設対策本部が組織され、企画部に中央道課が、その出先機関として中央道事務所が、飯田・伊那・諏訪3市に置かれた。このような現地体制の整備につれて、ルート発表・立入測量・設計協議・市杭設置そして用地買収へと業務は段階的に進むものではあるが、現実には遅々として進まず、年月を費やしていたが、昭和45年頃から用地買収も進展し、それに伴って全線がいくつもの工区に分けられて本線工事が発注されている。昭和42年3月恵那山トンネル補助トンネル工事が始まり、昭和44年11月には恵那トンネル本線トンネル工事に着手し、昭和45年には阿智工区から本線工事に入っている。昭和47年後半になると埋蔵文化財発掘調査の終るのを追い越けるように、飯田・高森・松川・飯島・駒ヶ根工区には大形機械が導入されて整地作業がなされ、長期間人手をかけて掘りあげた遺跡が、短時日のうちに姿を消している。ここで問題になることは、日本道路公団から施工業者への工事仕様書の中に、調査予定の埋蔵文化財包蔵地が記載されていないことがあって、工事によって発掘調査前の遺跡が破壊された例のあったことである。

#### イ 埋蔵文化財の対策とその経過

縦貫道計画が発表された昭和41年頃、開発が全国的に広まりだして、各地で文化財保護についての問題が取りあげられていた。文化財保護委員会（現文化庁）では、開発機関との間でその保護についての調整を計っていた頃であったので、日本道路公団との間で、昭和42年9月に「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」を取交した。それより先、昭和41年には、中央自動

車道関係係文化財主管協議会を開催し、文化財の取扱いについて打合せている。県教育委員会では、昭和42年に入って関係市町村連絡協議会を、飯田・伊那・諏訪3地区で開きその対策を打合せる。さらに、昭和42年国庫補助事業として、中央自動車道用地内とその周辺の遺跡分布調査を実施し、下伊那地区147遺跡、上伊那地区112遺跡、諏訪地区90遺跡計349遺跡を確認する。その後ルート発表に伴い補足調査を実施し、中央道用地内には、下伊那地区で63遺跡(含斜坑広場)、上伊那地区83遺跡、諏訪地区44遺跡の計190遺跡の存在を知る。分布調査では埋蔵文化財を除く文化財についても調査しているが、その取扱いについては「覚書」に触れられていないこともあって、関係市町村教育委員会にその交渉が任せられている。「覚書」にもとづいて、埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」という)の取扱いについては、その下交渉及び発掘調査は各県教育委員会が当ることになっており、文化庁の指導もあって、長野県が中心となり愛知・岐阜・山梨の4県で「中央自動車道関係係文化財対策連絡協議会」を持ち、この会には日本道路公団関係者も加って、昭和42、43、44年に開催されたが、管轄公団支社の業務進展がまちまちであり、各県の取り組み方も一律でないため、充分な連絡調整もできないうちに、愛知・山梨・岐阜県の順で、路線内の遺跡発掘調査が開始されていった。

遺跡の取扱いについては、「覚書」の中で、A・路線計画からははずすもの、B・路線計画の中に入れるが保護するもの、C・路線計画の中に入れ、事前に発掘調査をし記録して保存するもの3区分されている。それに基づいて、中央自動車道用地内遺跡についても、A・B・Cの3区分されていたが、路線決定の後では、その変更が容易でなく、結局190遺跡すべてCとなった。この最終決定は、県教育委員会の意見聴取に基づいて文化庁でなされる。これらの遺跡の発掘調査は、日本道路公団が費用負担して、県教育委員会と契約して実施するように「覚書」で定められている。しかし、県教育委員会では、直営の発掘調査体制を組織することが困難であるとの立場から、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、その中に遺跡調査団をおいて業務を遂行することにし、そこへ指導主事を調査主任として出向させることにした。

この調査体制が確立する前の昭和45年3月に、飯田市上飯田地区の2遺跡(さつみ・古閑垣外)の発掘調査が行なわれた。この調査は、年度末も迫っているため県教育委員会が受託することは困難なためと、試み的な意味もあって、「長野県中央道遺跡調査会」を結成し、同調査会が受託して実施した。暫定的な措置であったが、長野県下最初の中央道用地内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査である。

同年4月から、本格的な発掘調査体制確立のために、県教育委員会社会教育課(後に文化課に独立)では、担当指導主事を2名増員し、4名とする。一方では、各地区の関係市町村教育委員会との打合せ会を持ち、日本道路公団名古屋支社との協議も具体化し、6月と7月の現地協議によって昭和45年度の調査地区も決定した。そこで、7月には「長野県中央道遺跡調査会」を再結成した。

昭和45年度は、8月に下伊那郡阿智村地内7遺跡(調査費179万円)、9月に飯田地内その1地区10遺跡(調査費1590万円)の発掘調査委託契約を相次いで結び、9月2日には、下伊那郡阿智村川畑遺跡において、長野県下中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査の撤入式を挙行している。翌9月3日から2班編成の調査団によって発掘調査を開始している。10月に上伊那郡宮田村地内その1地区6遺跡(調査費500万円)の発掘調査委託契約を結び、昭和46年3月45年度の業務を完了した。

昭和46年度は、4月に、上伊那郡飯島町内その1地区(調査費1224万円)、8月に下伊那郡高森町内その1地区(調査費3120万円)、9月に下伊那郡阿智村原斜坑広場その1杉の水平遺跡(調査費730万円)

の発掘調査委託契約が結ばれ、発掘調査が進められている。なお上伊那郡中田切川橋梁工事完工に伴う上伊那郡飯島町内その2久根平遺跡（調査費 123万円）の発掘調査委託契約が、9月に結ばれ、特設調査団が組織され調査を完了している。

昭和47年度は、買取契約も進展し、上下伊那郡下の各工区において工事発注が続出する年とあって、県教育委員会文化課においては、担当指導主事を3名増員し、4班編成の調査団を組織し、飯田・下伊那地区に2班、伊那・上伊那地区に2班ずつ常駐させて発掘調査に当たっている。4月に飯田市内その2地区17遺跡（調査費2367.5万円）、上伊那郡飯島町内その3地区8遺跡（調査費 677.1万円）、伊那市西春近地区18遺跡（調査費3361.6万円）の発掘調査委託契約が成立し、広範囲にわたる発掘調査が開始されている。さらに、下伊那郡高森町内その2地区5遺跡（調査費2002万円）、下伊那郡松川町内12遺跡（調査費1864.3万円）、駒ヶ根市内8遺跡（調査費 563.5万円）の発掘調査委託契約が7月に成立している。8月には、上伊那郡南箕輪村内その1地区5遺跡（調査費1051.5万円）の発掘調査委託契約が結ばれている。さらに飯田市山木地籍石子原遺跡において多量に発見された石器群は、中期ローム層包含の旧石器として、その重要性が認められて第2次調査の再協議が成立し、飯田市内その3（調査費 410万円）として発掘調査委託契約が結ばれている。10月には上伊那郡南箕輪村内その2地区4遺跡（調査費 514.4万円）と、上伊那郡の大蔵川橋梁工事と辰野町平出陸橋工事に伴う辰野町内その1地区3遺跡（調査費 497.2万円）の発掘調査委託契約が成立している。本年度調査された遺跡は、数にして81、面積にして132180㎡と広大であるばかりでなく、遺構・遺物の発見も膨大にして、発掘調査の成果も多大である。45年発掘調査開始以来3年目を終ろうとしている今日、出土遺物の累積も予期以上に多く、関係市町村当事者や、考古学者等からその資料の保存・活用の方途についての要望が提出されている。中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査も、昭和48年度の上伊那地区北半と、諏訪地区の調査や、やがて予想される長野線の発掘調査を含めて、新しい局面を迎えているように思える。

#### ウ 中央道関係の経過一覽

この経過一覽は、前項のものと同様のものも多いが、10数年にわたる道路建設の過程と発掘調査の経過は、将来活用されることがあろうと思われるので記載した。中央道建設案とそれに基づく機関、県の対策機関設置、ルート発表の経過、文化財保護のための諸協議・諸会合、発掘調査に関する経過については全部収録した。用地買取契約および工事着工については、最初のものだけ記載した。なお、発掘調査委託契約地区名について、昭和47年度から呼称が変わっているか、ここでは従来例にならっている。

- 32・4・16 国土開発振興自動車道建設法の公布（施行同年7月31日）
- 32・7・25 中央自動車道予定路線を定める法律制定
- 39・6・16 国土開発振興自動車道建設法の一部改正により、中央自動車道予定路線は諏訪回りに改正
- 41・7・25 五経貫道整備計画決定、道路整備施行命令が日本道路公団に出る。
- 〃・8・12 長野県中央自動車道対策協議会開催
- 〃・8・12 恵那山トンネル立入測量開始
- 〃・9・22 中央自動車道長野県建設協力会開催
- 〃・9・30 下伊那郡阿智村の一部、飯田市、豊町（14km）ルート発表



- 45・2・24 下伊那郡阿智村殿島地区において、県下最初の平地地区本線工事開始
- ・2・27 長野県中央道遺跡調査会結成（飯田市上飯田地区の調査に限る）
- ・3・2 公団名古屋支社と長野県中央道遺跡調査会との間で、上飯田地区2遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 80万円）
- ・3・5 飯田市上飯田地区さつき・古屋垣外遺跡の発掘調査開始（～3・21）（団長 大沢和夫）
- ・3・31 飯田市上飯田さつき・古屋垣外遺跡発掘調査報告書刊行
- ・4・22 公団名古屋支社と協議（45年度の発掘調査について）
- ・4・23 上・下伊那地区中央道用地内遺跡視察（県教育委員会担当者）
- ・5・8 下伊那郡阿智村～松川町間（57遺跡）埋蔵文化財包蔵地についての意見聴取（県教育委員会回答 5・26）
- ・5・14 中央自動車道西の高線起工式（於多治見市）
- ・6・1 公団名古屋支社と協議（発掘調査上の問題について）
- ・6・9 下伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（飯田市）
- ・6・11 下伊那郡阿智村7遺跡・飯田市（上飯田・座光寺）7遺跡・壺町2遺跡・上郷町1遺跡について、公団名古屋支社と現地協議
- ・6 昭和45年度中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査予算案を6月県会に提出
- ・6・29 上伊那地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（伊那市）
- ・6・30 諏訪地区中央道関係市町村と文化財保護打合せ会開催（諏訪市）
- ・7・8 上伊那郡宮田村地内7遺跡について、公団名古屋支社と現地協議（～10日）
- ・7・22 長野県中央道遺跡調査会結成準備会・第1回理事会開催（飯田市）
- ・8・17 下伊那郡阿智村地内7遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 179万円）
- ・9・1 飯田地区その1地内10遺跡の発掘調査委託契約成立（委託金額 1590万円）
- ・9・2 中央道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査掘立式挙行（下伊那郡阿智村小野川川畑遺跡）
- ・9・3 下伊那郡阿智村地内7遺跡（川畑・北垣外・橋場・矢平Ⅱ・杉ヶ洞・宮の脇・坊塚）発掘調査開始（終了9・22）
- ・9・3 岡谷市内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～5日）
- ・9・5 伊沢県教育長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ・9・7 諏訪郡富士見町内中央道建設用地内埋蔵文化財分布調査（～10日）
- ・9・8 田中県教育次長、下伊那郡阿智村川畑・北垣外遺跡視察
- ・9・22 飯田地区その1地内10遺跡（山岸・天伯B・権現堂前・さつき・赤坂・宮崎A・宮崎B・大門原B・大門原D・大久保）の発掘調査開始（終了46・1・18）
- ・10・19 上伊那郡宮田村地内6遺跡（高河原・釈迦堂・宮の沢・元宮神社東・天伯古墳・円通寺）の発掘調査開始（終了45・12・18）
- ・10・28 公団名古屋支社総務部長・田中県教育次長、権現堂前・大門原B遺跡視察
- ・10・29 公団名古屋支社副支社長、大門原B・大門原D遺跡視察
- ・11・16 長野県中央道遺跡調査会第2回理事会開催（飯田市座光寺大門原B・宮崎A、上伊那郡宮田

村天伯古墳視察、理事会宮田村福祉センター)

- 45・11・17 公園名古屋支社との協議 (昭和46年度発掘調査地区の選定について)
- # 11・28 下伊那郡阿智村地内発掘調査報告会開催 (下伊那郡阿智村智里東小学校)
- # 12・5 上伊那郡宮田村地内発掘調査報告会開催 (上伊那郡宮田村福祉センター)
- # 12・25 茅野市・原村・諏訪市の一部 (12.4km) ルート発表、これをもって県内やく122kmのルート発表完了
- 46・1・12 伊沢県教育長、下伊那郡穂町山岸遺跡視察
- # 2・1 公園名古屋支社と協議 (昭和46年度の発掘調査地区について、飯田市山本・伊賀良地区用  
地内遺跡視察)
- # 2・2 下伊那郡高森町・松川町・上伊那郡飯島町地内遺跡について、公園名古屋支社と現地協議 (昭和46年度発掘調査地区決定)
- # 2・28 上伊那郡宮田村地内中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- # 3・11 飯田地区その1発掘調査報告会開催(公園・各事務所・市町村教委に対して)
- # 3・15 飯田地区その1発掘調査報告会開催 (一般公開)
- # 3・20 飯田地区その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- # 4・1 飯島町地内その1地区(七久保)7遺跡の発掘調査委託契約成立 (委託金額 1224万円)
- # 4・12 飯島町地内その1地区(七久保)発掘調査開始式挙行(飯島町役場)
- # 4・13 飯島町地内その1、7遺跡(鑄物師原・鳴尾大白・鳴尾・尾越・道満・北原東・小段遺跡)の発掘調査開始(終了46・7・3)
- # 4・26 長野県中央道遺跡調査会第3回理事会開催 (伊那市上伊那郷土館)
- # 5・24 恵那山トンネル斜坑口および土捨場問題協議会、長野県庁企画部長定で開催 (公園名古屋支社、恵那山トンネル東工事事務所、阿智村教育委員会、同建設課、長野県中央道課、飯田中央道事務所、下伊那地方事務所、工建設課、飯田教育事務所、長野県教育委員会)
- # 6・7 下伊那郡阿智村岡原杉の木平・兎の宮遺跡緊急分布調査 (~8)
- # 6・16 公園本社・同名古屋支社と協議 (下伊那郡阿智村岡原恵那山トンネル斜坑口と土捨場予定地の保護措置について)
- # 7・1 公園名古屋支社から恵那山トンネル飯田方斜坑広場(杉の木平遺跡)埋蔵文化財について意見聴取
- # 7・15 飯島町地内その1発掘調査報告会開催(飯島町役場七久保支所)
- # 7・20 公園名古屋支社総務部長と県教育長の協議(恵那山トンネル斜坑土捨場問題について)
- # 8・1 下伊那郡高森町地内その1(10遺跡)の発掘調査委託契約成立 (委託金額 3120万円)
- # 8・6 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査開始式と打合せ会(高森町役場)
- # 8・10 下伊那郡高森町地内その1地区、10遺跡(弓矢・無縁堂・神堂垣外・鐘師原A・瑠璃寺前・大島山東部・赤羽根・出原西部・出早神社附近・正木原1)発掘調査開始(9・14中断、10・23再開、終了47・1・14)
- # 8・18 恵那山トンネル飯田方斜坑広場埋蔵文化財保護措置について県教委回答



- 46・8・30 公園名古屋支社と恵那山トンネル斜坑広場（杉の木平遺跡）の現地協議
- 〃・8・31 公園名古屋支社と上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）の現地協議
- 〃・9・4 伊沢長野県教育長、下伊那郡阿智村杉の木平遺跡・高森町鐘跡原遺跡視察
- 〃・9・10 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査打合せ会（阿智村駒場公民館）
- 〃・9・13 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額730万円）
- 〃・9・14 赤尾長野県教育次長、下伊那郡高森町鐘跡原遺跡視察
- 〃・9・16 下伊那郡阿智村園原斜坑広場その1（杉の木平遺跡）発掘調査開始（終了11・1）
- 〃・9・17 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）委託契約成立（委託金額 123万円）
- 〃・9・20 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）発掘調査開始（終了10・13）
- 〃・11・18 長野県議会社会文教委員会一行下伊那郡高森町瑞穂寺町遺跡視察
- 〃・11・19 長野県中央道遺跡調査会第4回理事会開催（高森町畜産センター）
- 47・1・25 飯田市山本・伊賀良12遺跡、下伊那郡鼎町1遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- 〃・1・26 下伊那郡高森町地内4遺跡、松川町地内10遺跡、上伊那郡飯島町地内8遺跡、宮田村地内1遺跡、駒ヶ根市地内8遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- 〃・1・27 伊那市西春近地内18遺跡について公園名古屋支社と現地協議
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・2・29 上伊那郡飯島町地内その2（久根平遺跡）中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡高森町地内その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・20 下伊那郡阿智村新坑広場その1中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書刊行
- 〃・3・25 下伊那郡阿智村園原新坑広場（杉の木平遺跡）発掘調査報告会開催（智風西診療所）
- 〃・3・26 下伊那郡高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（高森中学校）
- 〃・3・27 園原斜坑広場（杉の木平遺跡）、高森町地内その1地区発掘調査報告会開催（一般公開）
- 〃・4・1 飯田市市内その2地区（17遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 2367.5万円）
- 〃・4・1 飯島町内その3地区（8遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 677.1万円）
- 〃・4・1 伊那市西春近地区（18遺跡）の発掘調査委託契約成立（委託金額 3361.6万円）
- 〃・4・3 飯田市市内その2地区発掘調査打合せ会（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市市内その2地区はか下伊那地区発掘調査団結式挙行（飯田合同庁舎）
- 〃・4・10 飯田市市内その2地区、17遺跡（かぶき畑・柳田・山田・石子原・石子原古墳・ようじ原・上の平東部・守山・六反田・滝沢井尻・小垣外・三歌淵・上の金谷・辻垣外・大東・酒屋前・大門原B）の発掘調査開始（終了48・2・7）
- 〃・4・24 上伊那地区発掘調査団結式と発掘調査打合せ会（上伊那地方事務所会議室）
- 47・4・25 飯島町内その3地区、8遺跡（うどん取南・うどん取II・うどん取I・山溝・八幡林・石上神社前・庚申平・太田沢春日平）の発掘調査開始（終了47・6・28）
- 〃・4・25 伊那市西春近地区、18遺跡（和手・富士山下・富士塚・富澤沢・南丘A・南丘B・名返南・名返東古墳・名返・白沢原・山寺垣外・細ヶ谷B・百駄刈・北丘B・大境・山の根・城平・

城平上)の発掘調査開始。(終了47・12・14)

- 47・4・26 長野県中央道遺跡調査会第5回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ・6・20 公団名古屋支社と、上伊那地区橋梁工事に伴う調査遺跡追加と、飯田市山本石子原遺跡第2次調査について協議(県庁教育次長室)
- ・6・22 公団名古屋支社と飯田市山本石子原遺跡第2次調査について現地協議。
- ・7・3 下伊那郡高森町内その2地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額2,002万円)
- ・7・6 下伊那郡松川町内(12遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,864.3万円)
- ・7・6 駒ヶ根市内(8遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額563.5万円)
- ・7・7 駒ヶ根市内8遺跡(大徳原南B・大徳原南A・大徳原北・横前南・中山原・新田原・女体北・切石墓地)の発掘調査開始。(終了47・9・1)
- ・7・12 飯田市内その3(石子原遺跡第2次調査)の発掘調査委託契約成立。(委託金額410万円)
- ・7・14 下伊那郡松川町内12遺跡の発掘調査打合せ会。(松川町福祉センター)
- ・7・24 下伊那郡高森町内その2地区5遺跡(神田裏・新田西裏・増野新切・増野川子石・鐘崎原A)の発掘調査開始。(終了47・11・9)
- ・7・24 下伊那郡松川町内12遺跡(里見Ⅱ・里見Ⅴ・埴の沢・中原Ⅰ・庚申原Ⅰ・庚申原Ⅱ・平林・やし原・片桐神社東・水上・丈源田Ⅲ・丈源田Ⅳ)の発掘調査開始。(終了47・11・11)
- ・8・15 公団名古屋支社と上伊那郡南箕輪村内9遺跡と辰野町内その1地区3遺跡について現地協議。
- ・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)発掘調査開始儀式。(飯田教育事務所)
- ・8・17 飯田市内その3(石子原遺跡)の発掘調査開始。(終了47・9・30)
- ・8・21 上伊那郡南箕輪村内その1地区(5遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額1,051.5万円)
- ・9・1 上伊那郡南箕輪村内の発掘調査打合せ会開催。(南箕輪村公民館)
- ・9・4 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区9遺跡(南原・三本木原・曾利目・在客・大芝原・大芝東・南高根・北高根A・北高根B)の発掘調査開始。(終了47・12・9)
- ・10・9 上伊那郡南箕輪村内その2地区(4遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額514.4万円)
- ・10・9 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査委託契約成立。(委託金額497.2万円)
- ・10・11 上伊那郡辰野町内その1地区の発掘調査開始儀式と発掘調査打合せ会。(辰野町公民館)
- ・10・12 上伊那郡辰野町内その1地区3遺跡(五反田・越道・平出山の神)の発掘調査開始。(終了47・11・30)
- ・11・15 長野県中央道遺跡調査会第6回理事会開催。(伊那市上伊那図書館)
- ・12・4 公団名古屋支社と昭和48年度調査体制・調査地域について協議。(公団伊那工事事務所)
- ・12・5 公団名古屋支社と伊那市内その2地区(4遺跡)・箕輪町内(3遺跡)・辰野町内その2地区(14遺跡)・諏訪郡富士見町内(7遺跡)について現地協議。
- ・12・15 上伊那地区中央道埋蔵文化財包蔵地出土の遺物展示会開催。(上伊那地方事務所大会議室・一般公開)
- ・12・16 上伊那郡辰野町内その1地区(3遺跡)の発掘調査報告会開催。(辰野町公民館)

- 48・3・16 上伊那郡飯島町内その3地区発掘調査報告会開催。(飯島町公民館)
- ◇ 3・18 飯田市内その2・その3地区発掘調査報告会開催。(下伊那教育参考館)
- ◇ ◇ ◇ ◇ 下伊那郡高森町内その2地区発掘調査報告会開催。( )
- ◇ ◇ ◇ ◇ 下伊那郡松川町内発掘調査報告会開催。( )
- ◇ 3・19 上伊那郡南箕輪村内その1・その2地区発掘調査報告会開催。(南箕輪村公民館)
- ◇ 3・24 駒ヶ根市内発掘調査報告会開催。(駒ヶ根市役所大会議室)
- ◇ 3・26 伊那市西春近地区発掘調査報告会開催。(伊那市福祉センター)

## 2) 発掘調査委託契約

中央自動車道用地内埋蔵文化財包蔵地発掘調査は、「日本道路公団の建設事業等工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」によると、事業施行前に、公団は県教育委員会の意見聴取の上、文化庁との間で協議することになっている。その結果、記録保存と決定され、発掘調査が必要となった場合、公団は、県教育委員会に委託して実施されることになっている。そのため、県教育委員会は、公団と現地協議などの事務接衝のうえ、調査遺跡の発掘面積、調査費、調査期間、調査方法等が決められる。その後、公団から調査依頼、県教育委員会から調査受託の文書の往来があつて、つぎのような発掘調査委託契約が締結されている。

### ア 発掘調査委託契約書

- |           |                             |
|-----------|-----------------------------|
| 1 委託事務の名称 | 中央道埋蔵文化財発掘調査(飯島町内その3)       |
| 2 委託期間    | 昭和47年 月 日から<br>昭和48年3月20日まで |
| 3 委託金額    | ¥6,771,000円也                |
| 4 委託金支払場所 | 日本道路公団名古屋支社                 |

日本道路公団(以下「甲」という。)は、長野県教育委員会(以下「乙」という。)に頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の発掘調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により委託期間を延長し若しくは発掘調査計画を変更し、又は発掘調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2 甲は、前項の請求のあったときは頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して請求書を受領した日から15日以内に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは頭書の発掘調査の処理状況について調査し又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3 乙は、発掘調査の実施にあたり作業箇所作業表示旗をかけた発掘調査関係者には、腕章等を着用させなければならない。

4 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに頭書の発掘調査の実施結果に基づく報告書(B5版20部)を作成し委託期間内に甲に提出しなければならない。

5 乙は、費用精算書を作成し、委託期間満了後1箇月以内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書、費用精算書其の他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの委託契約に基づき甲の費用をもって取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。

第8条 発掘調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する報告書を提出しないときは甲は遅滞損害金として期限満了日の翌日から起算し提出当日までの遅滞日数に応じ頭書の委託金額に対して年8.25%の割合で計算した金額を徴収することができる。

2 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は、甲に対して遅滞日数に応じて年8.25%の割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印の上、各自1通を保有する。

昭和47年4月1日

委 託 者 名古屋市中区栄4丁目1番1号 (中日ビル11~12階)  
日本道路公団名古屋支社  
支社長、平野和男

受 託 者 長野県教育委員会  
教育長 小松孝志

長野県教育委員会では、直接発掘調査する組織を持っていないので、この発掘調査にだけ当る長野県中央道遺跡調査会を結成し、同調査会に再委託し、同調査会が組織する調査団が発掘調査に当ることになっている。

昭和45年7月22日に、長野県中央道遺跡調査会が結成されて以来、年2回の理事会が開かれている。年度頭初の理事会において、発掘調査の受託を決定し、年度末のそれは、発掘調査結果や現状・対策について検討されている。県教育委員会との委託契約書の内容は、公団と県教育委員会のそれと大差ないので省略する。同調査会規約・昭和47年度役員・飯島町内その3調査団組織はつぎのとおりである

(7) 長野県中央道遺跡調査会規約

第1条 この調査会は、長野県教育委員会の委託を受けて、中央道施設及び関連工事用地内遺跡の発掘調査を実施し、その記録の作成、発掘された文化財の保存活用方法を研究することを目的とする。

(名称)

第2条 この調査会は長野県中央道遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称する。

(組織)

第3条 調査会は、次に掲げる役員をもって組織する。

- (1) 会長 1名 (2) 理事 若干名 (3) 監事 2名  
事務所)

第4条 調査会の事務所は、会長が別に定める事務所に置く。

(会長及び理事)

第5条 会長は、長野県教育委員会教育長をもってあてる。

2 理事は次に掲げるものの中から会長の委嘱した者をもってあてる。

- (1) 学識経験者 (2) 関係学会の役員  
(3) 関係市町村教育委員会連絡協議会の代表者 (4) 関係市町村教育委員会の教育長  
(5) 関係行政機関の職員

(会長及び理事の職務)

第6条 会長は調査会の業務を総理し、調査会を代表する。

2 理事は、理事会を構成し、次の事項を審議する。

- (1) 調査会の運営に関すること。 (2) 発掘調査の受託に関すること。  
(3) 規約の改正に関すること。 (4) その他必要な事項

3 会長に事故があるときは、理事のうちから会長が指名した者が、その職務を代行する。

(理事会の招集)

第7条 理事会は必要に応じて会長が招集する。

2 理事会は、理事の半数以上の出席がなければ開くことができない。

3 前項の場合、当該議事について審議をもってあらかじめ意思表示し、または他の理事を代理人として表決を委任した役員は出席したものとみなす。

4 理事会の議事は、出席理事の過半数で決し、可否同数のときは、会長の決するところによる。

(顧問)

第8条 調査会に顧問若干名を置くことができる。

2 顧問は理事会の推薦により会長が委嘱する。

3 顧問は会長の諮問に応ずるとともに、理事会に出席し調査会の業務について助言する。

(監事)

第9条 監事は、理事会の推薦により会長が委嘱する。

2 監事は、調査会の会計を監査する。

(役員任期)

第10条 役員任期は一年とする。ただしその職にあるゆえをもって委嘱されたものの任期は、当該職の在職期間とする。

(幹事)

第11条 調査会に幹事を置く。

2 幹事は、県教育委員会事務局職員のうちから会長が委嘱する。

3 幹事は、会長の命を受け調査会の事務を処理する。

(調査団)

第12条 調査会に調査団を置く。

2 調査団の組織及び運営について別に定める。

(事務の管理執行の規定)

第13条 調査会の事務の管理及び執行にあたっては、この規約ならびに理事会の決定する規定に従って行なう。

(経費)

第14条 調査会の事業に要する経費は、長野県教育委員会の委託料をもってあてる。

(会計の区分)

第15条 調査会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

2 調査会の会計は、長野県教育委員会と締結した委託契約に区分して行なう。

(出納及び現金の保管)

第16条 調査会の出納は、会長が行なう。

2 調査会に属する現金は、会長が理事会の議を経て定める銀行または、その他の金融機関にこれを預けなければならない。

(決算)

第17条 会長は、会計年度終了後1ヶ月以内に収支決算書を作成し、監事の監査を経て理事会の認定を経なければならない。

(財務に関する事項)

第18条 この規約に特別の定めがあるものを除くほか、調査会の財務に関しては、長野県の「財務規則」の例による。

(委任)

第19条 調査会の業務の運営に必要な事項は、この規約に定めるもの及び理事会で議決するものを除くほか会長がこれを定める。

(付則)

この規約は、昭和45年7月22日から施行する。

イ) 長野県中央道遺跡調査会役員名簿 (昭和47年11月現在)

顧問	一志 茂樹 (県文化財専門委員)		
会長	小松 孝志 (県 教 育 長 )		
理事	金井喜久一郎 (県文化財専門委員)	米山 一政 (県文化財専門委員)	
	藤沢 宗平 ( )	藤森 栄一 (長野県考古学会会長)	
	原 嘉藤 (長野県考古学会委員)	宮嶋 進 (下伊那教育会会長)	
	木下 衛 (上伊那教育会会長)	福田 幹人 (諏訪教育会会長)	
	小泉兵次郎 (県 教 育 次 長)	飯島 丁巳 (県 文 化 課 長)	
	佐藤 唯重 (飯田教育事務所長)	徳永 正人 (伊那教育事務所長)	
	小林 彰 (阿智村教育長)	新井 良男 (碧 町 教 育 長)	
	矢亀 勝俊 (飯田市教育長)	中塚 仁次 (高森町教育長)	
	北原 保喜 (松川町教育長)	斎藤 三夫 (飯島町教育長)	
	北沢 照司 (駒ヶ根市教育長)	細田 義徳 (富田村教育長)	
	松沢 一美 (伊那市教育長)	安積 正一 (南箕輪村教育長)	
	熊谷 大一 (辰野町教育長)	羽生 保吉 (下伊那地区教委協議会会長)	
	坂井 忍夫 (上伊那地区教委協議会会長)	木川 千年 (諏訪地区教委協議会会長)	
	林 茂樹 (上伊那郡中川東小学校教頭)		
監事	岡沢 幸朝 (県文化課課長補佐)	田中 富雄 (飯田市社会教育課長)	
幹事	金井 汲次 (県文化課文化財係長)	前沢富実保 (県文化課文化係長)	
	西沢 清 ( ) 専門主事	浅川 欽一 ( ) 専門主事	
	矢島 太郎 ( ) 専門主事	佐藤 文武 (飯田教育事務所総務課長)	
	佐藤 陵 (飯田教育事務所主幹)	下平 久雄 ( ) 主事	
	松島 勇 (伊那教育事務所総務課長)	小林 正次 (伊那教育事務所主幹)	
	鈴木 長次 ( ) 主事	今村 善典 (県文化課指導主事)	
	梶原 健 (県文化課指導主事)	神村 透 ( )	
	富沢 恒之 ( )	丸山敏一郎 ( )	
	岡田 正彦 ( )	堀内規矩雄 ( ) 主事	

ウ) 長野県中央道遺跡調査会調査団

調査部長 大沢和夫  
 調査主任 今村善典 丸山敏一郎  
 調査員 友野良一 大出 保 小松原義人 山岡栄子 獅子榮泰正  
 伊藤 修 村上 孝 井上尤子  
 調査補助員 北原健三 和田武夫 水島徳夫

エ) 発掘調査遺跡の状況と面積

遺名跡名	現況	遺跡の状況	全体面積	用地内面積	調査面積
うどん坂南	栗樹園畑	与田切川の北岸の段丘上に位置する縄文時代の遺物包含地である。	5,200㎡	2,836㎡	560
うどん坂Ⅱ	水田	木曾山脈山麓の扇状地の台地上に位置する縄文時代の遺物包含地である。	5,500	3,708	720
うどん坂Ⅰ	水田畑	木曾山脈山麓の扇状地の天白段丘下の斜面に位置する縄文時代の遺物包含地である。	6,600	328	64
山溝	水田畑 山林地	木曾山脈山麓の本沢川の本沢川に位置する縄文時代の遺物包含地である。	1,930	1,132	360
八幡林	水田畑	木曾山脈山麓の田の沢川に位置する縄文時代の遺物包含地である。	1,500	808	200
石上神社前	宅地畑	木曾山脈山麓の田の沢川に位置する縄文時代の遺物包含地である。	1,616	1,616	360
栗申平	畑	太田沢南岸の舌状台地上に位置する縄文時代の遺物包含地である。	5,000	3,216	640
太田沢春F平	水田畑	太田沢のゆるやかな平垣部に位置する縄文時代の遺物包含地である。	2,000	1,596	320

3) 発掘調査までの準備

昭和47年度から本格的に上伊那郡下の調査が始まり、調査会事務所との連絡、飯島町教委との打合わせ、調査団作業場の設置、資材の調達となかなか多忙であった。

3月30日 伊那教育事務所との打合わせ（調査行程、調査前の準備、予算執行等について）

4月18日 飯島町教育委員会との打合わせ（調査行程、調査方法、作業員募集等について）

4月18日～この日から飯島地区を主体として作業の募集がはじまる。

4月24日 発掘調査回結団式が伊那教育事務所で行われた。式次第と参加者は次のとおりである。

(式次第) 開会あいさつ 金井幹事  
 調査員委嘱 徳永調査会伊那事務所長



調査員紹介 今村調査主任  
調査会長あいさつ 徳永調査会伊那事務所長  
来賓祝詞 公区伊那工事事務所長  
調査同長あいさつ 大沢団長

閉 会

(参列者) 日本道路公団伊那工事事務所長代理  
飯島町教育長  
伊那市教育委員長、伊那市教育長  
金井文化財係長、梶原指導主事  
徳永伊那教育事務所長、松島伊那教育事務所総務課長 小林教育事務所主幹  
松沢指導主事、笠原指導主事、北沢調査会事務員  
調査団員全員

午後、山溝遺跡へ資材運搬、調査基地をおく。

4月25日 午前8時30分、調査員・作業員全員山溝遺跡に集合する。まず斎藤飯島町教育長から激励のあいさつを受け、今村・丸山調査主任によって、調査員の紹介・作業日程・発掘調査法等について説明する。午後よりグリット設定、発掘調査が開始された。初日より住居址が確認され、活気のある発掘調査出発の日となった。

## 2. 調査の実施と経過

### 1) 調査期間と経過

飯島町地内その3（飯島地区）の発掘調査は、4月25日山溝遺跡からはじまり、うどん坂南・うどん坂Ⅱ・八幡林・石上神社前・うどん坂Ⅰ・庚申平・太田沢春日平の調査と進み、遺物の特に多かったうどん坂Ⅱ遺跡の補充調査を最後に6月28日に終了した。この間実働作業日41日の長さにあたり、28軒の住居社をはじめ、各様の遺構も多く、そこで検出された遺物の量も膨大であった。つづいて駒ヶ根市地内の調査に入り、図面作成・原稿執筆が終り業務完了となったのは3月20日である。発掘調査の順序として、グリッド設定・グリッド掘り・遺構の発見があれば拡張・遺構の検出・整備・写真撮影・遺構実測・補足調査と続くわけである。各遺跡の調査期間は次のとおりである。

- |              |             |           |                    |
|--------------|-------------|-----------|--------------------|
| (1) 山溝遺跡     | 4月25日～6月17日 | 実働作業日数32日 |                    |
| (2) うどん坂南遺跡  | 5月22日～5月24日 | ◇         | 3日                 |
| (3) うどん坂Ⅱ遺跡  | 5月24日～6月6日  | ◇         | 10日 6月21日～6月28日 6日 |
| (4) 八幡林遺跡    | 6月6日～6月9日   | ◇         | 3日                 |
| (5) 石上神社前遺跡  | 6月9日～6月13日  | ◇         | 3日                 |
| (6) うどん坂Ⅰ遺跡  | 6月15日       | ◇         | 1日                 |
| (7) 庚申平遺跡    | 6月16日～6月23日 | ◇         | 6日                 |
| (8) 太田沢春日平遺跡 | 6月22日       | ◇         | 1日                 |

飯島町地内その3（飯島地区）発掘調査経過

飯島町地内その3（飯島地区）発掘調査経過

遺跡名	4		5			6			7 → 3
	20	30	10	20	30	10	20	30	
山溝	25	[Hatched Area]							17
うどん坂南	[Hatched Area]		(32日間)						
うどん坂Ⅱ	[Hatched Area]		(3日間)						
八幡林	[Hatched Area]		24			6			
石上神社前	[Hatched Area]		(10日間)			21			
うどん坂Ⅰ	[Hatched Area]		24			6			
庚申平	[Hatched Area]		(3日間)			9			
太田沢春日平	[Hatched Area]		6			15			
	[Hatched Area]		(1日間)			23			
	[Hatched Area]		16			23			
	[Hatched Area]		(6日間)			22			
	[Hatched Area]		22			(1日間)			

遺物整理  
図面作成  
原稿執筆

## 2) 発掘調査協力者

昭和47年4月から6月まで発掘作業、昭和48年3月にかけての整理作業に協力いただいた作業員は、教育委員長の先生はじめ地元飯島町の方々が多かったが、遠く山口県の学生もあり、その数は延1300人以上にのぼり、調査の進行の原動力であった。発掘調査協力者は次のとおりである。

### 飯島町飯島

宮下静男 中村さみ子 羽生ももよ 江端金次郎 亀井とみ子 小林静子 星野千春 北原芳子  
小林喜美子 中村久 横前龍太郎 細川一男 細川志那恵 福島肇作 青沢世き 小松清志  
星野一雄 塩沢佐四郎 小樽弘 片桐角一 大沢はつ子 堀内とし子 米山さかえ 佐々木定男  
佐藤たまえ 木下みさを 高田恭一

### 飯島町七久保

宮下正美 高谷為介 宮下昌一 高谷秀雄 溝口俊彦 那須野万治 岩村等 上原清恒

### 飯島町田切

唐沢辰雄 高坂文四郎

### 飯島町本郷

橋沢匡行

## 3) 現地指導・現地視察者

発掘調査の現地指導としては、県文化課榎原指導主事が5月17日と6月23日の2回にわたり現地来訪、その指導を受けている。また6月2日には藤森栄一県考古学会長が現地来訪し、遺跡についてその詳細な指導を受けている。6月5日には中川東小林教頭が視察を兼ね現地来訪、そのアドバイスをを受けている。

調査中、日本道路公団・県教委事務局・飯島町当局・上伊那郡文化財保護関係機関・教育会・近隣小中学校生徒・町民の方々等多数の視察・見学を受けているが、主な方々は次のとおりである。

日本道路公団 伊那工事事務所庶務課長

県教委事務局 文化課長・伊那教育事務所長・同総務課長

飯島町当局 町長・教育長・教育委員会・文化財専門委員・日切老人クラブ

上伊那郡各機関 上伊那郡市町村教育委員会事務局職員研究協議会

学校関係 飯島中学校長・飯島中学校1・2年生（先生引率）・飯島小学校郷土クラブ班

### 3. 発掘調査の方法

中央道用地内の遺跡発掘調査は、工事により破壊されるため、工事着工前に記録保存を目的とした緊急発掘である。そのため、この発掘調査は、用地内にどのような時期の遺跡が、どんな遺構と遺物を残しているかをさぐり、それを報告書にして記録を残すことを目的とする。

そのため、発掘調査は中央道用地内に限定される。すでに分布調査によって、それらの遺跡の広がり、時期等は一応確認されている。その遺跡の中において、中央自動車道がどのような部分をとるかによって4区分にして分類している。O-遺跡全面が用地内にあるもの。A-遺跡の頂部が用地にかかるもの。B-遺跡の中央部を横切るもの。C-遺跡の下方先端部にかかるものの4区分がそれである。調査は、用地内の遺跡には、全面にグリッドを設定するのを原則として、小さな遺跡や、やむを得ない事情のある遺跡は適宜にトレンチを入れる場合もあるが、飯島町地内ではすべてグリッドを設定している。グリッドの設定は、2m間隔の基準方眼を設定し、中央道の長軸方向に対して01-99の2桁の数字を用い、それに直交する方向にA-Yの25字のアルファベットを用いて区分した。その数え方は名古屋方面から東京方面に向かって立った時、左から右へ01-99とする。ただし道路のセンターライン（20mおきに中心杭が打たれている）を50とする。だからセンターを基準にして、左右に98mの幅がとれる。アルファベットは中心杭のうち、当該遺跡内で最も名古屋寄りを中心として、東京方面へABC……の区域を設定する。A-Yの25文字で50mづつに区切り、その範囲を地区としておき、それもまたABC……と表示する。これによって最大25地区 1,250mがとれる。だからそれぞれのグリッド地点は「YZABH50」というように表示する。この記号は、山崎遺跡B地区H50地点ということになる。このようにグリッドを設定してから、適宜グリッドを掘り、遺跡が確認されたらそのまわりを広げていくという方針に従っている。各遺跡ごとに主任調査員を決めて、グリッド図を記録し、調査主任は「調査日誌」を、各調査員はそれぞれ分担された遺構について、「調査記録」「住居址調査カード」「古墳調査カード」を使用していく。

なお、ごまかな検査方法については、「長野県中央道埋蔵文化財発掘調査指針」という小冊子にまとめ、それをもとにして調査を進めている。

また調査中、調査員の努力によって「調査速報」を日刊によって発行し、作業員の方々に発掘調査の進行状況、調査結果を理解してもらうとともに、その日その日のエピソードも適宜に記載され、毎日の楽しみのひとつとなっている。

## II 飯島地区の概況

### 1. 飯島地区の環境

飯島町は、上伊那郡の最南端に位置しており、町内が飯島・本郷・日善利・田切・七久保の五地区に分かれている。総面積92.52km<sup>2</sup>で、東西16.3km、南北9.3kmの東西に長い地域である。このうち、日善利地区を除いては天竜川の右岸に位置し、西に木曾山脈の南駒ヶ岳・越百山・念丈岳とその前山を背負って、東方に傾斜した地形を示している。この山中から流れ出る中田切川・郷沢川・与田切川・前沢川の諸河川とその支流によって形成された複合扇状地が山麓に並び、その下方に続く何段かの河成段丘面は、古くからの生活の舞台となっている。

江戸時代には、江戸幕府直轄領を支配する飯島代官所がこの地におかれ、寛文12年から慶応3年まで約190年の長きにわたって陣屋が存在していた。その後、明治元年伊那県庁の所在地となり、同5年筑摩県の管轄下となり、さらに、同8年飯島・石曾根・田切・本郷の旧4か村が合併されて飯島村が成立した。その後、田切・本郷が一時分村したが、明治22年、町村制の施行により再び3か村が合併して飯島村が成立している。南側に位置する七久保地区は、古くは旧片桐村・旧南向村葛島（現中川村）と旧上片桐村（現松川町分）を含んでいたが、明治22年の町村制施行の折には、七久保村・片桐村・上片桐村の3か村に分離している。昭和29年に飯島村は町制を施行して飯島町が生まれ、昭和31年9月、町村合併により旧七久保村と合同合併により現在の飯島町が成立している。

上伊那郡から下伊那郡にかけての伊那盆地は、西の木曾山脈と東の伊那山脈の間を南流する天竜川流域に形成された谷状盆地であって、天竜川の流路に沿って南北に長く、北部は上伊那郡辰野町から、南部は飯田市川路地籍の天竜峡にまで続いている。上伊那郡においては、この伊那盆地を地理区分して、辰野町から伊那市にいたる北部地域、伊那市南部の小黒川から駒ヶ根市北部の大田切川までの中部地域、大田切川右岸地域（駒ヶ根市北部）から飯島町の南側の郡境にいたる南部地域に分かれている。飯島町は、南部地域の南部に属し、飯島町のほぼ中央を東流する与田切川によって、飯島地区と七久保地区に分かれ、地理的にも風俗的にも上・下伊那地方の接触地域としての特色を持っている。

上伊那郡の東部地域を見ると、開折度の最も進んだ所であって、地形は、非常に複雑な所である。天竜川の右岸地域（竜西地域）の山麓扇状地面は広く、標高600～800mあたりに発達し、これら扇状地面がいくつも連っている。中央自動車道は、これら扇状地の上方、山麓に近いあたりを通過している。

伊那盆地では、天竜川の両岸に数段の河岸段丘が連っている。下伊那地方においては、両岸対称的に見られるが、上伊那郡ではその例は少ない。この東部地域の左右岸を見くらべるといもじるしく非対称が感じられるのもこの地域の特長のひとつである。伊那盆地を特長づける地形のひとつに田切地形があるが、

この宮部地域では、典型的な田切地形を見ることができ。田切地形とは、天竜川の支流のうち木曾山脈から伊那盆地底にむかって急流でた<sup>り</sup>り落ちているいくつかの河川が、山麓に広大な扇状地を形成したがその後、盆地面の隆起にもなってこれらの扇状地をみずから浸食して、兩岸を深く切りとったような田切地形を生んだものといわれている。国道153号線を飯田方面から北上すると、七久保地区と飯島地区に関する与田切川、飯島町と駒ヶ根市に関する中田切川の下流岸に画する垂直に近く切り立った深く広い崩壊面を見ることができ、兩岸の段丘崖と明度の高い河原の調和は、この地域の景観のひとつでもある。この田切地形は、古来から交通上の大きな障害点であって、現在でも、道路も鉄道も大きくU字状に迂回し、一上一のコースをとらざるを得なくなっている。これらの河川を迂回することなしに、真直に越える道路の建設は、中央自動車道がはじめてであろう。飯島地区と七久保地区を横する与田切川によって田切られ所を曲下りして下すの口影坂は、俗称七世りとも呼ばれて交通の難所として有名である。飯島町から駒ヶ根市にかけては、これら典型的な田切地形が各所で見られるが、飯田線の電車の車窓から見るとそのようすがよくわかる。伊那大島から松川を越える迂回路を通過して上片桐・伊那田島・高遠原駅を過ぎるあたりから、切り立った段丘崖が東側に見える。ここを流れる川は、H向沢川で水量も多くなく川幅は狭い。ところが、段丘先端部は深く切り立っている。一時的な水量になることが予想される。この川を越えると、七久保の段丘面が開け、水田地帯が広々と続いている。七久保駅を過ぎてもまだこの水田地帯は続く。やがて正面にローム面の露出する台地に近づくと、電車は東へ大きく迂回をはじめ。左はローム層の浅い台地、右は低地に面した雑木林である。段丘の先端部に近づくと車は北に向きを変えて、本郷駅に到着する。ここは、天竜川から数えて2段目の段丘崖下である。伊那本郷駅の北は、与田切川に面する段丘崖で、木の茂越しに、飯島地区の段丘面がのぞめるが、この間に深い谷があるとは見えない。車が段丘先端に近づくと、突如眼下に与田切川の谷が開ける。下流には、赤々とした崩壊面が広く深く続いて危険感さえ覚えるほどである。電車は、左折して西上する。崖下に国道153号線が見え、車も西へ西へと川上へのぼっている。与田切橋の下流で鉄橋を渡るが、国道の渡河点はさらに100m上流である。電車も自動車も又大きく迂回して飯島の段丘面にのぼっていく。七久保面と同じような広々とした段丘面に出ると、そこが飯島駅である。飯島駅を出ると間もなく、正面に見える台地をまた東へ迂回し始めるのも、前と同様である。段丘先端を回り終ると、出切段丘の中腹を北に向い、ここで又国道153号線と立体交差して田切駅に上る。この田切駅は、中田切川に面する段丘先端にあって、ここでは木の間にぐれに、中田切川の深い浸食谷が見え、切り立った崩壊面も見ることができ。駅を出ると、西に迂回をはじめ、中田切川の氾濫原を見ながら、U字状のコースをとって中田切川を渡っていく。国道は、崖下をほぼ平行して曲り、互に曲線を描きながら駒ヶ根市福岡の段丘面にのぼり切るのは、前と同じで、このような編返しを経て北上していかなくてはならない。また、これら田切地形は、古くから地区の境界線になっていることが多く、宮田村と駒ヶ根市を分つ大田切川、駒ヶ根市と飯島町を分つ中田切川、飯島町飯島と七久保を分つ与田切川は、その典型的なものである。また、古くは、この深い谷は左右対岸にある地域の交流を妨げ、人々の風俗習慣を生む原因のひとつにさえなつたと言われている。段丘上の礫を見ると、ほとんど丸い花崗岩系の大塊で、地表面に露出している所も多い。成層状況も不完全で、砂礫・粘土・ローム層等不規則な堆積の所も多い。

飯島地区の地形を概観すると、西は越百山(2,613m)・東駒ヶ岳(2,842m)にまで続く山地帯がやく

8 kmにわたって広がり、その山麓には中田切川と与田切川を主にして形成された扇状地と、その下方に続く3段の段丘面が天竜川に面する段丘麓まで3 km余り続いている。北は、中田切川によって田切られた段丘麓を経て駒ヶ根市に達し、南は与田切川によって七久保地区に埋されている。北の中田切川、南の与田切川の間に形成された古い扇状地は、再びこれらの河川と、その中間を流れる郷沢川・大田沢によって浸食が進められ、加えるに、山地帯の隆起運動のために傾斜が急流となり、開析が進む。そのため、砂礫の流出が著しく、この土砂が山麓に堆積されて再び新しい扇状地が各地に形成されている。現在でも、中田切川は急流で、与田切川とともに、上流での洗掘がはなはだしく、雨期には土砂や大転石を下流に堆積する川で、中・下流に崩壊地が多く見られる。田切北河原の水田地帯は、現河床堆積物の所が広い。新しい扇状地は、岩間西部山麓付近、高尾郷沢川流路沿い、大田沢、石曾根面、田切地区と低位段丘上にあり、古い扇状地は、岩間面に広く高尾地帯の中央部に帯状に残っている。特に高尾地区は、古い扇状地が郷沢川の支流に浸食されて起伏の多い地形を示している。帯状に東へ伸びる古い扇状地地上には、ローム層の堆積が厚く、郷沢橋北側で国道がこの台地を穿り割っているが、この崖面では、厚いローム層と数層に走る浮石層を観察することができる。この台地は更に南へ伸びて、南田切の上段に接している。この北側に位置する田切地帯は、数段の段丘を形成して中田切川に面している。郷沢川下流と与田切川に間する石曾根面は、飯島地帯とともに広い段丘面で、上段々丘麓下には飯島市街地が帯状に発達し、その東一帯は、上段岩間面と共に水田耕作の中心地になっている。

中央自動車道は、山麓に近い扇状地の頂部を横切っているため、立地の良悪の差がめだっていた。与田切川左岸地上のうどん坂南地帯は、転石の多い砂礫質成層が存在し、岩間地帯の山溝遺跡E地点は、厚く堆積した黒色砂質成層に遺構が存在し、新しい扇状地の様相を示しており、高尾地帯の庚申平遺跡においては、上部ローム層に遺構が埋りこまれている。

(参考文献 上伊那誌自然篇)

## 2. 飯島・田辺地区の遺跡

飯島町内の遺跡は、現在判明したもので100遺跡である。その内訳をみると、七久保地区31遺跡、本郷地区19遺跡、飯島地区22遺跡、田切地区21遺跡、鳥居原に3遺跡、日曾利地帯に3遺跡となっている。今回発掘調査の対象となった飯島・田切地区の遺跡を中心にして紹介することにする。この両地区(含鳥居原)47遺跡中、従来の記録や表面採集調査と今回の中央道用地内発掘調査とによって確認された範囲内では、先土器時代1、縄文時代早期7、同前期3、同中期43、同後期4、同晩期8、弥生時代中期1、同後期6、古墳・平安時代合わせて7遺跡となっているが、発掘調査によってその内容は大きく変動することが多いので、調査が進むにつれて更に明確になるであろう。

### 1) 岩間地区上段の遺跡(1図、10~14)

中央自動車道の通過点より西方上段台地上に5遺跡の存在が認められる。主として縄文時代中期が主体

であるが、台地中央部上山遺跡(10)では縄文時代早期、前期の土器片が確認され、北側中原遺跡(14)においては、押型文土器片も採集されている。この台地の開墾当時相当の出土量が伝えられ、勾玉らしいものが出たとの話もあり、今後の調査に期待される所である。

## 2) 扇状地上部と段丘岩間面(岩間・上の原・赤坂)の遺跡(1図、1~4・15~20)

中央自動車道通過地から、飯島市街地上の段丘先端部まで1.5kmにわたって扇状台地が続いているが、その面積の割に遺跡の存在が少ないのは、水出の多いためであろう。点々と散在する野菜園や果樹園で土器片の発見も見られるので、今後に期待される地域であろう。用地内遺跡については本文参照とするが、うどん坂南遺跡の縄文時代早期茅山式土器、うどん坂Ⅱ遺跡の縄文時代晩期の榎王式土器の集中、山溝遺跡の縄文時代中期の集落、縄文時代後期の住居址と土器片多量、平安時代の住居址の発見、うどん坂Ⅰ遺跡用地外での縄文時代中期土器片の発見が特筆されよう。大正新田(15)はその名のように、大正年代開墾された地域で、開墾の際土器片の出土が伝えられている。台地中央部から飯島小学校にかけて上の原(16)は、体育館建設工事に須恵器片が出土し、西上方地帯からの取上中多量の縄文時代中期土器片を発見している。山溝遺跡の東、郷沢川上流に面する丘陵上に岩間城遺跡(17)がある。ここは、中世岩間氏の居館址でもあり、この附近から縄文時代中期の土器片をはじめ、石棒・打石器・磨製玉器等の出土があり、その他弥生時代の打製石庖丁と平安時代以降の大形長首瓶が出土している。山溝遺跡の東台地上に岩間中通遺跡(18)があり、縄文時代早期の楕円押型文土器片のほか、石鏡・有孔珠・磨製石斧等発見されている。この北側、郷沢川支流間にはさまれた台地上に岩間鉾の面遺跡(19)があり、その東方に赤坂遺跡があり、ともに縄文時代中期土器片が出土している。

## 3) 高尾丘陵と太田沢に面する遺跡(1図、5~9・21~32)

高尾地区上段から長峯状の丘陵が下位段丘にまで続いている。その丘陵をはさむように郷沢川・太田沢やその支流の孫太沢・田の溝沢・小胡桃沢・本沢等が東流し、下流ほど深くきりこんでいる。遺跡の多くは、これらの丘陵の南側に立地しているが、久根平丘陵の北面台地や、それら丘陵間の凹地にも遺跡がある。中央道より上段に柳島(26)・杓子ケ窪(21)遺跡がある。ともに縄文時代中期の土器片が採集される。郷沢川上流と孫太沢の間に東面する数本の丘陵が高尾原遺跡であるが、面積が広くまた遺物の包蔵も豊かな所であるので、第1(24)・第2(23)・第3(22)に分けている。孫太沢の南に続く丘陵が第1で、縄文時代中期の土器片出土が多く、多量の石鏡のほか、石器各種のほか、後期と思われる円板状耳飾りが出土し、や・東側において、昭和37年に弥生時代後期の住居址が発見されている。郷沢川に近い南面台地を高尾原第2と呼んでいる。織物を含む縄文時代早期土器片をはじめ、中期のもの、桑皮を持つ土器片の発見が伝えられる。この台地の上方、中央道に近い所が第3地点で、縄文中期の遺跡である。この丘陵の東、国道で切りとられた台地上に陣場遺跡(25)があり、縄文中期の土器片が採集される。

太田沢と孫太沢にはさまれた丘陵上に田切中原遺跡(28)があり、縄文時代前期・中期の土器片が多く晩期の土器片の出土も伝えられ、石器類も多く、石剣・石棒・磨製玉器等の出土もあってこの地区の重



要遺跡のひとつであろう。ここから南に田切町谷遺跡(27)がある。縄文時代中期初頭の土器片のほか、石匙・石棒・磨石斧の出土もあり、滑車型土製耳飾りの出土も伝えられている。

久根平丘陵と中原台地の中間に、東西に続く低地が太田の沢で、遺跡立地としては不適と見えるが、縄文中期後半から、後期・晩期の土器片をはじめ、石棒・定角式磨製石斧・心形磨製石斧・石鏃等の出土も多く、特に埋篋の形状をとった縄文時代晩期の糸織文を持つ深鉢が発見されている。中央付近近を太田の沢春日平(8)、その下方地域の遺物集積地を太田の沢(29)遺跡と区分した。この低地北側の丘陵上に久根平(9)と久根平東遺跡(30)があり、縄文中期土器片が採集されている。久根平東遺跡では、縄文早期の竹管文を持つ薄手の土器片とスクレーパーの発見が伝えられている。この丘陵下方には山の神遺跡(31)と孔子廟(上の山)遺跡(32)のあり、ともに縄文中期の遺跡と思われる。

#### 4) 下位段丘石曾根面と田切段丘の遺跡(1図、33~43)

飯島駅から東一帯の段丘石曾根面は広いが、確認された遺跡は、石曾根堂前(33)・天野(34)遺跡にとどまり、縄文中期の遺物が発見されている。広く水田地帯の続く所で、今後発見される遺跡もあろう。

野沢川左岸には、高尾丘陵に続く台地がある。ここに原塚遺跡(35)、その下段崖田切地帯に平沢遺跡(42)、原塚外遺跡(43)があり、ともに縄文時代中期の遺物が発見されている。

国道153号線以東には、春日半中原に続く丘陵がのびている。この丘陵上に、西から聖徳寺遺跡(36)、追引(37)、南割遺跡(38)が続き、縄文時代中期の遺物が発見されている。追引遺跡においては、縄文後期の土器片、石器のほか、弥生時代後期中島式土器と有子磨製石鏃が発見されている。この丘陵の北下に中田切川の形成した北河原地帯の沖積地があり、ここに北河原遺跡(39)がある。土器片の発見は聞かないが打石斧が出土している。ここから東、中田切川と太田沢の浸食活動で残された月夜平残丘がある。この残丘上に田切月夜平遺跡(41)と、その南の沖積地上に中平遺跡(40)がある。月夜平からは打石斧が、中平からは、石鏃・打石斧・磨石斧の発見が伝えられる。

#### 5) 鳥居原の遺跡(1図、44~47)

東に天竜川、南に与田切川の段丘崖をのぞむ段丘上にあり、与田切川に置した傾斜地に、トヤゴ(45)と小段遺跡(44)があり、この鳥居原小段から土師器・須恵器片の出土が伝えられている。天竜川に面する段丘崖上にトヤゴ城址(47)、天竜川にかかる日曾利橋の西に張り出した台地の先端に唐沢城址(46)がある。明治20年の開田の折に刀の鋤と槍先が、昭和28年に焼土と共に和銃が、昭和44年に田の改修工事中、北宋銭が8枚発見されている。

(参考文献 信濃考古総覧、林茂樹著 上伊那の考古学的調査、伊藤修編 飯島町の遺跡 農業振興等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書一昭和45年度)

飯島町飯島・田切地区遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	先土器時代	縄文時代						弥生時代				古墳・平安時代				中世	備考
				草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期	七尾部	東尾部	沃部	その他			
1	うどん飯Ⅱ	飯島町飯島岩		○	○		○		○										
2	うどん飯Ⅲ	＊ ＊ ＊					○		○										
3	うどん飯Ⅰ	＊ ＊ ＊					○												
4	山 満	＊ ＊ ＊					○	○					○	○	○			○	
5	八 幡 社	＊ ＊ 高尾					○												
6	石上神社	＊ ＊ ＊			○								○						
7	庚 中 平	＊ 田切					○												
8	太田沢春日平	＊ ＊ ＊					○	○	○		○		○						
9	久 根 平	＊ ＊ ＊					○												
10	岩 間 上 山	＊ 飯島岩間	○		○	○													
11	滝 の 沢	＊ ＊ ＊					○												
12	宮 の 平	＊ ＊ ＊					○												
13	飯 島 天 伯	＊ ＊ ＊ ＊					○												
14	岩 間 中 原	＊ ＊ ＊ ＊			○		○												
15	大 正 新 田	＊ ＊ ＊ ＊					○		○										
16	上 の 原	＊ ＊ ＊ ＊					○												
17	岩間城(可谷)	＊ ＊ ＊ ＊					○		○				○		○				
18	岩 間 中 通	＊ ＊ ＊ ＊			○		○												
19	岩 間 跡 の 面	＊ ＊ ＊ ＊					○												
20	岩 間 赤 坂	＊ ＊ ＊ 赤坂					○												
21	杓子ヶ窪	＊ ＊ 高尾					○												
22	高尾第3	＊ ＊ ＊ ＊					○												
23	＊ 第2	＊ ＊ ＊ ＊					○		○										
24	＊ 第1	＊ ＊ ＊ ＊						○											住居址
25	神 満	＊ ＊ ＊ ＊					○						○						
26	柳 橋	＊ 田切					○												
27	田 切 町 谷	＊ ＊ ＊					○		○										
28	春日平中原	＊ ＊ ＊ ＊					○	○	○										
29	太田の沢	＊ ＊ ＊ ＊					○		○					○					
30	久根平東	＊ ＊ ＊ ＊			○		○												
31	山 の 神	＊ ＊ ＊ ＊					○												
32	孔 ？ 窟	＊ ＊ ＊ ＊					○												
33	石笠根堂前	＊ ＊ ＊ ＊					○						○						
34	大 野	＊ ＊ ＊ ＊					○												
35	原 畑	＊ ＊ ＊ ＊					○												
36	聖 徳 寺	＊ ＊ ＊ ＊					○												
37	通 引	＊ ＊ ＊ ＊					○	○											
38	南 割	＊ ＊ ＊ ＊					○						○						
39	北 河 原	＊ ＊ ＊ ＊					○												
40	中 平	＊ ＊ ＊ ＊					○												
41	田切川夜平	＊ ＊ ＊ ＊					○												
42	平 沢	＊ ＊ ＊ ＊					○												
43	飯 沢 外	＊ ＊ ＊ ＊					○												
44	小 段	＊ 鳥沢原					○												
45	トヤゴ	＊ ＊ ＊ ＊					○						○	○					
46	唐 沢 城 址	＊ ＊ ＊ ＊																	
47	トヤゴ城址	＊ ＊ ＊ ＊																	

### Ⅲ 調査遺跡

#### 1. うどん坂南遺跡

##### 1) 位置

遺跡は上伊那郡飯島町岩間2880-715～716番地にある(図2-1、写3)。与田切川北岸の段丘上の東面にのびる帯状の台地に位置する。与田切川からの比高約45m、標高733m～738mである。南は急崖をなして与田切川におちこみ、北には小さな沢があり、凹地となっている。西はなだらかに山麓にのび、東もなだらかにのびている。遺跡は現在、果樹園と畑地となっている。中夫道はこの台地を東北に横断している。

グリットはセンター杭 32580をAAとし、AWまで42～58の間に設定した。

地層は、上から耕作土・黒色土・褐色土・ローム層の順である。ローム層までの深さは約50cmである。

##### 2) 遺構と遺物(図6、26)

遺構は、中央道用地内のほぼ中央に、ピットと焼土が検出された(図6)。ピットは径50cm～100cmの円形あるいは楕円形で、深さはまちまちである。焼土は褐色土内にあり、あまり厚くなく、多少炭がまじっていた。

遺物は、焼土、ピットの附近の褐色土層内より20点余りがやや集中して出土した。区25は縄文時代早期の茅山式土器の破片である。この他に縄文時代中期の土器片がわずかに出土している。石器(図26)は、ポイント(2)・石鏃(3～6)などが出土している。

##### 3) まとめ

うどん坂南遺跡は、縄文時代後期の遺跡と考えられていたが、今回の調査では予想に反して、縄文時代早期の茅山系の土器片、石器が出土した。与田切川の急崖上にあり、風あたりもよく、表土の堆積が浅く長年の耕作などによって、遺跡はそうとう破壊されていると思われる。遺跡の中心は中央道用地外西方の山麓にあるものと思われる。

(伊藤)

## 2. うどん坂Ⅱ遺跡

### 1) 位置

遺跡は上伊那郡飯島町岩間2940～2948番地にある(図2-3、写4)。上の原部落の西方、木曾山脈の山麓にひろがる扇状地上に位置する。この扇状地上には北東に向かって何本かの低い台地がのびている。遺跡はこのような台地上にある。標高716m～722mである。遺跡は大正時代に開田されている。

グリットは33130をAAとして、CNまで42～52の間に設定し、B区はほぼ全面発掘した。

地層は、地点によって異なるが、上から水田耕作土・埋土・黒色土・黒褐色土・ローム層の順となっている。

### 2) 遺構と遺物(図27～33、写5～6)

調査の結果、B区を中心として、縄文時代晩期の土器片、石器が大量に出土した。褐色土からローム層にかけて、土壌あるいはピットと思われる落ち込みがあったが、自然にできたものか、人為的なものかはっきりしない。

遺物 出土土器は、弥生時代後期の土器片を数点のぞいて、大部分は縄文時代晩期の条痕文土器である(図27～33)。遺物は黒色土から黒褐色土上面にかけて多く出土した。

土器片は小さな破片が多く、器形の復元はできないが、おそらく深鉢が多いものと思われる。土器は粗製のものが多く、文様によって、(1)条痕文のあるもの(図27、28、29、30、31の1～22・25～28、32、33の17・19～23)。(2)口縁部に沈線をめぐらしたもの(図31の35～37・32の1～10)。(3)無文のもの(図32の11～34・33の1～9)の三類に大別される。(1)は器厚5mm～10mmで、7mm前後のものが多い。胎土はやや粗く、石英・長石などの粒子が多く含まれている。焼きは比較的良く、色調は暗褐色、あるいは茶褐色を呈している。条痕は貝殻腹縁によるものが大部分であるが、中には図30の54～58のように縄維束状工具によるものや、図30の59～62のように擦痕の上に、深く、直線や曲線の条痕を走らせるものや、図31の1～18のように擦痕のみのものもある。条痕文は横走するものと、やや斜走するものも多く、条痕文の深く力強いものが多い。また、口縁部が盤形のために外側にはみだしているものが多い。図31の25～28、(写5-1)は口縁部に押圧を施した断面三角形あるいは台形の突帯をめぐらしている。図27の28、図31の2は口唇部に押圧を施したものである。口縁部に沈線をめぐらした(2)は、沈線の口が広く、浅いものが多い。沈線は一本のものや、何本かめぐらしたものがあつた。図31の1は口唇部に小突起をもち、不規則な4本の沈線をめぐらし、肩の部分は張っている。胴部以下は擦痕が施されている。これらの沈線をめぐらした一群は、器厚5mm～10mmで胎土は条痕文のものと同様で、石英・長石などは含まず、器底は丸整形してある。色調は暗褐色・黒褐色のものが多い。(3)の無文のものは器厚5mm～10mmで、胎土に

わずかに石英・長石を含むものもある。色調は暗褐色・茶褐色を呈し、器面は篋整形されているものが多い。量的には(1)がだぜん多く、(2)・(3)はわずかである。

図33の22~36は底部破片である。図33の37は弥生時代後期の口縁部破片である。

石器(図34・35)は、打石斧がもっとも多く、ほとんどが短冊形石斧である。その他に横刃形石器(図34の32~34)、礮石(35)、磨石斧、円石(図34の37、図35の1~2)、石鏃(3~13)、ドリル(14)、有舌尖頭器(16)、スクレーパー(17・18)、滑石製勾玉(19)などがある。

### 3) まとめ

調査の結果、狭い範囲から多くの縄文時代晩期終末の遺物を採集することができたのは、大きな成果である。

遺物はB区の限られた範囲から大量に出土している。出土石器は東海地方縄文時代晩期の集痕文土器が主体をなし、その他に氷式に類似したものがわずかに出土している。伊那谷のこの期の調査例が少ないので、学界に新知見をもたらすものとなろう。

中央道用地の西端に遺物が集中していることから考えて、遺跡の中心は用地外西側の水田あたりにあるものと思われる。

(伊藤)

### 3. うどん坂Ⅰ遺跡

#### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡飯島町岩間2936番地にある(図2-2、写4)。木曾山脈山麓の天白段丘の下に位置する。標高714m～718mである。遺跡の北東は凹地となり、北西には山溝遺跡、南にはうどん坂Ⅱ遺跡がある。遺跡の中心は段丘直下であり、中央道は遺跡の東端をわずかにかすめて南北に横断する。

グリットはセンター杭33320をAAとし、AVまで39～50の間に設定した。

地層は地点によって異なるが、大略上から水田耕作土・黒褐色土・褐色土とつづき、その下は遺跡の西側ではローム層、東側では礫層となる。

#### 2) 遺 物

調査の結果、遺構は確認されず、摩滅のはなはだしい縄文時代中期加曾利E式土器片と思われるもの1点と、打石斧が1点出土したのみである。

#### 3) まとめ

うどん坂Ⅱ遺跡と同様に大正時代の開田の時、相当量の遺物が出土したという。開墾に関係した井戸氏の話しによると、縄文時代中期の土器と思われる。

遺跡の中心は中央道用地の西側、天白段丘下の一段高いところにあるために、破壊をまぬがれることになった。(友野)

## 4. 山 溝 遺 跡

### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡飯島町岩間2920～2926、3194～3205番地にある(図3-4、写7)。木曾山脈山麓、天白段丘下の小さな平坦部(B区)と本沢川の扇状地上(E区)に位置する。標高708m～714mである。

グリットはセンター杭33590をAAとし、D/Hまで42～67の間に設定し、B区42～50、E区47～64は全面発掘した。

B区は天白段丘下の巾約40m、長さ約60mの平坦部であり、南と東に向かってわずかに傾斜している。

地層は傾斜地にあるために地点によって異なるが、大略上から表土、黒色土・茶褐色土・黒褐色土・褐色土・ローム層の順である。ローム層までの深さは浅いところで30cmであり、南へいくほど深くなる。

ここに以前、三熊神社と東谷寺が建っていたが、明治42年に石上神社に合祀されている。

E区は本沢川の扇状地である。この扇状地は巾およそ120m、南と北の沢からの比高約2mの独立丘をなしている。中央道はこの扇状地の原端部近くを南北に横断している。

地層は、表土・黒褐色土・黒色土・茶褐色土の順に堆積している。すべて砂質土層であり、各層の色調土質が類似しているために識別はなかなかむずかしい。

### 2) 遺構と遺物

#### ア B 地区

縄文時代の住居址7軒が検出され、うち、2・4・7号住居址は黒色土層中に検出され、他はローム層を掘りこんであった。遺跡の北端に土壌群があった。

#### ア) 住 居 址

##### A 1号住居址(図8-1、36-1～7、46-1、写9-1)

遺構 3号住居址の南に、炉が露出していたもので、住居址のほとんどは道路、耕作によって破壊され、炉のみが残存している状態であった。炉址は約55cmのほぼ円形を呈し、ローム層をやや掘り込んで、まわりに長方形の礎を立て、中に平石を敷いてある。炉石は、平石・炉縁石それぞれ焼けているものもあった。炉址のまわりの床面と思われる面は、硬くなかった。

遺物 炉の周辺から出土したものをあげたが、たぶん流動的であるし少ない。土器(区36-1-6)は、いずれも縄文時代中期加曾利E式土器の破片である。縄代底(区36-7)が1片出土している。石器(図46-1)は、黒曜石製の石鏃である。

#### B. 2号住居址(8-2、36-8~12、48-1、写9-2)

遺構 B地区の西端にあり、炉址のみ検出されたもので、黒色土層に造られている。炉石は15~25cmの花崗岩を使用し、中央底面には、1個体の変形土器が敷いてあった。また、石はほとんどが焼けており、熱のためにもろくなっているものもあった。炉址の大きさは約53cmの円形と推定される。

遺物 出土量は少なく、区48-1は、炉内に敷いてあったものである。口縁が内寄する深鉢形土器で、太い竹筴状工具で沈線がえがいている。成成は良好である。区36-8~12は、縄文時代中期加曾利E式土器片である。

#### C. 3号住居址(図8-3、36-13~43、46-2~4、写10-2)

遺構 遺跡の東端、5号住居址の東側にはば接してある。住居址の東半分は耕作により破壊されており不明である。残存部分から短径3.3mの楕円形を呈すると思われる。壁は良好ではっきりしており、壁高は北で28cm、南で5cm、西は15cmを計る。床面は硬く良好でやや南東に傾斜している。炉はやや西北寄りになって、炉石はぬかれてないが、その掘り込みから見て、楕円形の石匠炉と思われる。内部には約2cm程の厚さに焼土があり、焼土のまわりには炭が多くみられた。

遺物 住居址の約半分が、はっきりしないために遺物の出土量は少ない。すべて縄文時代中期加曾利E式土器の破片である(区36-13~43)。石器(図46-2~4)は、打石斧(2・3)と横刃形石器(4)が出土している。

#### D. 4号住居址(図9-1、37-1~8、写9-5)

遺構 1号住居址の南、約6mにあり、黒色土層に検出された。40cm×40cmの小方形石匠炉で、内部には平石を敷きつめるもので、炉石は、花崗岩と砂岩でほとんど焼けている。

遺物 遺構が炉のみの検出であり、黒色土層であり、本址に伴うと考えられる遺物は限定され、少ない。土器(図37-1~8)は、縄文時代中期加曾利E式土器の破片である。石器は小さな打石斧の破片が出土しているだけである。

#### E. 5号住居址(図8-4、38~40、46-5~20、124-1・10、写10-1)

遺構 3号住居址の西側に検出されたもので、5.15m×4.70mのほぼ円形を呈する。壁は南側が低くはつきりしないが、他は良好である。壁高は北で33cm、西で22cm、東と南では5cmを計る。床面は南側がや



やはっきりしないが、他は硬く良好である。部分的に炭の混入するうすい層が認められ、また補修をしたと思われる個所があった。炉址は中央よりやや北西寄にあり、住居址より新しい土壌によって破壊されているが、石囲炉と思われる。わずかに焼土と炭化物が認められた。炉の西北に袋状のビツがあり、内部から縄文時代中期の土器片が出土している。

遺物 B地区で最も遺物の多い住居址である。土器(図38~40)は、縄文時代中期加曾利E式土器である。図40-6~10は、釣手土器の釣手部の破片であり、8・9は同一個体のものかと思われる。図124-1は耳栓、10は土製円板である。石器(図46-5~20)は、打石斧(5~8、18~19)、横刃形石器(9~12、20)、大形石匕(13・14)があり、黒曜石製の刺片石器(15)、石鏃(16・17)も出土している。

#### F. 6号住居址(図9-2、41、46-21~26、124-11、写11-1)

遺構 B地区の北西にほとんど原形をとどめることない程に破壊されて検出されたもので、その残存部分より方形を呈するのではないかと思われる。本址の南に石垣遺構があり、これを構築する時に、破壊されたものと考えられる。ローム層を掘り込んであり、壁は北で20cmを計る。床面上には砂礫が認められ、硬く良好である。床面を切って直径1.9mの円形と思われる土壌が検出されたが、内部に多量の炭が混入しており、あるいは炭焼きの跡かと思われる。

遺物 遺構は、ほとんど原形をとどめないし、床面とおぼしき面の上部より出土した遺物を本址に伴なうものとした。土器(41)は、すべて縄文時代中期加曾利E式の深鉢形土器片である。石器(図46-21~26)は、打石斧(21~23)、磨石斧(24)、敲打器(25)、磨石(26)がある。

#### G. 7号住居址(図9-3、37-19~30、写9-3・4)

遺構 2号住居址の南に、炉址のみ検出されたものである。2号住居址と同じく黒色土層に築かれている。一辺約30cmのほぼ方形を呈し、炉礫石の内部には平石を敷きつめてあり、上部までこぼし大の礫がぎっしりつまっていた。石はすべて花崗岩であった。炉礫石の一部は焼けている。

遺物 炉址のみであったため本址に伴なう遺物かはっきりしないが、この附近から出土した土器(図37-19~30)をあげた。縄文時代中期加曾利E式土器の破片である。31は表裏に刺突文を施した把手状のものである。

### イ) 土 塚

#### A. 土塚1、2、3(図10-102、8-4、写10-1)

遺構、土塚1と2は、5号住居址と切りあって検出されたもので、土塚1・2の上には、5号住居址の床面とほぼ同一レベルに、厚さ約10cmに焼土が堆積していた。土塚1は、1.2m×1.1mのほぼ円形を呈し、深さ40cm、中には礫が落ちこんでいた。土塚2は、1.1m×0.9mのやや楕円形で、深さ50cm、中に礫

が2ヶあった。3は5号住居址の南東にほぼ接して検出され、1.1m×1.25mのやや楕円形で、深さ14cmを計る。

遺物 石器(図46-27-29)は、土壌内より出土した。打石斧(27-28)、横刃形石器(29)である。

#### B. 土壌群(図10-1、45-1、47-26、48-2、写11-2)

遺構 B区の北端で東から西に流れる本沢川の南縁に検出された。径50cm-90cmの土壌が集中してあったものである。土壌とともにローム面に焼土が約5cmほど堆積していた。北へやや袋状に入りこむ、深さ61cmの土壌内からは縄文時代中期加曾利E式土器片が出土している。また、焼土付近からヒスイの有孔大珠(硬玉製垂玉)が1点と、縄文時代中期加曾利E式の土器の胴下半部が立てであった。

遺物 土器(図45-1)は、深鉢形土器の下半部である。図48-2は、土壌内に集中して出土したものである。図47-26はヒスイの有孔大珠(硬玉製垂玉)である。両面から一孔が穿たれている。うす緑色をし、よくみがかれている。

#### ウ) 配石遺構(図11、写12)

遺構 本遺構は、B地区の住居址群の南側にある。本址に伴なうと思われる遺物はない。

配石1-5は、ほぼ同一形状を呈し、ある一定の間隔をもって検出された。配石の規模は径40cm-50cmの円形で、こぶし大から人頭大の花崗岩礫をつめ込んである。配石2は、耕作で破壊され石組状態はくずれているが、他の配石と同形態をとると考えられる。すべて黒色土層中にあり、石組内は硬いが、周囲は軟かい。焼土・炭化物は検出されなかった。配置の状態は、東西に長くあり、1と3、2と5の間は2m 3と4、4と5の間はそれぞれ3.3mを計り、これで1つの遺構とも考えられる。

配石6は、3号住居址の南に検出されたもので、ローム層上の茶褐色土層をやや掘り込んである。55cm×60cmのほぼ円形で、まわりに長方形の小礎を立て、内にはこぶし大の花崗岩及び砂岩をつめてある。炭が少々認められたが、礎は焼けていなかった。

#### エ) その他の遺物(図42-47、57-25、123-7、124-24-25)

住居址の検出された周辺から多くの遺物は出土し、縄文時代中期の遺物が主体である。

加曾利E式土器片(図42、43、44-2-12)がほとんどである。釣手部が多い。図123-7は土偶臀部である。図124-24・25は土製円板である。図57-25は灰細陶器の底部破片である。

石器(図47)はあまり出土していない。打石斧(1-18)、横刃形石器(19・20)、石匕(22、24)、21、22も石匕として使用されたものと思われる。磨石斧(25)、石鏃(28-32)、剥片石器(33・34)、石鏃(35・36)、石皿(37)などが出土している。なお、21-24はチャート製である。

## イ、E地区

E地区では、縄文時代中期の住居址17軒、平安時代の住居址2軒、土壌90以上、及び溝状遺構を検出した。遺構は、耕作土下の黒褐色土層を掘り込み、床面は灰色をおびた黄褐色土が混入した土層で、すべて砂質土である。

### ア) 住居址

#### A. 8号住居址 (図12-1、48-3~9、49-1、51-13、58-62、123-1、127、写15~17)

遺構 E地区の南端にあり、10号住居址に北壁の一部を切られている。5.4m×5.7mの円形である。北壁に土壌6がある。住居址の南西は耕作によって破壊されている。壁高は東で15cm、西で32cm、北10cmである。床面には、中央に小壇が集中しており、また、砂質のため軟弱な部分もあるが、硬い面もあり、やや東に傾斜している。炉は、中央やや北寄りにあり、小形の円形石囲炉である。炉内に焼土はないが、周囲には少量の焼土、炭が散在してあった。

遺物 出土量は比較的多かった(図48-3~9、49-1、51-13、図58-62)。復元可能なほぼ完形土器は9個体ある。うち、図48-7は底部を欠く深鉢形土器で、胴部に横帯区画文を施し、蛇体を思わせる把手がついている。焼成の良い土器である。3・4・6は深鉢形土器で、半載竹管による平行沈線文を主体とする。隆帯に押圧指痕文を施したもので、胎土は黒味をおびた灰褐色で比較的光るく、器厚はやや薄手である。5は頸部が外に鋭く突出しており、前者とやや器形が異なるが、施文は良く似ている。色調やや赤味をおびておりもろい。8・9、図49-1は、浅鉢形土器である。8は口縁部に隆帯をめぐらし、隆帯上に押圧指痕文を施したもので、3孔穿たれている。9は焼成良好で2孔穿たれている。図49-1は口縁に連続爪形文が施されており、底部を欠く。図51-13は、口縁に特徴があり、ゆるやかな波状で、内側から押し出している。胴部には横帯区画文を施した深鉢形土器である。破片は、半載竹管による平行沈線文を主体とするもの(図59-10、60-3~11、61)と、厚手で半載竹管による連続爪形文を施した抽象文的要素をもつもの(図59-1~9・15、62-1・2)。やはり厚手で区画文を施したもの(図58)とがある。扉内I式に比定されよう。みずみく状把手がある(図60-13・14)。図60-12は鈎手である。また、縄代底(図61-11・12)が2点出土しているが、本址に伴うかどうか疑問である。覆土出土の土器が多かった。

石器(図127)は覆土からの出土が多く、打石斧(5-13)、横刃形石器(14-17)鯨形の大形石ヒ(18-19)、横形の大形石ヒ(20)、チャート製の石ヒ(21)、磨石斧(23-26)がある。22は紐を通すかのように2孔が穿たれている石製品である。床面からは、打石斧(1・2)、横刃形石器(4)、磨石斧(3)が出土している。

#### B. 9号住居址(図12-2、49-2・3、63・64、124-12、126、128-1~14、写18・19)

遺構 8号住居址の西に検出された。10号住居址、土壌1に切られており、土壌1は10号住居址も切っ

ている。4.65m×4.2mの円形を呈し、東壁の一部は、10号住居址により破壊されて不明であるが、他の壁面も砂質のためはっきりしないが、良好である。築高は、北で20cm、東で20cm、西は22cmである。炉の北に土壌1が切り込んでいるため、その床面は破壊されている。床面には、こぶし大から人頭大の礫が混入しており、きわめて不安定である。炉址は中央のやや北寄りにあり、方形石囲炉である。焼土はない。住居址の中央部に礫と土器が集中してあった。

遺物 土器の出土量は多い。区上復元出来たものは2点しかない(図49-2・3)。2は高さ15cmの埴形土器である。3は深鉢形土器の胴下半で、横帯区重文が残る。この種の土器片の他に磚手で灰褐色を呈し、平行沈線文あるいは押し引き文を有するものがある(図64-2~35)。有子罎付土器片も出土している(図63-27・28)。124の12は土製円板である。覆土から、内側を向いて鼻が欠けている顔面把手が出土した(図126)。

石器(図128)は、打石斧(1~9)、石錘(12~13)、石鏝(14)、敲打器(10~11)が出土している。

#### C. 11号住居址(図13-1、49-4、65、124-13、128-19~24、写21)

遺構 9号住居址の西北、土壌2の南側に検出された。家屋の下にあったために、ほとんどプランは確認出来なかったが、柱穴と思われるピットと、炉址を検出した。円形と推定される。壁は南側にわずかに壁と考えられる部分があるが明確ではない。床面は、砂質土層のためにはっきりつかむことは、困難であって硬くなかった。炉は住居址の中央であろうと思われ、4個のやや長方形の礫を方形に組んだものである。この炉址とピットの配列状態により、住居址と考えたものである。

遺物 出土量は少ない。復元可能な深鉢土器(図49-4)が、床面に横につぶれて出土した。半截竹管による平行沈線文を施してある。この種の土器片(図65-28~41)は多い。押し引き及び連続爪形文を主体文様とした土器片(図65-1~20、45~47)がある。浅鉢形土器の口縁部破片(図65-42~43)も伴出している。土製円板(図124-13)が1点出土している。

石器(図128-19~24)は、打石斧(19~22)、横刃形石器(21・24)、石ヒ(23)がある。

#### D. 13号住居址(図23-2、写23)

遺構 12号住居址の東北、14号住居址の上に炉址のみ確認された。炉址は、14号住居址の床面上25cmにある。楕円形の石囲炉で、炉石はいずれも火をうけている。本住居址は、14号住居址の上に張床したものと考えられるが、調査段階でそれをつかむことは不可能であった。14号住居址より新しい。

遺物 本址に伴うと考えられるものはない。14号住居址と重複していると考えてよいであろう。

E. 14号住居址 (図13-2、49-5~13、50-1~3・5~7、66~71、123-2、124-2~3・14~15、129、138-26、写23、24)

遺構 東壁の一部が15号住居址に切られており、17号住居址の南にある。非常に遺物の多い住居址で、ほぼ全面にあり、横転してつぶれているものが多かった。プランは本遺跡では大きい方で、5.4m×5.45mの円形である。壁は良好で、壁高は北で10cm、南で30cm、西で30cm、東は37cmを計る。床面は砂質ではあるが硬く良好で平坦である。炉址は中央やや北寄り、やや長方形の小形石両炉で、炉石はいずれも内側に火をうけた跡が認められる。炉内に直径10cmの深鉢形土器の胴部が、直立して出土した。土器の周囲には焼土があった。土器は焼けて非常にもろくなっている。南壁に接したピット内には、1個体の土器が落ち込み、その上に、上からずり落ちたように石皿があった。また、西壁近くの釜状ピット内にも土器片が入っていた。

遺物 土器・石器ともに非常に出土量の多い住居址である。器形の判明しうるものは15個体ある (図49-5~13、50-1~3・5~7)のうち2つの浅鉢形土器 (図50-6・7)をのぞき、他は深鉢形土器であるが、中には筒形に近いものもある (図49-6~10)。この筒形に近い深鉢形土器は、縦の区画文 (6)、横帯区画文 (7~10)が施されている。この種の土器片は図66にある。図50-1・2は、蛇体文を施した把手が付き、胴部には荒い縄文を施したものである。3は、やや大形の深鉢形土器で文様に統一性はない。図49-13は、陰帯を抽象的に付したもので、区50-5は、無文で薄手の深鉢形土器である。図49-11は楕円形のつく深鉢形土器である。この種の土器の口縁に、図67-11~21・24~30のような文様がつくのではないだろうか。図50-7の浅鉢形土器は、黒味をおびた灰褐色を呈するやや薄手のもので、胎土、色からすると、図49-5・12等と同一系統かと思われる。復元は不可能であったが、破片の中に半截竹管による平行沈線文及び押し指痕文を主体とするもの (図68-19~33、69、70-1~7、71-1~5・8~9)の多いのが注意される。

土偶の胴部破片 (図123-2)、耳埴 (124-2)、円形土製品 (124-3)、土製円板 (124-14・15)なども出土している。

石器 (図129、138-26)は、覆土から打石斧 (図129-12~27)、横刃形石器 (28~35)、石乙 (36・37)、磨石 (41・43)がある。床面からは、打石斧 (図129-1~3)、横刃形石器 (4~6)、石鏃 (7)、剥片石器 (8・9)、石錐 (10)、大形石ヒ (11)、石皿 (図138-26)が出土している。

F. 15号住居址 (図14-1、72、123-3、124-16、130-1~2、写25)

遺構 14号住居址と16号住居址を切っている。東は掘瓦により壁は不明であり、西も16号住居址との切り合いのため不明である。プランは4.95mの円形と推定できる。壁は北と南とが明確にわかったのであるが、あまり良好ではない。壁高は南と北で15cm、西で20cm、東は28cmを計る。北側に壁から25cm~30cm離れて別溝が走るが、他には認められなかった。土層が砂質の上、耕作のために荒れていてますますプラン確認が困難であったが、東半分の床面は16号住居址の上に張床をしていると思われる。炉址は、中央やや西寄り、楕円形を呈し、大きな礫を平らな面の上に組んである。北と南の炉石がそれぞれ1つだけ

ている。炉内全体に骨片が、約3cm～5cmの厚さに堆積しており、中から黒琺瑯の剥片が出土している。炉付近には、焼土が多く認められた。一番東のピットには、壁に下の16号住居址にまで達する2ヶの花崗岩があった。火をうけたと思われ、また、ピットの中には焼土があった。14・16号住居址よりも新しい。

遺物 土器、石器の出土量はすくない。土器(図72)はいずれも破片である。1～8は、勝坂式に比定されようが、本址へ混入したものと思われる。9～34は、加曾利E式土器である。30は釣手土器の釣手部の一部である。石器は横刃形石器(図130-1-2)がある。土偶の左手(図123-3)が伴出した。土製円板(図124-6)が1点ある。

#### G. 16号住居址(図14-2、51-1、73、130-3-18、写26)

遺構 15号住居址の下に検出されたものである。西壁は15号住居址構築の時に削りとられているが、わずかに残っている。4.0m×3.7mの円形で、西壁は良好で壁高は22cmである。床面は、東にわずかに傾斜している。床面は黒褐色の砂土である。炉は、はじめ15号住居址の東側の焼土を伴うピットを本址のものと考えたが、レベルが高いためこれではないと考えた。床面の中央部にある焼土を炉と考えた方が良いと思う。焼土の西には、焼けた石があり、炉石が動かされたのかもしれない。焼土は薄くやや凹んでいた。

遺物 土器(図51-1、73)の、ほぼ器形の復元できるもの(図51-1)は、半截竹管による平行沈線文を施した深鉢形土器のみである。胴部にわずかな縄文がみられる。破片に同類の土器片(図73-18-28)と、区画文系の土器片(7-15)がある。いずれも勝坂式土器である。

石器(130-3-18)は、覆土から打石斧(9)、横刃形石器(10-16-18)、敲打器(17)が出土し、床面からは、横刃形石器(3)、大形石七(4・5)、石鏃(6)、礫器(7・8)が出土した。

#### H. 17号住居址(図15-1、51-2、74)

遺構 14号住居址の北60cmに円形の落ち込みが検出されたが、そのわずかな落ち込みが判明しただけで床面とおぼしき面は明らかでない。ただ、床面としたのは、柱穴と思われるピットが検出されたのと、深鉢形土器の胴部が直立で出土したためである。炉は破壊されたものと思われる。残存する壁より、直径4.05mの円形と推定される。

遺物 出土量はきわめてすくない。土器(図51-2)は、床面上に直立していた胴部である。これは縄文を地文とした半截竹管による平行沈線文を施したものである。破片も同類のものである(図74)。釣手が出土している(図74-25)。石器の出土はない。

#### I. 18号住居址(図15-1、51-2、74、123-4・124-4・17-20、130-19-34、写26)

遺構 17号住居址のすぐ西に検出されたものであるが、東半分は削りとられて残存しない。しかし、4.65m×4.06mのやや楕円形を呈するものと推定される。壁はやはり削りとられていると思われる。また、砂質土ではっきりしないが、壁高は北で5cm、西で13cmを残している。炉はやや楕円形の石匠炉で、東側に

大きな平石を利用して、炉内にわずかな焼土があった。

遺物 住居地の床面からの出土はすくなく、覆土からの出土が多い。本址に伴うと思われる遺物は、はっきりしないが、炉の形態からして、図75-24・28-38の土器が相当するものと思われる。他は勝板式土器であるが、混入したものと思われる。図123-4は土偶の胴部破片、図124-4は、床面から出土した滑車形耳栓、図124-17-20は土製円板である。

石器（図130-19-34）は、打石斧（19-23）、磨石斧（24）、横刃形石器（25-30）、石匕（31-32）、石鏃（33）、石鏃（34）が出土している。なお、31はチャート製、32は砂岩製である。

#### J. 19号住居地（図16-1、51-3、77・78、131-1-9、写27）

遺構 18号住居地の北東、七瀬7の北に接して検出された。プランは東側以外はかなりはっきりつめたが、砂質土のため壁はあまり良く残存していない。4.4m × 4.3mの円形である。壁高はいずれも10cmに満たない。床面は、やや東に傾斜している。床面は炉の周辺は硬くしまっている。また、炉の附近の床面には小石が多く混入していた。炉は長方形の石皿炉で、西の入口からみて奥にあたる場所の炉石は、長方形の平石を1つ用いている。炉内には炭、土器片が混入し、その下に焼土があった。また、炉の東側の床面にも焼土が認められた。

遺物 出土量はあまり多くない（図51-3、77・78）。完形土器はなくほとんど破片である。図78-1-3は、炉の周辺に一括して出土したものである。釣手部（図77-25）もある。加曾利E式土器である。

石器（図131-1-19）は、覆土から打石斧（7-14）、横刃形石器（15・16）、磨石斧（17）、敲打器（18）、縦形の大形石匕（19）があり、床面に打石斧（1-2）、乳棒状石斧（3）、石斧（4・5）、石鏃（6）が出土している。

#### K. 20号住居地（図16-2、51-4、79-82、124-21、131-20-28、写28）

遺構 17号住居地の北約5mのところ検出された。3.8m × 3.8mの円形を呈する。この住居地もやはり南壁の壁ははっきりしない。また、東壁は低く、ほとんどないといってもよいほどであるが、他は良好である。壁高は北で8cm、西で15cm、東で10cm、南は5cmを計る。炉の周辺及び柱穴の内側の床面は良好である。炉址は、中央やや北寄りに位置し、比較的小さい方形を呈し、焼土はないが炉石は花崗岩で火をうけたと思われ焼けている。

遺物 床面には少なく、覆土からの出土量が多かった（図51-4、79-82）。勝板式の深鉢形土器が多い。図51-4は、床面近くから出土した深鉢形土器の胴下部である。これは藤内Ⅱ式にみられる縦の区画文を施しており、焼成は良い。破片の中には横形文を施したもの（図79-28-29）がわずかにみくまれ、半截竹管による平行沈線文を施したもの（図81）がかなり伴出している点注意される。土製円板（図124-21）が1点出土している。

石器（図131-20-28）は、覆土から打石斧（20-24）、乳棒状石斧（25）、磨石斧（26）、横刃形石器（27-28）がある。

L. 21号居 (図17-1、51-5-10、83-86、132-1-18、写29-30)

遺構 20号住居址の北東にある。4.0m×3.4mの楕円形であるが、北から東と西へそれぞれ壁がはり出してめぐっている。しかし、このはり出し部と本址といかなる関係にあるかは、南側が切れていて不明であるために、明確にすることはできなかった。本址の壁は良好で、北で27cm、南で13cm、東で7cm、西は15cmである。床は全面硬く平坦で良好であり、ピットもよくわかった。中央北寄りに炉があり方形で小さい。炉石は焼けておらず、焼土もない。炉の東側の平石は赤く焼けていた。台石かと思われる。炉の周辺に土器が集中して検出され、完形土器に近いものが多かった。また、住居址のやや東寄りの床面上10cm～20cmにこぶし大から人頭大の礫が集中してあった。

遺物 土器 (図51-5-10、83-86) は、いずれも蹄坂式土器で、出土量はかなり多い。ほぼ完形に復元可能なものは、図51-5-10である。5・6・8・9は、胴下半に帯形文をもつものである。7は、連続爪形文を抽象的に施したもの、10は、器面全体に縄文を施した全くの完形土器である。図85-19-21は浅鉢形土器の口縁部破片である。図86-12は、同底部破片である。破片の中には、半截竹管による平行沈線文土器 (図85-1-9) も含まれる。帯形文を施した土器 (図83-17、84-27-43) が多い。

台付土器の台部 (図86-2)、釣手土器の釣手部片 (10) が出土している。

石器 (図132-1-18) は、覆土より打石斧 (5-14)、横刃形石器 (15-19)、縦形の石匕 (6)、石鏃 (20)、石鏃 (17-18) が出土し、床面からは打石斧 (1)、横刃形石器 (2)、石鏃 (3)、石鏃 (4) が出土している。

M. 22号住居址 (図17-2、51-11、87、88、124-22、132-19-31、写31-32)

遺構 E地区の北端に位置し、23号住居址と接して検出された。西から南にかけてのプランは明瞭であったが、北から東へかけての半分は、攪乱されて破壊してしまっている。また、西北壁は土壌9に切られている。推定プランは、5.3m×5.05mの円形を呈すると思われる。壁高は、西で15cmを計る。床面は炉以北では安定しており硬い、南半は黒色土が軟かく不安定で攪乱されている。炉址はほぼ中央にあり、円形石匠炉で、焼土はないが炉石は少々焼けていた。北の炉石にほぼ接して深鉢形土器1個体が横転して出土した。炉の周辺に出土遺物が多かった。土壌9より古い。

遺物 出土量はあまり多くない。土器 (51-11、87、88) は蹄坂式土器である。図51-11は、完形土器で炉石に接して横転して出土したものである。縦の区画文を施した藤内I式に比定される深鉢形土器である。色調は褐色を呈し、焼成良好である。破片に半截竹管による平行沈線文を施したものの (図88-1-22、23-34) も含まれている。土製円板 (図124-22) がある。

石器 (図132-19-31) は、覆土から打石斧 (22-25)、横刃形石器 (26-29)、磨石斧 (30) 石鏃 (31) が出土し、床面より打石斧 (19)、乳棒状石斧 (21)、石鏃 (20) が出土している。



N. 23号住居址 (図18-1、51-12・14・15、52-1~9、89-91、132-32~41、写33・34)

遺構 22号住居址のすぐ西にあり、土壌9に切られている。当初はあまり遺物の出土が多く、小礫も大量にまじっている。住居址かどうか危ぶんだ程である。北壁と西壁ははっきりしていたが、他は開田の時に破壊されて不明である。壁高は削りどられているために低く5cm程であった。床面にも小礫が露出しておりあまり良くないが、炉の周辺及び住居址の南側に、硬く安定した箇所が認められた。炉は中央のやや北寄りに位置し、埋燵炉である。深鉢形土器で、口縁部の上に深き25cm程うめられ、底部のない胴部である。口縁部は床面より約3cm出しており、土器を埋めたあと、炉石を組んだものと思われる。土器内に炭が若干認められたが、炉石は焼けていない。土壌9より古い。

遺物 土器の出土量はきわめて多い(図51-12・14・15、52-1~9、89-91)。12は、炉に使用されていたもので、口縁の一部と胴部下半を欠いている。最大径40cmと大形の深鉢形土器である。図52-8、図90-1はこれと同様の文様構成をとる。図51-14・15、52-1・2は、区画文を施した深鉢形土器である。縁内I式に比定されよう。図52-3~5、7は、櫛形文を施したものである。やや小形で胴中央部がくびれるというパターン化した器形を呈するものである。3と4は同一個体かと思われる。9は、類似した器形であるが、胴部に横帯文がみられる。以上の文様構成をもつものが多いが(図89・90、91-1~5、21~25)、わずかに、半截竹管による平行沈線文を有するもの(図91-7~20)も伴出している。有孔筒付土器片(図91-6)もある。

石器(図132-32~41)は、覆土から打石斧(36・37)、磨石斧(38・39)、横刃形石器(41)、石鏃(40)が出土し、床面から打石斧(32・33)、横刃形石器(34)、磨石斧(35)が出土している。

O. 24号住居址 (図18-2、52-11~14、92-94、123-5、124-5、133-1~10、写35)

遺構 E地区土壌群のはずれに検出された小形の住居址である。25・26号住居址とも、土壌群のはずれに位置する小竪穴であることは注目される。3.45m×3.40mの不整形を呈し、壁は東側半分程は竹根のためにあまりはっきりしないが、西半は明瞭で良好であり壁高は15cmを計る。東壁は40cm、北で15cm、南は10cmである。床面は、炉の周辺及び炉以北では良好である。炉址は中央やや北寄りにあって、円形石圍炉である。焼土は認められなかった。遺物は炉址付近に集中していた。本住居址の東側50cmに炉址状の石組遺構があり、竪穴の存在も考えられるが、他のすべては破壊されて不明のためにはっきり断定できない。

遺物 土器(図52-11~14、92-94)の出土量は比較的多く、すべて勝坂式に比定される。完形土器は1つで、図52-14は全面に縄文を施した深鉢形土器である。本址では、櫛形文を施した土器が多く出土している。図52-12・13は、やや小形の深鉢形土器である。井戸尻Ⅱ式に比定されよう。破片は同類のものが多いが、図93-15・16のように、灰褐色の粘土で、もろく、縄文を地文としたものがある。半截竹管による平行沈線文を施した土器片(図93-30~32、図94-12~17)もわずかに出土している。深鉢形土器が多いが、浅鉢形土器の口縁部破片もある(図94-11)。

土偶の胴部破片(図123-5)、刺突文を施した耳埴(図124-5)がある。

石器(図133-1~20)は、打石斧(1~4)、磨石斧(5)、横刃形石器(6・7)、横形の大形石ヒ

(8~9) 縦形の大形石ヒ(10)などが出土している。

P. 25号住居址(図19-1、52-15~19、53-1~8、95-97、123-6、124-7~8・23、  
133-11~19、写36~39)

遺構 土壌群の北東に検出された小竪穴で、注意される。プランは3.15m×2.80mのやや楕円形を呈する。土器だまりのように遺物が多く、特に注目されるのは、炉附近の覆土に礫とともに炭や焼土が非常に多く、骨粉が混在していたことである。壁は良好で、北で36cm、南で34cm、東で35cm、西は45cmを計り、比較的高い。床面の状態も良好で焼土が認められた。炉址は中央やや東寄りであって、小形方形の石囲炉である。炉の北側に焼土があった。北の炉石に接して土器1個体が出土したが、特に炉址附近には出土遺物が多かった。

遺物 出土量は比較的多かった。土器(52-15~19、53-1~8、95-97)は深鉢形土器が多い。ほぼ完形なものは5個体ある。図52-19は、小形で焼成の良い深鉢形土器である。図53-1は、樽形文の変形したものであろう。6は、胴部に横帯文が施され、貫通する把手がつく。8は、一孔穿たれた無文の浅鉢形土器で図上復元したものである。図52-16は、口縁部に簡略化された蛇体文のような文様が施されている。破片も樽形文を有する土器が主体である。井戸尻Ⅱ式に比定される。

土偶の右大腿部破片(図123-6)、小形土器(図124-7・8)、土製円板(124-23)が出土している。

石器(図133-11~19)の出土量はすくない。打石斧(11~15)、乳棒状石斧(16)、横刃形石器(17) 磨石(18)、石鏃(19)が出土している。

Q. 26号住居址(図19-2、50-4、53-9・10、98~100、133-20~33、写40・41)

遺構 土壌群の北側に発見された小竪穴で出土遺物はあまり多くない。2.90m×2.55mのやや楕円形を呈する。壁は良好で高い。壁高は北で35cm、南で20cm、東で25cm、西は35cmを計る。床面は、柱穴内は良好で安定している。柱穴は壁面近くにあるが、他の竪穴と多少異なるところがある。覆土には、人頭大からそれ以上の礫が長方形にかたまっており、その中から炭が多量に出土した。注目される。炉は煙囪炉で土器のまわりに3ヶの花崗岩の礫がおかれていたが、炉石とも考えられる。土器は口縁部を欠き、胴中位まで垂直に埋設されており、中には若干焼土が認められた。

遺物 出土量はあまり多くない。土器(図50-4、53-9・10、98~100)は勝版式である。図50-4はがの直上に横転して出土した形文の深鉢形土器である。図53-9は、炉に使用されたもので、口縁部と胴下半部を欠く。樽形文を施した井戸尻Ⅱ式の深鉢形土器である。図53-10は、図上復元した土器である。破片には隆帯を付した土器(図99)が多く、図99-1~8で1個体、9~18で1個体と思われる。わずかに半纏竹管による平行沈線文を有するものもある(図98-7・20~21)。網代産(図100-9・11)が出土しているのは注意したい。

石器(図133-20~33)は、打石斧(20)、横刃形石器(21~23)、横形の大形石ヒ(24~25)、縦形の大形石ヒ(26)、磨石(27~30)、石鏃(31)、剥片石器(32・33)が出土している。

R. 10号住居址 (図20-1, 57-1~10, 128-15~18, 写20)

遺構 E地区の南側にあり、8号住居址と9号住居址、及び土壌1と切りあっている。5.3m×4.6mのほぼ方形を呈し、主軸はN57°Wである。北西のかどは、9号住居址と切りあい、土壌1に切られている。また、家屋のすぐ下にあったために破壊され、他の壁もあまり良好ではなく、北壁で13cm、南で5cmを計る。床面は、北側では良好であるが、他は不安定ではっきりしない。かまどは西壁にあるが、コンクリートで破壊されているためほとんどその原形をとどめていない。粘土を主体とする石組かまどと判定される。わずかに焼土が認められた。かまど内から数点の土師器が出土している。

遺物 出土量は少ない。図57-1~3は、土師器であり、2は内黒である。4・5は須恵器杯で、4は右回転の糸切り底をもつ。6~9は灰釉陶器の杯である。10は灰釉陶器の皿の底部である。磁石が4個出土している (図128-15~18)。

S. 12号住居址 (図20-2, 57-11~17, 写22)

遺構 14号住居址の南西約1mに検出された。南東に土壌4が接している。プランははっきりしており3.55m×3.30mの比較的小さな方形を呈する。主軸はN65°Wである。壁は北壁は良好である。壁高は、北で15cm、南で13cm、東は16cmである。床面は西半分は硬く良好であるが、他は軟かく不安定である。柱穴は5本ある。床面ほぼ中央のピットには、焼土、炭が多かった。かまどは10号住居址と同様に西壁に構築されている。いくぶん破壊されているが、粘土を主体にし、向って左の柱は礎を3ヶ組んである。右もまた、擾乱されているが同様であったと考えられる。粘土は若干焼けており、かまど内の焼土は厚さ10cmに堆積していた。また中央に支脚に利用したと思われる石が2ヶ置かれていた。

遺物 床面より出土している。土師器変形土器 (図57-11)、灰釉陶器の右回転糸切り底の小口壺 (16) が出土した。12~13は灰釉陶器片である。14は碗の底部、15は皿の底部である。床面から刀子 (17) が出土している。

イ) 土壌 (図22・23, 写14・42)

E地区では、90基以上の土壌が検出され、その大部分は、住居址群の両方に集中している。土壌1・9は平安時代以降のものと考えられるが、他はすべて縄文時代中期のものである。土壌2~8・10・11は、土壌群から離れて、住居址群の中に散在している。土壌の規模、形態はまちまちで画一性はない。90基以上の土壌の大部分からは、土器あるいは石器が出土している。中には混入したものがあるだろうが、意識的に埋設されたものが多い。土壌群の中央やや南よりに立石が2本あり、土壌群の南と北のはずれには、小さな住居址が3軒ある。また、土壌群の中央附近を中心に、直立しておかれた土器が10個あった。

番 土質	号 図 版	底版(m)	深さ (m)	形態	出 土 遺 物		内 部 の 状 態	備 考
					七 器	石 器		
1	21-1	235×100	10	方		石匕(134-1)	石匕は混入	
2	13-1	118×110	35	円	○(101-1~3)	石剣(134-2~6)		
3	21-1	80×75	23	円	○深鉢(54-1)(101-5~7)		土境周辺に石皿?	
4	20-2	115×110	10	円	○深鉢(54-2)			
5	15-2	130×114	23	楕円	○深鉢(54-3・4)	黒曜石片		
6	21-2	130×110	35	楕円	○深鉢(55-1)(101-11)			
7		106×95	20	楕円	○深鉢(55-2)(101,102)	石斧(134-7)		
8		123×83	27	楕円	○(102-11~14)	黒曜石片		
9	17-2 17-1	152×98	15	楕円			木炭片あり	鉄線
10		60×60	20	円			礫あり	
11		77×65	10	楕円	○深鉢(55-3)			以下 土境群
12	以下 22・23	68×68	25	円	○(102-15・16)	横刃(134-8)		
13	(土境群)	78×75	18	円	○(102 17, 103-1~5)		土境内に土器1個体数く	
14		90×45	20	楕円	○		土境内にビッドあり	
15		50×50	20	円				
16		108×60	30	楕円	○(104-1)		礫あり	
17		134×68	48	楕円			土境内にビッドあり	
18		50×50	36	楕円	○(104-2)			
19		142×87	26	楕円	○(104-3)	石斧(134-9)	小さな礫上部に多し	
20		75×62	26	円	○(104-4~6)	石斧(134-10)	炭石あり	
21		60×54	28	円	○(104-7~8)			
22		50×50	20	円	○(104-9~11)			
23		54×54	26	円			礫あり	
24		130×86	36	楕円	○深鉢(55-4)(104-12~15)	横刃・石匕(134-11,12)	炭化物あり	
25		64×56	30	円			礫あり	
26		74×74	20	円	○深鉢(55-5)(104-16)			
27		128×78	20	楕円	○(105-1~9)			
28		120×66	75	双円	○(105-10~17)	石斧(134-13)		
29		86×70	40	円	○深鉢(55-6)(105-18~28)	石斧(134-14)	礫あり	
30		105×60	32	楕円		石斧(134-15)		
31		60×54	28	円	○		礫あり	
32		82×44	26	楕円	○			
33		56×50	20	円				

番号	形状	規模(cm)	深さ (cm)	形跡	出土遺物		内部の状態	備考
					土器	石器		
34		75×43	14	楕円			土壁内にビットあり	
35		50×50	14	円	○			
36		95×60	32	楕円	○			
37		60×60	31	円				
38		64×64	32	円				
39		78×60	26	楕円	○(106-1~4)			
40		100×100	35	円	○	横刃		
41		70×62	22	円	○	○		
42		90×65	28	楕円	○(106-5)			
43		140×82	6	楕円				
44		78×50	18	楕円			土壁内にビットあり	
45		74×58	18	楕円	○(106-6~7)			
46		60×50	24	円	○(106-8・9)		礎あり	
47		80×75	24	円	○(106-12・13)			
48		80×80	50	円	○(106 14・19)	横刃(134-17)	礎多し	
49		95×77	12	笠形	○(106-20)		土壁内にビットあり	
50		50×45	24	円				
51		94×66	11	楕円	○		土壁内にビットあり	
52		60×50	20	円	○(106-21)	石ヒ(134-18)	香粉出土	
53		60×60	40	円	○			
54		82×47	41	双円	○(106-22・23)		木の葉(111-32)	
55		110×70	60	楕円	○(106 24・25)		土壁内ビットあり骨片出土	
56		95×60	33	楕円	○(106-26・28)		礎あり	
57		86×70	48	楕円	○(106-29-37)	石片(134-19・20)	小礎あり	
58		84×84	18	円	○(106-36)	横刃(134-21)		
59		95×66	28	楕円	○(106-40・41)	横刃(134-22)		
60		230×165	28	不整形	○(106 52-10, 55-7) ○(106 42-45, 107-1-36)	石ヒ(134-23・24)		
61		55×55	30	円		横刃(134-26)		
62		155×95	25	卵	○(107-37-43, 108-1~2)	石片、横刃(134-25-26)		
63		50×34	30	楕円	○(108 3~8)	敲打器(134-27)		
64		60×32	40	楕円				
65		44×44	47	円	○(108-9・10)		礎あり	
66		130×86	34	楕円	○(108-11)	石片(134-28)		

番号	図版	幅原(m)	高さ (cm)	形制	土 器		大部の状況備考
					土	器	
67		100×90	40	円	○(108-12~14)		
68		82×60	24	楕円	○(108-15~17)	石斧(134-29)	数個の破あり
69		80×60	35	楕円	○		破あり
70		92×80	34	楕円	○(108 18~20)	石斧(134-33) 横刃(134-30)	上部に破あり
71		60×60	45	円	○(108-21)		
72		46×40	31	円			
73		80×67	32	楕円	○		
74		160×36	38	楕円	○		
75		55×55	48	円	○(108-22)	横刃(134-31・32)	
76		36×36	30	円	○(108-23・24)		
77		120×80	25	楕円			
78		88×65	37	楕円	○(108-25)	石斧(134-34)	破あり
79		125×75	25	楕円	○(108-26~30)		破あり
80		42×42	49	円	○(108-31・32)		
81		85×60	28	楕円			
82		90×70	37	楕円	○(108-33~35)	石斧(134-35・36)	破あり
83		108×72	45	楕円	○(108-36~39)	石斧(134-37)	土壌内にピットあり
84		50×50	25	円			
85		94×70	46	楕円	○(108-40・41)		炭化物あり
86		40×40	25	円	○(108-42・45, 109 1)	横刃(134 38)	
87		40×40	18	円	○(109-2~3)	石斧・石匕(134-39, 135-1)	
88		90×52	20	楕円			
89		60×60	16	楕円		石斧(135-2)	
90		85×60	35	楕円	○深鉢 (109-4~9, 109~10) (110-1~5)		骨粉あり
91		85×85	40	円	○(110 6~29, 111-1~3)	石斧・横刃(135-3~5)	

土壌出土の土器について簡単に説明する。

土壌3 (図54-1) 半截竹管による平行沈線文を施した深鉢形土器の胸下半部である。

土壌4 (図54-2) 胴部のくびれ部に櫛形文を施し、胴部には三角形に区画した抽象文がみられる。

土壌5 (図54-3) 胴部の横帯文に連続爪形文が施されている。

(図54-4) 縄文を地文とし、連続爪形文の抽象文を施してある。11線は山形に近い波状をなす。

土壌6 (図55-1) 大形の深鉢形土器である。胴部に縄文を地文として、押圧指痕文がある。木葉痕の底部である。

- 土壙7 (図55-2) 押圧指痕文上に爪形文を施した深鉢形土器である。
- 土壙11 (図55-3) 薄手で焼成のあまりよくない深鉢形土器である。沈線文、押引文が施されている。
- 土壙24 (図55-4) ずん明で厚手の深鉢形土器である。キャクピラ文を施された横帯区間文である。
- 土壙26 (図55-5) 輪積み痕が明瞭にのこる穹形に近い深鉢形土器で、明上半に横帯文が施されている。
- 土壙29 (図55-6) 帯形文と押圧指痕文がみられる。
- 土壙60 (図55-7) 小形深鉢形土器の胴下半部である。
- (H52-10) 帯形文の横帯にすべて押印文を施したものである。

- 土壙群土器1 (図55-8) 頸部に押圧指痕文があり、焼成良好な深鉢形土器の上半部である。
- 土壙群土器2 (図55-9) 帯形文のみみられる深鉢形土器の胴下半部である。
- 土壙群土器3 (図55-10) 帯形文が施され、隆帯文で飾られた深鉢形土器である。
- 土壙群土器4 (図56-1) 光い縄文がほぼ全面にある大形の深鉢形土器である。
- 土壙群土器5 (図56-2) 隆帯を縦にはりつけた深鉢形土器である。
- 土壙群土器6 (図56-3) 地文は縄文で、その上に米本科植物による沈線文が施されている深鉢形土器である。
- 土壙群土器7 (図56-4) 縄文が全面に施された胴長の深鉢形土器である。
- 土壙群土器8 (図56-5) 縄文を地文とし沈線文が施されている。
- 土壙群土器9 (図56-6) 半截竹管による平行沈線文を主体とし、薄手で焼成のあまりよくない深鉢形土器である。
- 土壙群土器10 (図56-7) 台付浅形土器と思われる。無文で厚手、色調は灰黄褐色を呈する。

### ウ) 溝状遺構

遺構、E地区の西端を南北に走る溝状遺構である。南側は家屋及び耕作により破壊され、北は用地外のため調査不可能で全容を知ることは出来なかった。溝の巾はほぼ一定で80cm～90cm、深さ10cm～25cmである。底面には砂があり、中から摩滅した土器片が出土していることから、水が流れていたと考えられる。

### 3) まとめ

山溝遺跡は、今回の調査でほぼ遺跡の全容を調査出来たと思う。B地区においては、そのほとんどが道路造成の際に削られたため、縄文中期の住居址7軒、土壙、配石が検出されたにすぎないが、東西に流れる本沢川の北まで続く縄文時代中期の集落が予想される。検出された配石は、東へ約30mほどのところに三郎神社と東谷寺があったところであり、それに関連するものであるかもしれない。

E地区では、砂層を掘り込んで縄文時代中期の住居址17軒、平安時代の住居址2軒、土壙91基、溝状遺構等が検出され、勝坂期における一つの集落形態が明らかになったと思う。

縄文時代中期の住居址が17軒、台地の先端にわずかに弧を描くように並んでいる。うち、15・18・19号住居址は炉の形態、出土遺物からみて加曾利E式期に相当するものである。24・25・26号住居址は、他の住居址群と離れて土壌群の中にあり、ひとまわり小形で、しかも、出土遺物が特に多かった。8号住居址と9号住居址、14号住居址と16号住居址、20号住居址と21号住居址、22号住居址と23号住居址は、2軒づつが単位となっているようにみえる。出土遺物の形態から、各々の住居址について詳細な検討がなされなければならないが、それは後に新ためてすることにして、整理段階では、少なくとも縄文期の中でも、井戸尻編年で、藤内I式と井戸尻II式の2つの時期にわけられるのではないかと思う。

D地区の土壌群は、住居址群の西方にあり、大部分の土壌からは土器あるいは石器が出土している。骨粉が出土したり、鏝が入っていたものもある。土壌の性格を考える一つ鑑となろう。

伊那谷では、伊那市月見松遺跡、駒ヶ根市高見原遺跡、洞市大城林遺跡などの勝坂期の遺跡が調査されている。山崎遺跡の調査は、これらの遺跡の調査とともに、伊那谷のこの時期の研究に寄与するところが大きいと思う。

(山岡・井上)

エ) E区その他の遺物(図57-18~24、図112~122、図123-8~13、図24-6・9-26、125、図136-137-138-1~25)

E区のほぼ全域が縄文中期勝坂期の集落にあたり、特に同時期の土器出土量は膨大なもので、各住居址あるいは各土壌に直接伴わないとした土器片の量だけでも大変なものであった。それで今回は代表的なものを選別して載せてある。E区からは縄文時代中期の他各時代の遺物が出土している。

縄文時代早期土器 押型文土器(図112-1~18)が土壌付近、14号住居址付近からいくつか出土した。楕円押型文が多く、山形文の入るもの(9)、横門文を口縁内面にも施してあるもの(1)もある。17・18は焼成の良い厚手の楕円押型文土器片で、他の押型文土器と多少異なる。4は茅山式土器の口縁部である。

縄文時代中期土器 やはり勝坂式土器(図112-19~31・113・114・115)が多い。次に加曾利E式土器(図116)があり、吊手土器の吊手部(図121-8~17・122-1~6)が多く出土している。

縄文時代後期土器 台地頂部、土壌群の西北側に後期前半の土器が多く集中して見られた。(図117・118・119)

土製品 土偶(図123-8~13)は右手(8)、右足(9)、左足(10)、胴部(11)、胸部(12~13)が出土した。このうち10・12・13は縄文時代後期のものかと思われる。この他に小形土器の漆部(図124-9)、刺突文を施した耳栓(6)、土製平板(図125-26)がある。

土師器・灰釉陶器中世陶器(図57-18~24)、18は内面黒色の土師器坏形土器、19は灰釉陶器の坏、20は碗、21~22は皿、23はおろし皿、24は壺の底部である。23のおろし皿は中世のものである。

銅製(図122-11)、開元通宝(8)、元祐通宝(9)、寛永通宝(10)が出土している。

石器 打石斧(図136-138-1)が最も多くほぼ完形のものを見出した。他に横刃形石器(図137の1~9・138-2)、横形大形石ヒ(10~15)、縦形大形石ヒ(16~17)、磨石斧(18~19・22~24・29)、小形磨石斧(27)、乳棒状石斧(20~21・25~26)、磨石(図137-30・138-3~4・37)、石鏃(図137-31~35)、凹石(38~39)、石皿(図138-24~25)、縦形石ヒ(5)、石錐(6~8)、剥片石器(9~13)、石鏃(14~23)が出土した。



## 5. 八幡林遺跡

### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡飯島町高尾 3486-3491、3347-3 番地にある(図4-5、写52)。石上神社の南東、田の沢川とその南の沢にはさまれた扇状地の扇頂部に位置している。標高724m-730mである。西は山林がせまり、南側は岩間部落に向けて急傾斜でおちこんでいる。

遺跡は水田と畑地とである。中央道は扇頂部を南北に横断する。

グリットはセンター杭34230をAAとし、BYまで43-48の間に設定した。

地層は、A区では水田耕作土、埋土、黒色土、茶褐色土の順につづき、B区では耕作土、黄灰色砂土、黒色砂土、褐色土、砂礫層となっている。

### 2) 遺物 (図139、140)

調査の結果、遺構は検出されず、A区の黒色土層よりわずかに遺物が出土したのみである。土器(図139)はほとんど小破片であるが、縄文時代後期(2-7)、弥生時代後期(10)のものと思われる。このほかに縄文時代中期の土器片も出土している。石器(図140)は、打石斧(1-3)、打石器(4)、横刃形石器(5)、磨石器(6)、石鏃(7)、石鏃(8)が出土している。(4)と(6)は特殊な石器と思われる。

### 3) ま と め

調査の結果、遺構は検出されず、遺物もすくなかった。土器片が摩滅していることや、地形から考えて遺跡の中心は中央道用地外の西方にあるものと考えられる。

(太田)

## 6. 石上神社前遺跡

### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡飯島町高尾3575-1~2番地にある(図4-6、写52)。高尾部落の南西、田の沢川の扇状地層頂部に位置している。標高741m~743mである。遺跡の東は急傾斜をなしている。附近で一番高いところであり、みはらしがよい。

グリットはセンター枕34460をAAとし、AYまで47~49の間に設定した。

地層は上から耕作土(20cm)、黒色土(30cm)、褐色土(10cm)、黄褐色砂土(100cm以上)の順となっている。各層とも田の沢川の堆積のため、砂質土層である。

### 2) 遺物 (図141、142)

調査結果、遺構は確認されず、出土遺物も少なかった。

図41の土器片は、褐色土上面より出土した縄文時代早期の山形押型文土器片である。石器(図142)は打石斧(1、2)、自然面の一端を打ちかいた石器(3)、石鏃(4)の計4点が出土した。

### 3) ま と め

田の沢川の度々の氾濫によって、遺跡は荒れている。土器片の厚減のはなはだしいことなどから考えて遺物は流されてきたものようである。遺跡の中心は用地外西方の山麓近くにあると考えられる。

(御子柴)

## 7. 庚申平遺跡

### 1) 位置

遺跡は上伊那郡飯島町田切112-139-168, 104番地にある(図4-7、写53)。木曾山脈山麓、北の太田沢、南の町谷用水にはさまれた西から東にのびる舌状台地上に位置する。標高756m-770mである。南は水田地帯につき、北は急崖をなして太田沢へおちこんでいる。遺跡は現在畑地と水田とになっている。中央道は台地を南北に横断している。

グリットはセンター杭35560をAAとし、KCまで35-62の間に設定した。

台地上部は表土の堆積が浅く、わずか30cm余りでローム層に達し、耕作がローム層にもおよんでいる。台地の南へいくにしたがって耕作土の下の黒色土、黒褐色土の堆積が厚くなる。

### 2) 遺構と遺物

調査の結果、小さな住居址1軒と土壌2基が検出され、土器片、石器がわずかに出土したのみである。

#### ア 1号住居址(図24-1、写53-2)

台地の南向き斜面の一番低いところに検出された。2.65m×2.20mの楕円形を呈する。黒色土Ⅱから掘り込んでいる。壁、床面ともにあまり良好ではない。壁高は北側で15cmあまり、南側で5cm足らずである。床面はやや南に傾斜している。床面上には炭または炭化物が全面にあった。炉は明確ではないが、床面中央西よりにピットがあり、この周辺に大量の炭があったことから考え、あるいは炉址であったかもしれない。壁外に焼土のかたまりがあった。柱穴は5本あった。西壁近くに深鉢形土器1個体が横転してつぶれた状態で出土していた。その他には遺物はすくなく(図143-1-8)。縄文時代中期加曾利E式土器である。

#### イ 土壌1・2(図24-2・3、)

土壌1は2.30m×1.30m、深さ1.00mで、底は2つに分れている。土壌2は1.60m×1.30m、深さ0.50mで、底は二段になっている。土壌1・2ともまったく遺物出土しなかった。

#### ウ その他の遺物(図143、144)

土器(図143-9~35)は、縄文時代中期加曾利E式土器の破片が多いが、図143-29~35のような、縄文時代後期・晩期の土器片と思われるものもわずかにある。

石器(図144)は、打石斧(1・2)、横刃形石器(3)、石匕(4)、石鏃(5)、石皿(6)が出土している。

### 3) まとめ

遺跡の立地からみて有望な遺跡と思われたが、調査の結果、特異な住居址1軒と土壇2基が検出されたのみで、出土遺物もすくなくかった。

住居址は、規模、床面、壁の状態などから考えて、長い期間にわたって住居として使用したとは考えられない。何か特殊な目的をもって建てられたものではないだろうか。

土壇は、出土遺物もなく、時期は不明であり、何であるかわからない。

遺跡の中心は、中央道用地外西方、山麓近くにあるものと考えられる。

(小松原)

## 8. 太田沢春日平遺跡

### 1) 位 置

遺跡は上伊那郡飯島町田切112-176-177番地にある(図4-8、写54)。庚申平の丘陵と久根平丘陵との間にはさまれた太田沢の平坦部に位置している。標高750m~755mである。低地は湿地であり、両岸の斜面は急傾斜であり、生活の場としては適していない。太田沢は少しづつ巾をひろげながら東に流れ、南岸に巾のせまい段丘を形成している。遺跡は現在水田、牧草地、山林となっている。

グリットはセンター枕35680をAAとし、AYまで50~65の間に設定し、湿地となっている低地は50ラインにそってグリットを設定した。

A区は台地の北向斜面であり、わずかに20cm~30cmでローム層に達する。低地では耕作土の下に礫層があり、地表にも大きな岩石がたくさんころがっている。

### 2) 遺物 (図145、146)

調査の結果、遺物は検出されず、わずかに土器片、石器がA区より出土したのみである。

出土土器(図145)は、すべて小破片であり、時期は明確でないが、縄文時代中期あるいは後期と考えられる。図146は打石斧である。

### 3) ま と め

調査の結果、遺物は確認されず、遺物の出土もすくなかった。中央道用地東方の、太田沢南岸の段丘面の水田より、昭和20年の開田の時に、縄文時代中期の土器片、石器などが大量に出土している。おそらく遺跡の中心はこの一番にあるものと思われる。

(上村)

## あ と が き

昭和47年4月、駒ヶ岳の残雪が美しくかがやく中で、発掘を開始した飯島地区の調査は、6月下旬に終了した。

調査団は、飯島地区の調査に引きつづき、駒ヶ根市地区、南箕輪村地区の調査を12月上旬まで行ない、その調査の中で、遺物整理、図版整理、原稿執筆をし、漸くここに報告書ができることになった。

最初に調査に入った山満遺跡では、第1日より住居址が検出され、さいさきのよいスタートであった。つづいて、山満遺跡の調査と並行しながら、うどん坂南、うどん坂Ⅱ、うどん坂Ⅰ、八幡林、石上神社前庚申平、太田沢春日平の8遺跡を調査し、多くの遺構・遺物を確認した。詳細は本文にゆずるが、多くのことが明らかになった。特に山満遺跡の調査は多大な成果をおさめた。

1. 山満遺跡では、縄文時代中期を中心に26軒の住居址が検出された。

特に、E地区では、縄文時代中期勝坂期の住居址13軒、土壇90基以上が発見され、この時期の集落の全容を知ることができた。

2. また、山満遺跡では、大量の磨板式土器が出土したが、住居址は大略2つのグループに分れ、出土土器の型式差も認められることから、伊那谷の縄文時代中期の土器編年ができるだろう。編年のほぼできあがっている諏訪地方とは、違ったところもあるようだ。

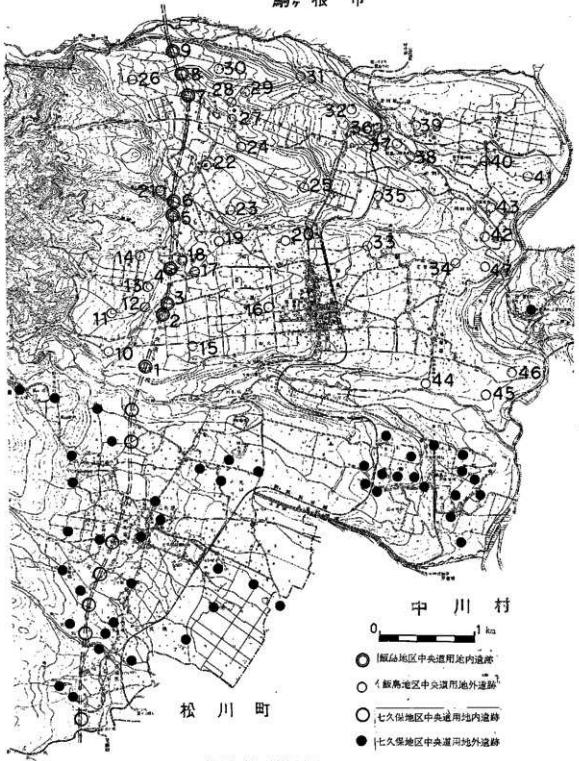
3. 山満遺跡の土壇群の調査は、最近研究がすすんでいる縄文時代の墓制、あるいは土壇の研究に新しい資料を提供することになる。

4. うどん坂Ⅱ遺跡では、縄文時代晩期の土器・石器が大層に出土している。しかも、出土土器はほとんど東海地方の条痕文土器であり、伊那谷のこの時期の調査例がすくなくないだけに大きな成果である。

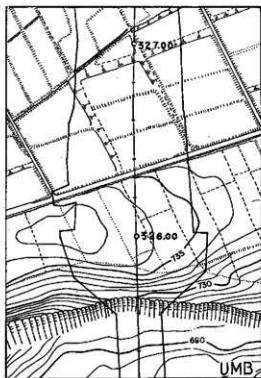
終りにあたり、地元飯島町・飯島町教育委員会・飯島地区の方々・上伊那教育事務所・日本道路公団伊那工事事務所等の熱意ある応援に感謝の意を捧げる。

(大沢)

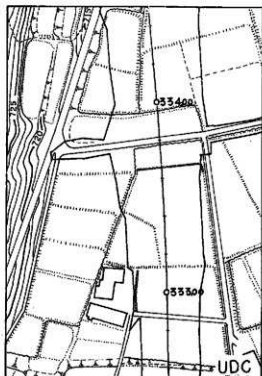
駒ヶ根市



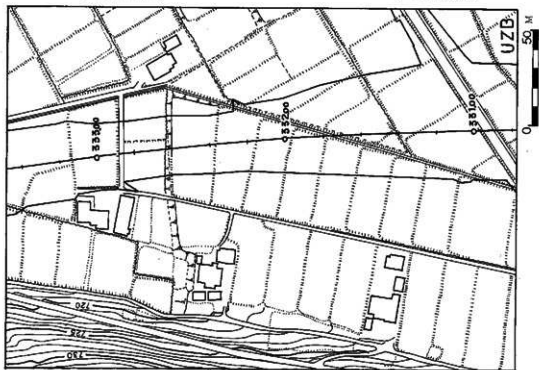
第1図 飯島町道群分布図



1 うどん坂南道路



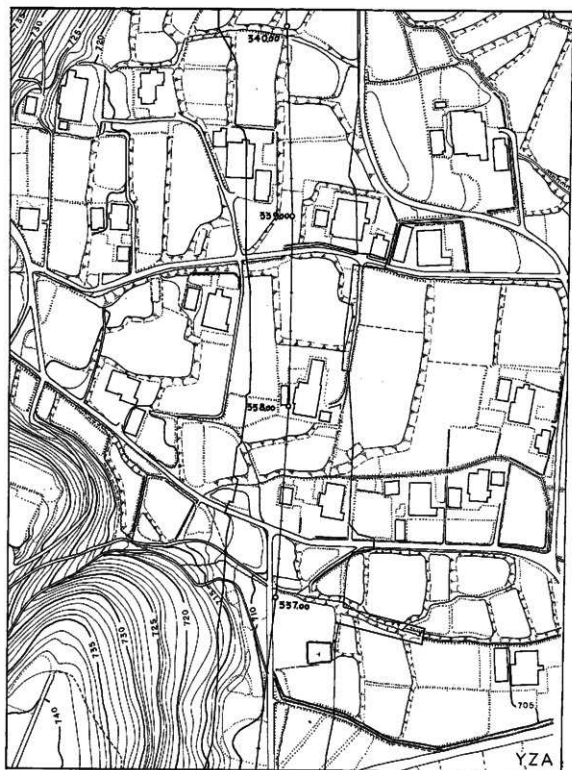
2 うどん坂下道



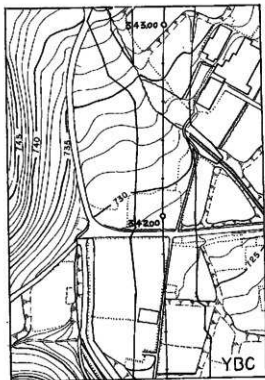
3 うどん坂目道

第2図 原島地区中央道内各道跡地形図 (1:2000)

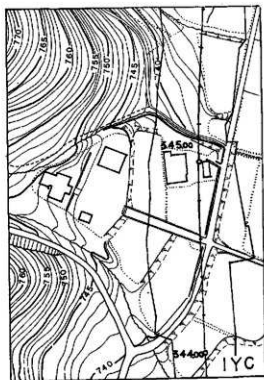




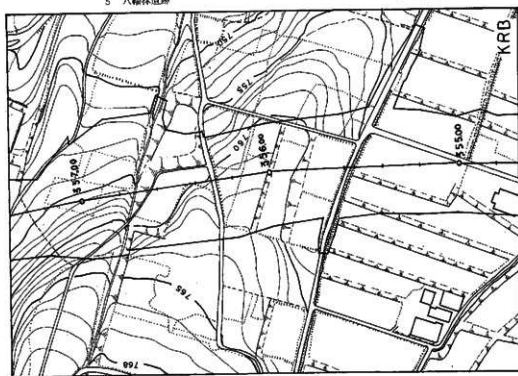
第3图 海島地区中央道内各遺跡地形図 (1:2000) 4 山崎遺跡



5 八幡林遺跡

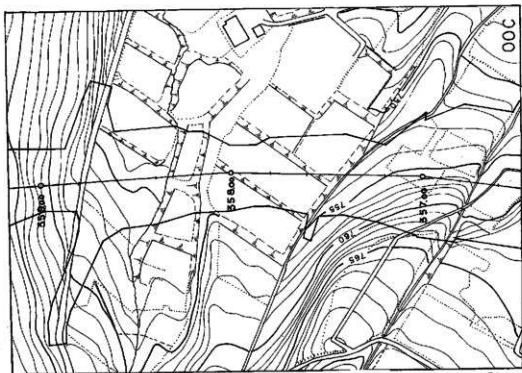


6 石上神社前遺跡



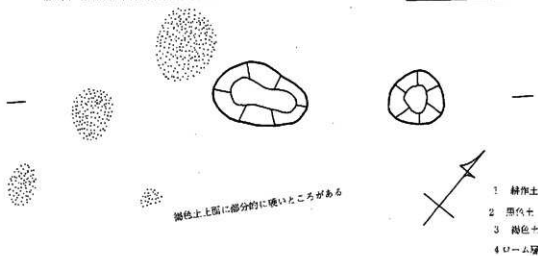
7 庚申寺遺跡

第4図 美山地区中央道内各遺跡地形図 (1:2000)



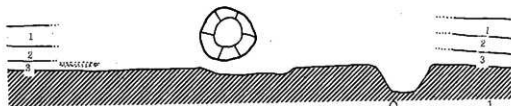
第5回 飯島地区中央道内各遺跡地形図 (1:2000)

8 太田家春日平遺跡

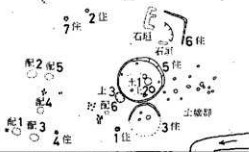


褐色土上面に部分的に硬いところがある

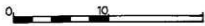
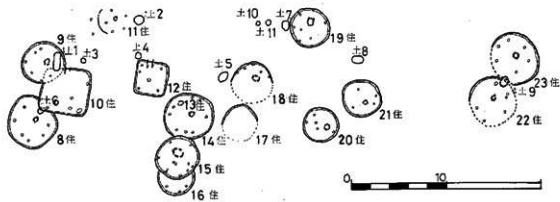
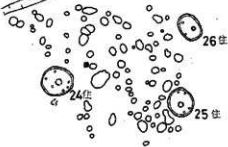
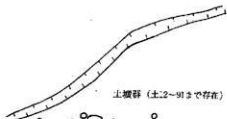
- 1 耕作土
- 2 黒色土
- 3 褐色土
- 4 ローム層



第6回 うどん水南遺跡ピット横上 (1:80)

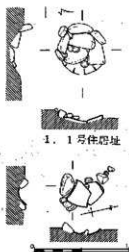


1. B地区遺構配置図

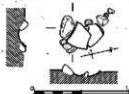


2. F地区遺構配置図

第7図 山崎遺跡遺構配置図 (1:400)



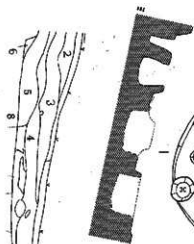
1. 1号住居址



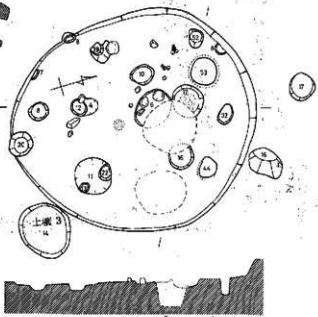
2. 2号住居址



3. 3号住居址

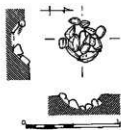


- 1 表土 黒色土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 黒褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 赤褐色土

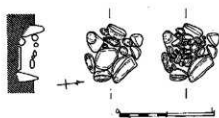


4. 5号住居址

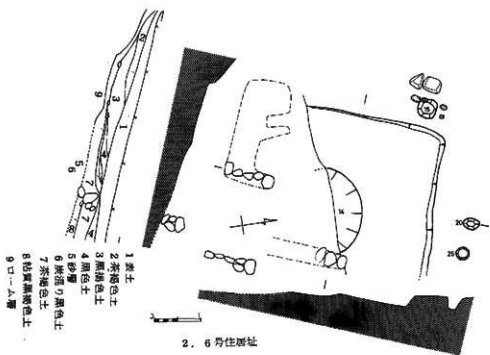
第8図 山溝遺跡1・2・3・5号住居址・上壊3 (1・2 1:40, 3・4 1:80)



1. 4号住居址

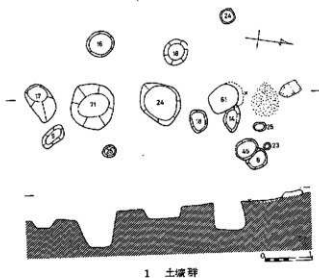


3. 7号住居址

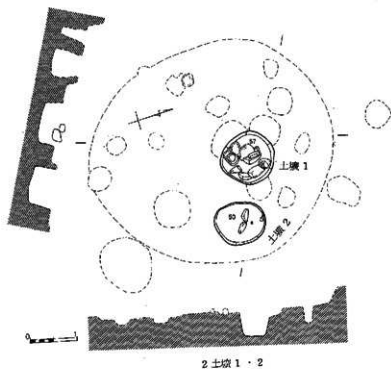


2. 6号住居址

第9图 山溝遺跡4・6・7号住居址 (1・3 1:40, 2 1:80)

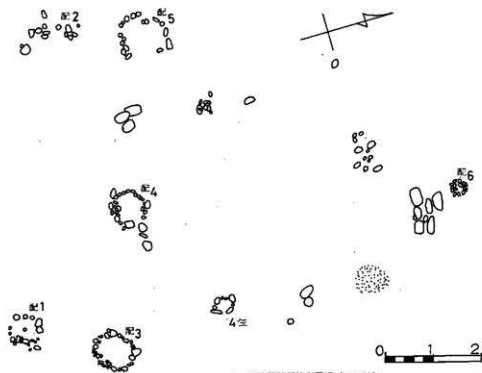


1 土坑群

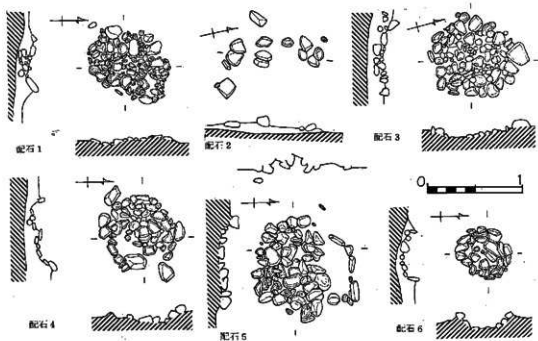


2 土坑 1·2

第10图 山湾遗址B区土坑群·土坑 1·2 (1:80)



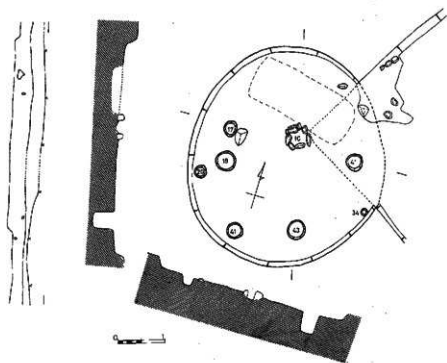
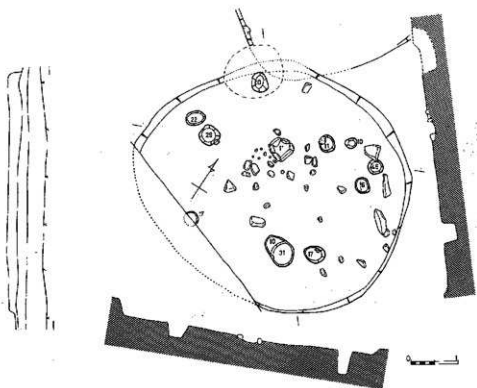
1 B地区配石址配置图 (1:80)



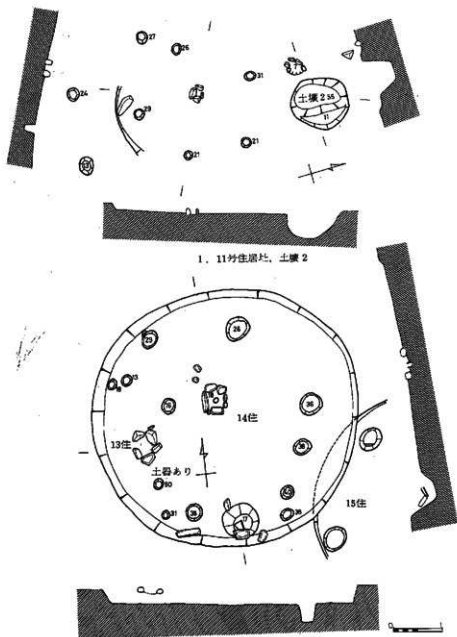
2 配石址1~6 (1:40)

第11网 山溝遺跡配石址 (1, 1:80, 2, 1:40)



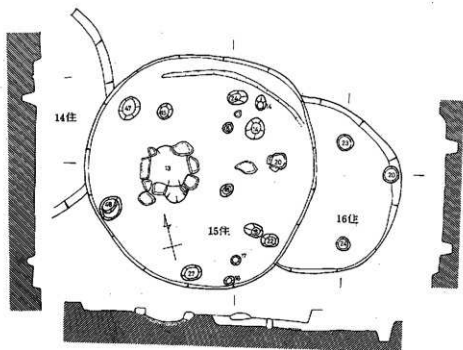


第12图 山溝遺跡8・9の住居址 (1:80)

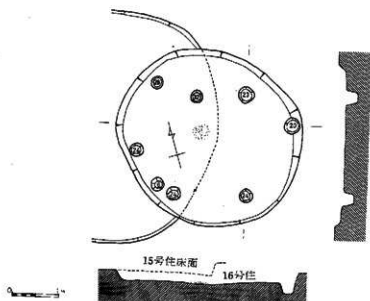


2. 13号住居址・14号住居址

第13図 山崎遺跡11・13・14号住居址・土壇 2 (1:80)

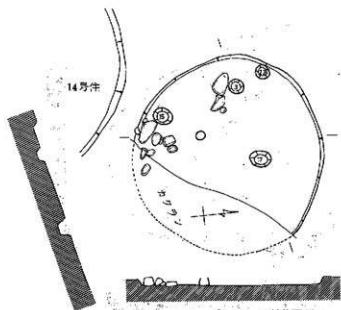


1. 15号住居址



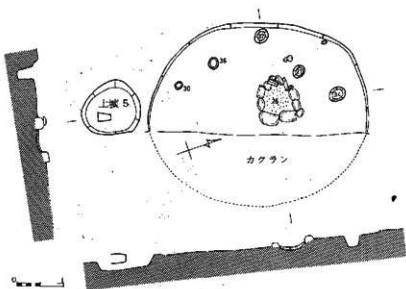
2. 16号住居址

第14图 山溝遺跡15・16号住居址 (1:80)



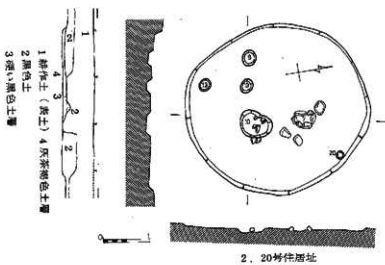
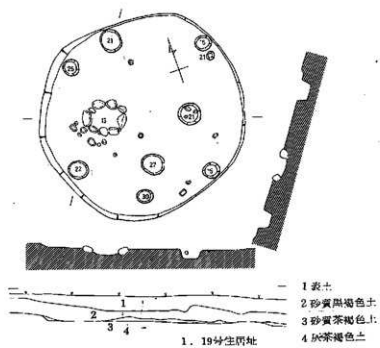
1. 17号住居址

- 1 粘作土
- 2 砂質黒褐色土
- 3 砂質黒色土
- 4 砂質赤褐色土

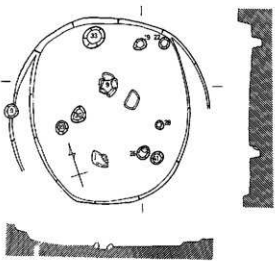


2. 18号住居址

第15図 山溝遺跡17・18号住居址・上城5 (1:80)



第16图 山溝遺跡19・20号住居址 (1:80)

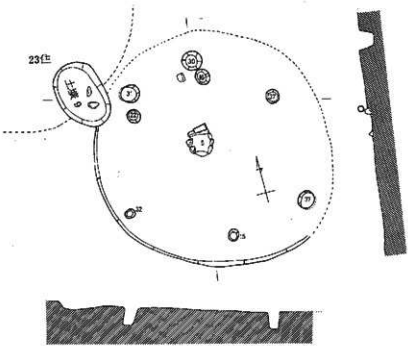


1 耕作土 (表土)  
 2 黑褐色土 3 黑色土  
 4 灰茶褐色土

1. 21号住居址

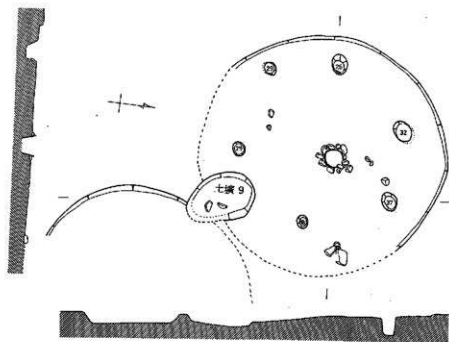


1 耕作土 2 灰土  
 3 砂質赤褐色土層  
 4 砂質黑褐色土層  
 5 砂質茶褐色土層

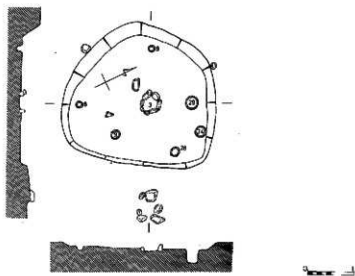


2. 22号住居址

第17图 山溝遺跡21・22号住居址・土壤 9 (1:80)

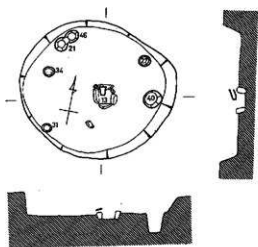


1. 23号住居址

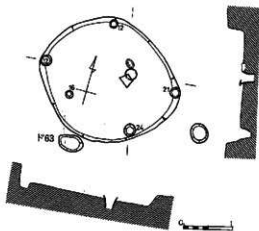


2. 24号住居址

第18图 山海遗址23·24号住居址·土坑9 (1:80)



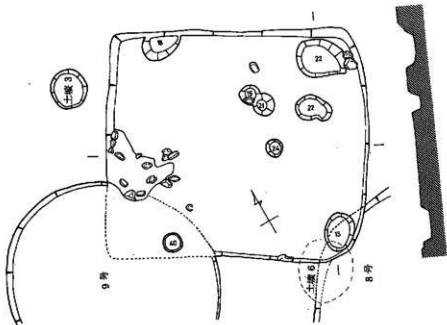
1. 25号住居址



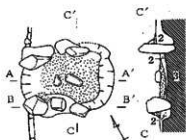
2. 26号住居址

第19图 山溝遺跡25・26号住居址 (1:80)

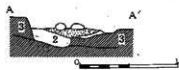




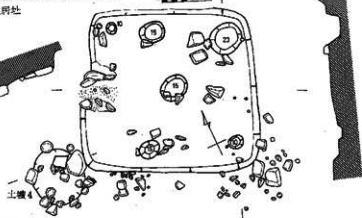
1. 10号住居址



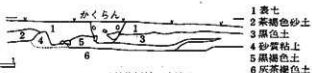
- 1 粘土
- 2 炭漚り黒色砂土
- 3 灰茶褐色砂土



3. 12号住居址かまど

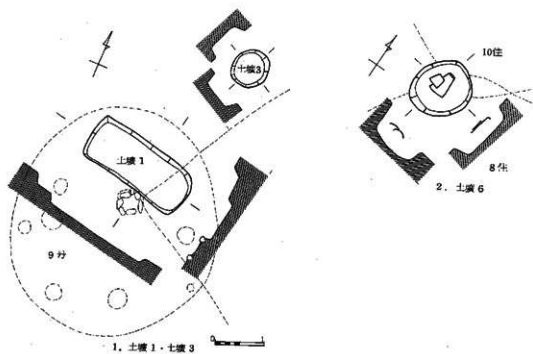


2. 12号住居址・土壇4

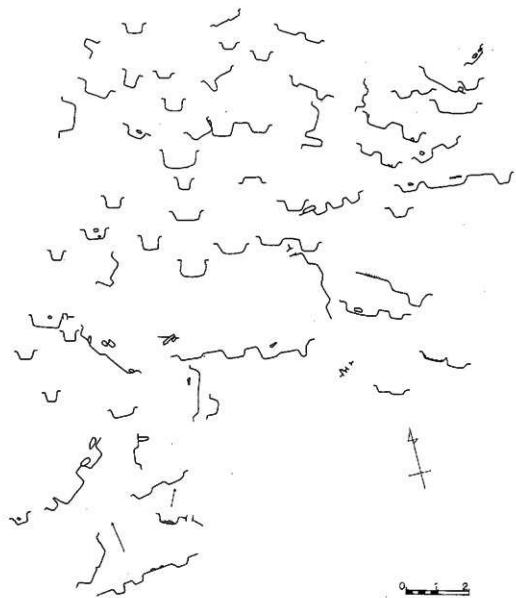


- 1 表土
- 2 茶褐色砂土
- 3 黒色土
- 4 砂質粘土
- 5 黒褐色土
- 6 灰茶褐色土

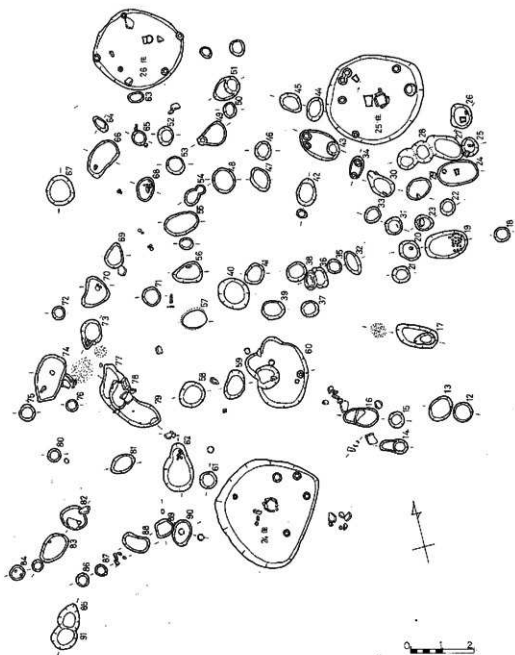
第20区 山溝遺跡10・12号住居址・土壇4 (1・2 1:80, 3 1:40)



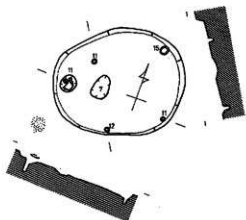
第21圖 山崎遺跡土壇 1・3・6 (1:80)



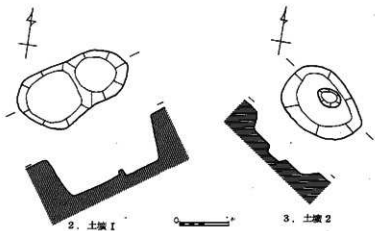
第22图 山湾遗址E区土壤群断面图 (1:120)



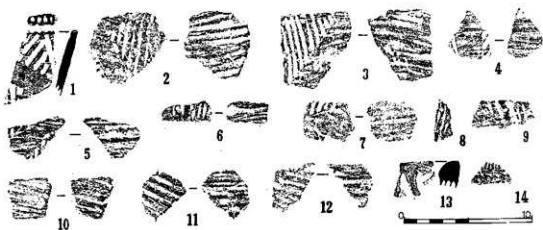
第23区 白溝遺跡E区土質群配置圖 (1 : 120)



1. 1号住居址



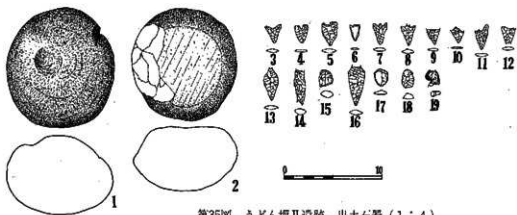
第24图 庚申平造跡1号住居址土城1·2 ((1:80))



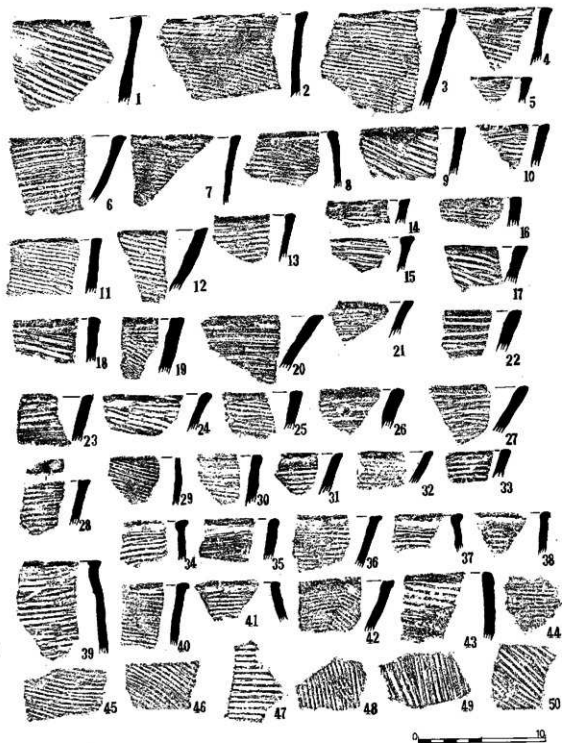
第25図 うどん坂南遺跡出土土器 (1:3)



第26図 うどん坂南遺跡出土土器 (1:4)



第35図 うどん坂II遺跡、出土土器 (1:4)

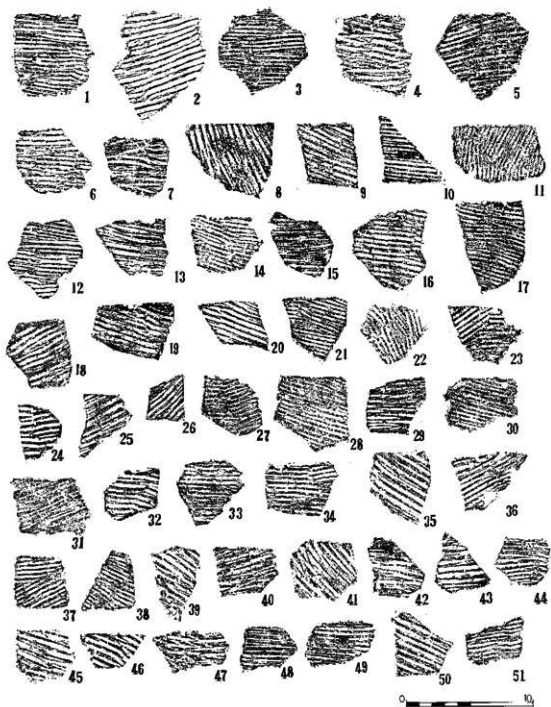


第27図 うどん坂Ⅱ遺跡出土土器(1:3)

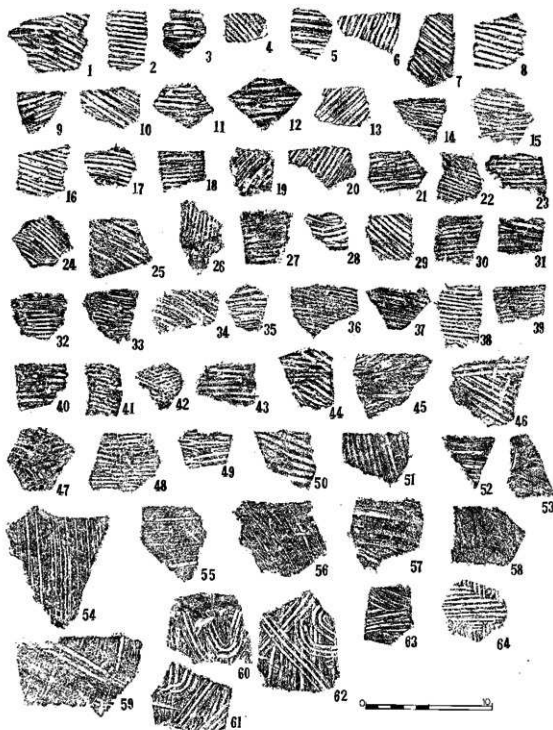


第28圖 うどん坂II遺跡出土土器 (1:3)

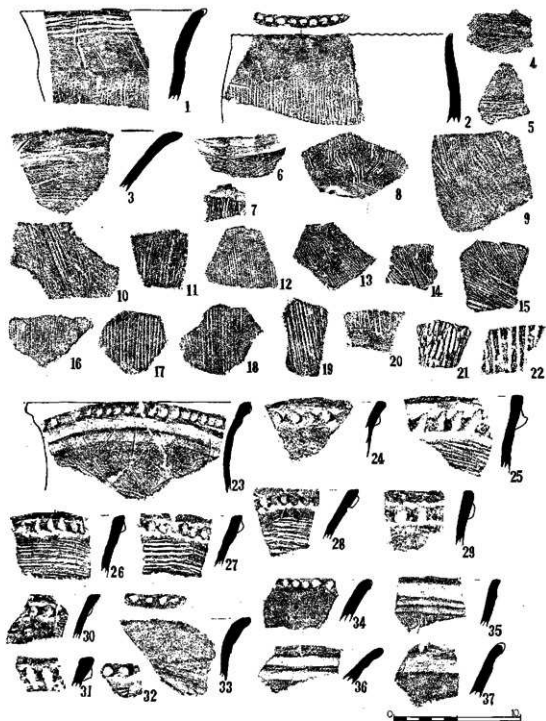




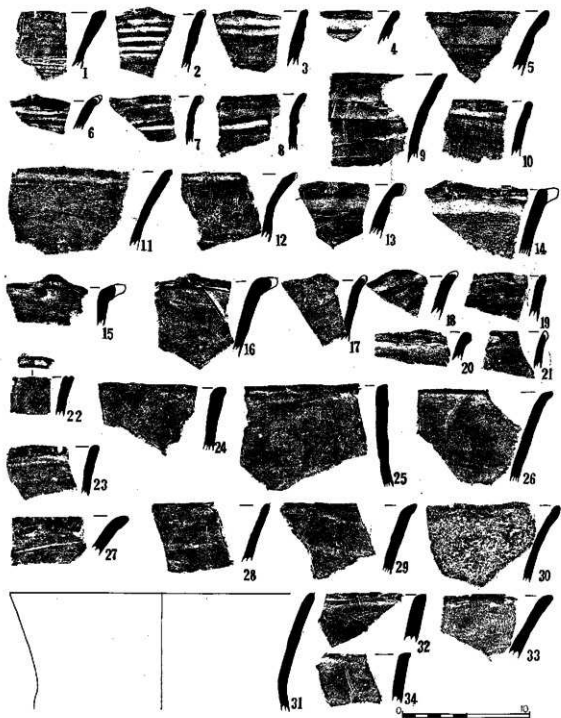
第29圖 うどん坂Ⅱ遺跡出土土器（1：3）



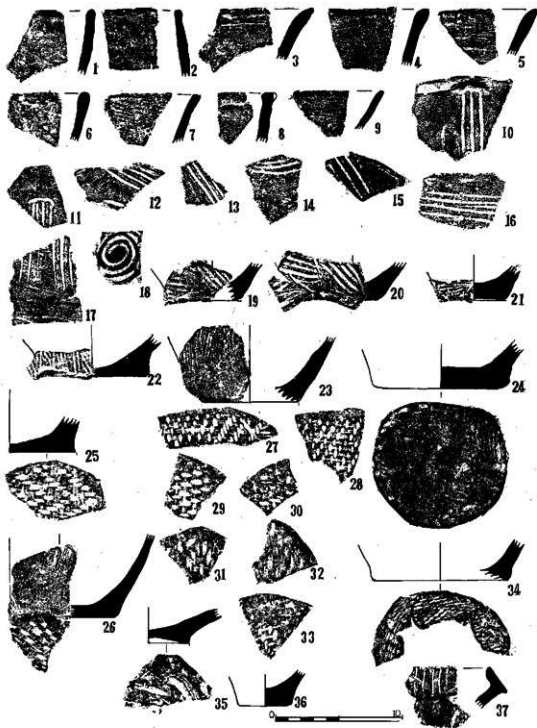
第30図 うどん坂日遺跡出土土器 (1:3)



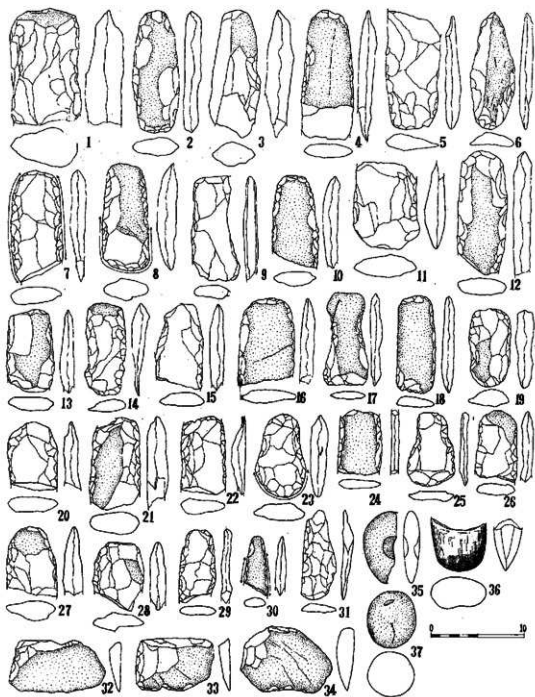
第31図 うどん板Ⅱ遺跡出土土器 (1:3)



第32図 うどん坂Ⅱ遺跡出土土器 (1:3)



第33図 うどん坂Ⅱ遺跡出土土器 (1:3)



第34図 うどん坂Ⅱ遺跡出土石器 (1:4)



第3628山湾遗址1·2·3号住居址出土土器(1:3) (1-7 1件, 8-12 2件, 13-43 3件)



第37图 山溪遗址4·7号住层出土土器(1:3) (1~18 4住, 19~30 7住)

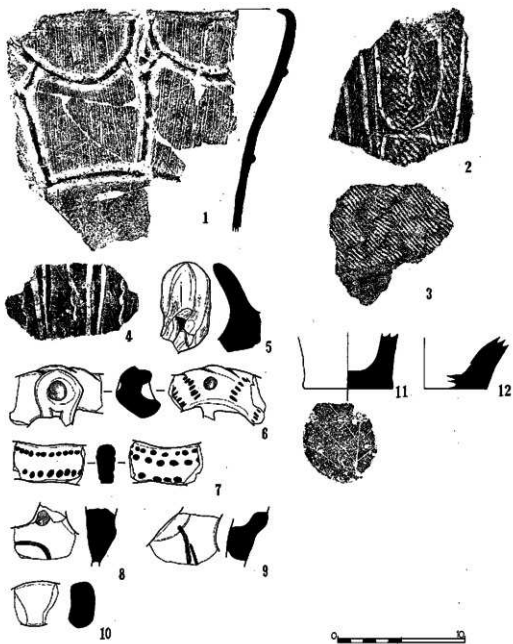




第38圖 山灣遺跡5号住居址出土之二器(1:3)



第394号 山内遺跡5号住居址出土土器 (1:3) (1-19 腹上, 20-24 床面, 25-31 ビット内)



第40图 山清遗址5号住居址出土土器(1:3)



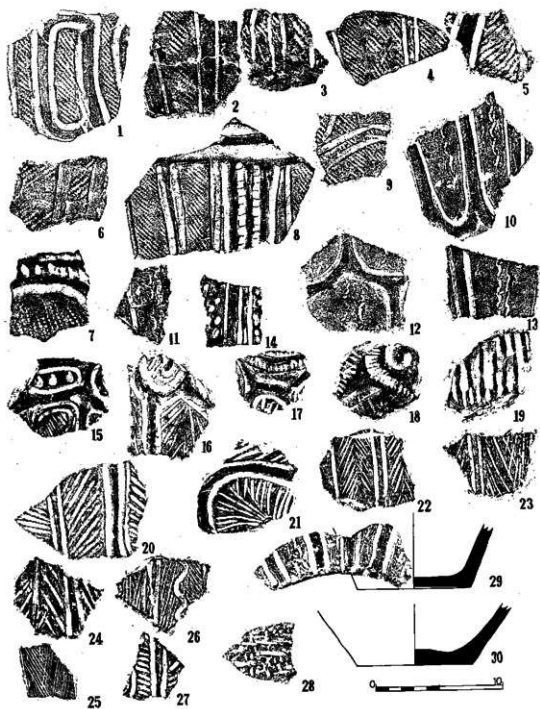
第41图 山岭遗址6号住居层出土土器(1:3)



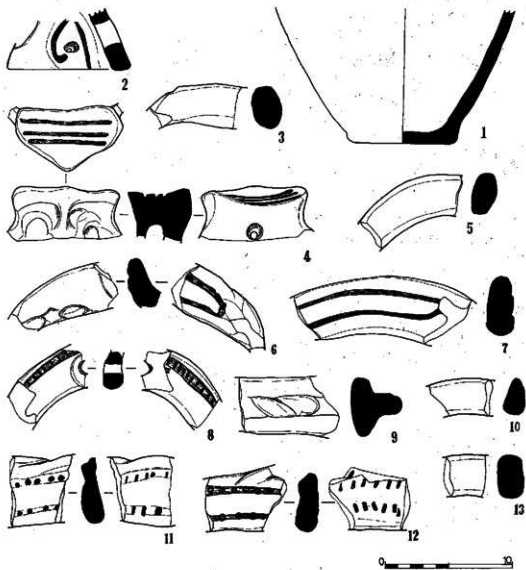
第42图 止清遗址B区出土土器(1:3)



第48图 山湾渣B区出土土器(1:3)

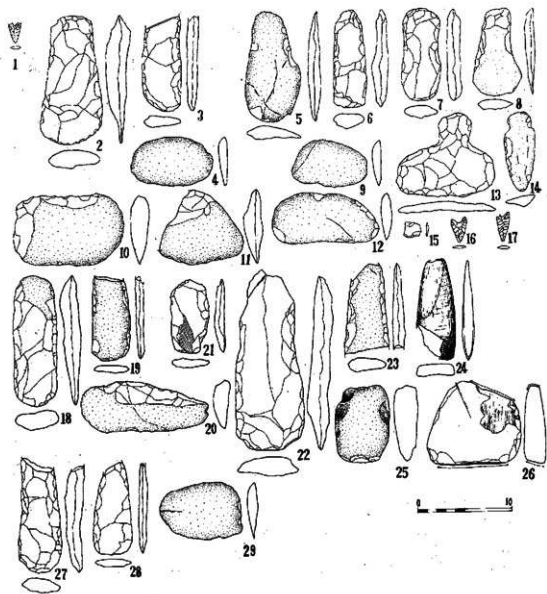


第41区 白溝遺跡B区出土土器 (1:3)



第45图 山阴道地区出土土器 (1:3)

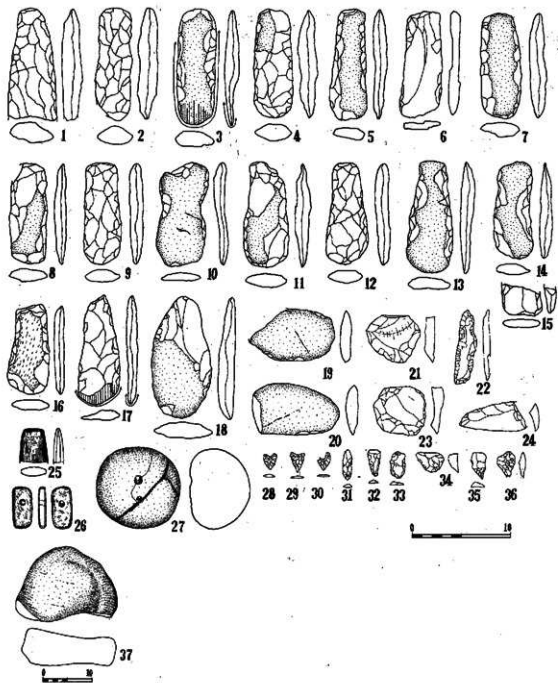




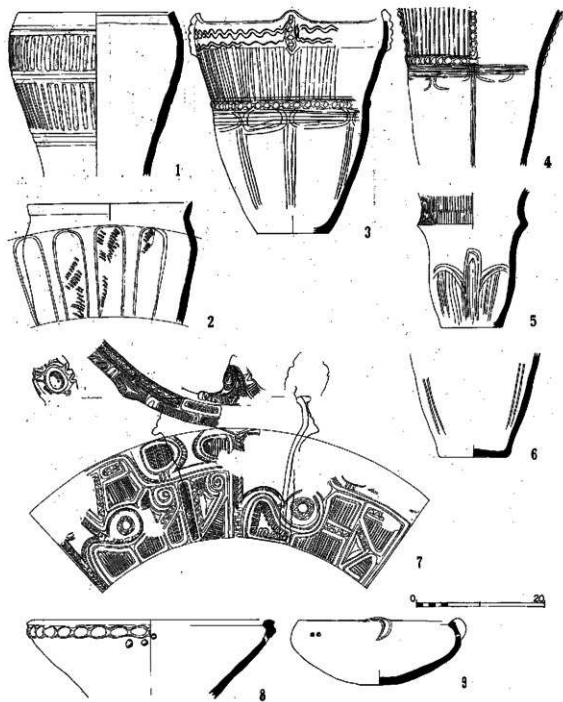
第46图 山湾遗址B区出土石器

(1:4)

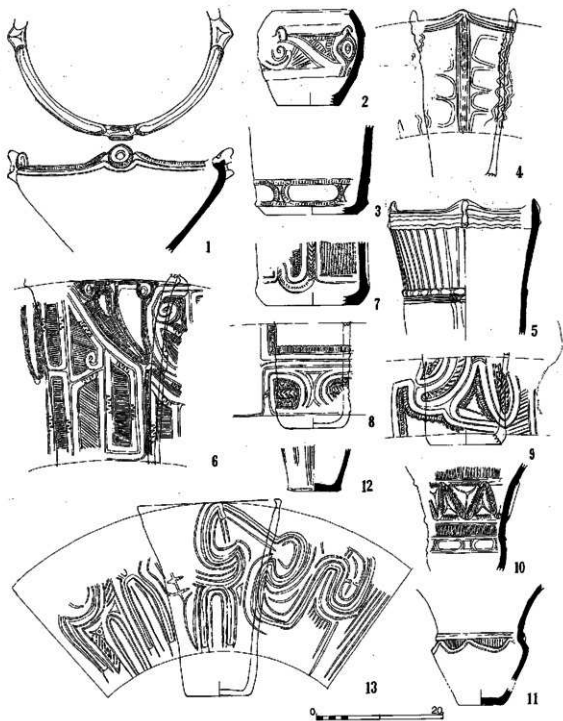
(1住 2~4 3生 5~17 5生 18~20  
 5住床 21 '6住床 22~26 6住附土 27~29  
 ±1, 2)



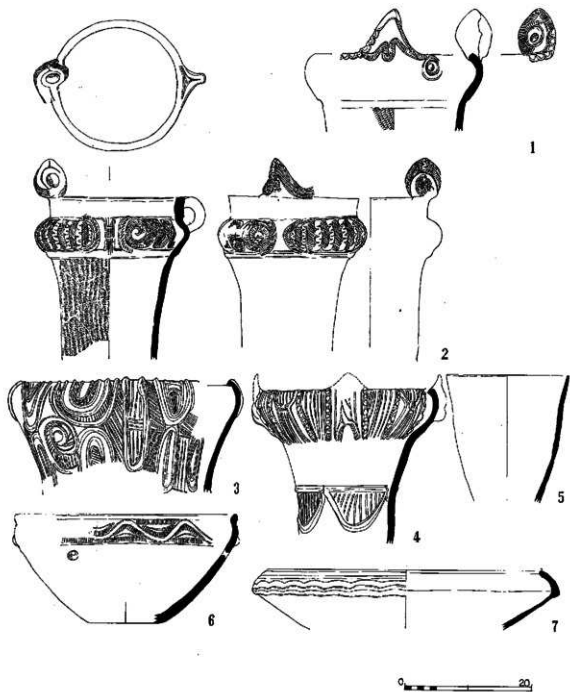
第47図 山溝遺跡B区出土石器 (1:4 37のみ1:8)



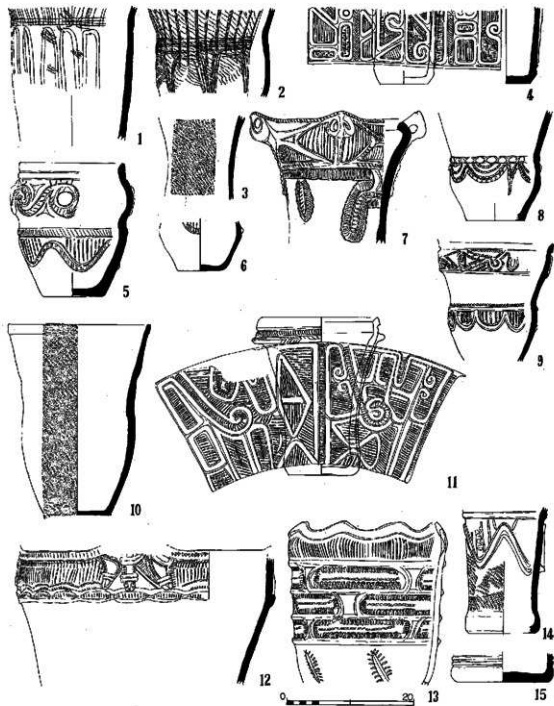
第48图 山沟遗址出土土器 (1:6) 1 2 住炉 2 B区土质群) 3~9 8住



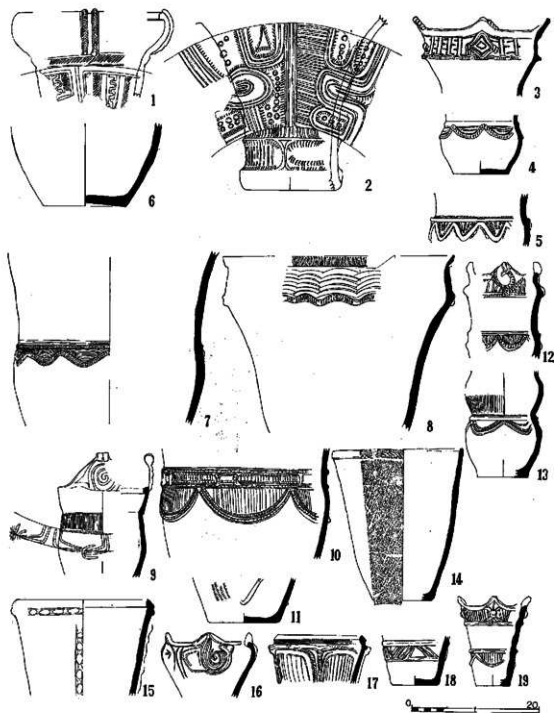
第49图 山内遺跡出土土器 (1:6) 1 8世 2~3 9生 5~13 14(作)



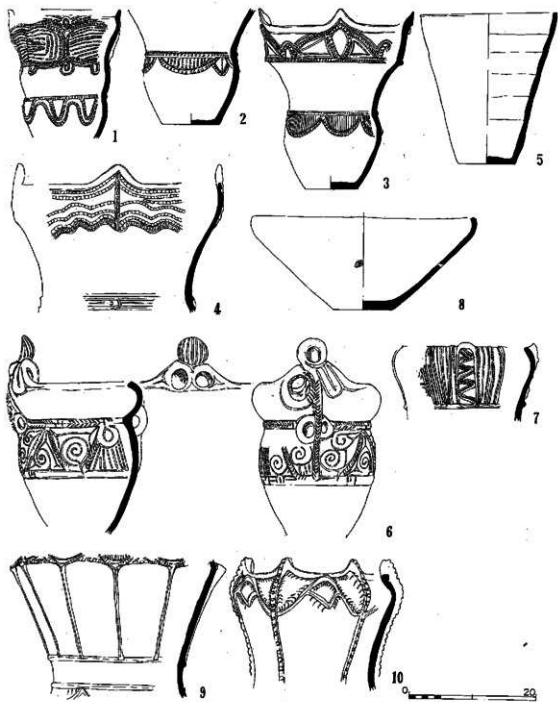
第50图 山海遗址出土土器 (1 : 6) (1~3·5~7 14住 4 26住)



第51图 山海漫踪出土土器(1:6) 1 16住 2 17住 3 19住 4 20住 5~10 21住 11 22住 12·14·15 23住 13 8住)

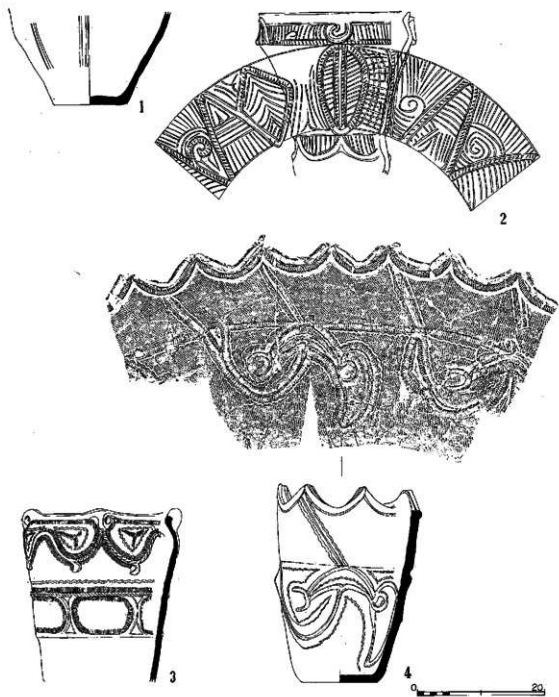


第52图 山溝遺跡出土土器(1:6)(1~9 23住 10 13~14 24住 15~19 25住)

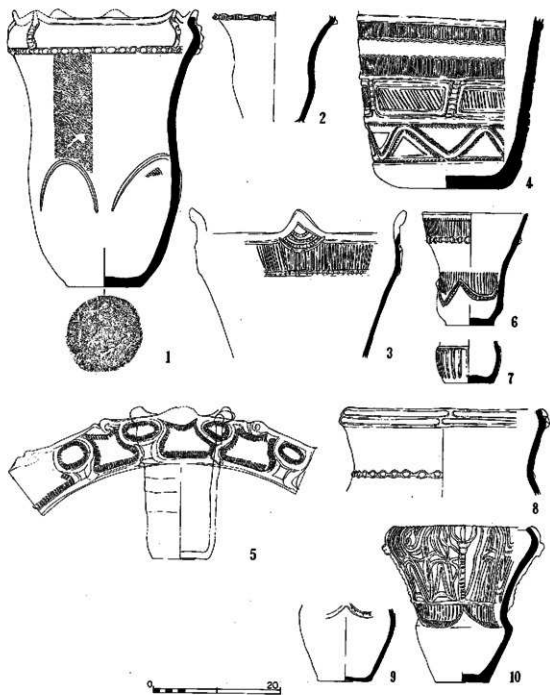


第53图 山海遗址出土十器 (1:6) (1~8 25住 9~10 26住)

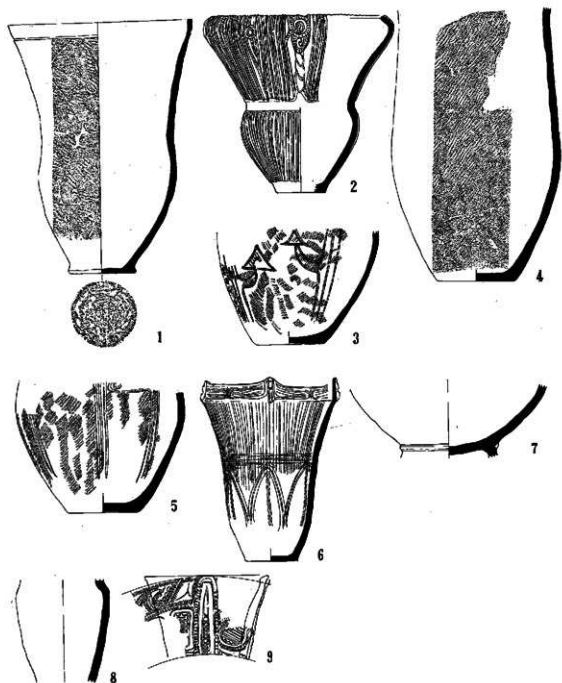




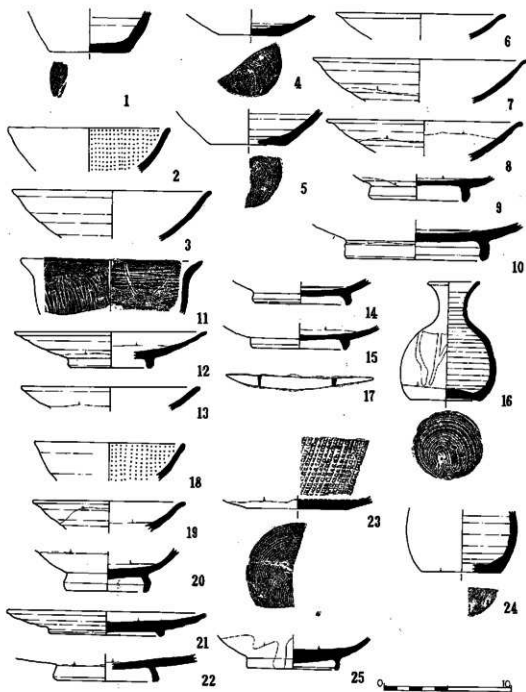
第54图 山溝遺跡出土土器 (1:6) (1±3 3~4±5)



第55图 山湾遗址出土上器(1:6)(1上6 2上7 3上11 4上24 5上26  
6上29 7上60 8上原群1 9上原群2 10上原群3)



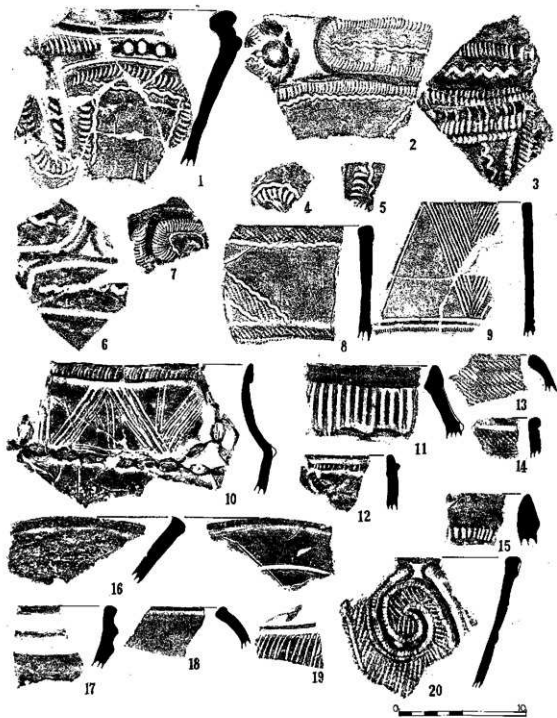
第56図 山海遺跡出土土器 (1:6) (1 土塚群4 2 土塚群5 3 土塚群6  
4 土塚群7 5 土塚群8 6 土塚群9 7 土塚群10 8~9 Ⅱ区その他)



第57図 山溝遺跡出土土器 (1 : 3) 1~10 10世 11~17 12世 18~24 E区その他 25 F区その他



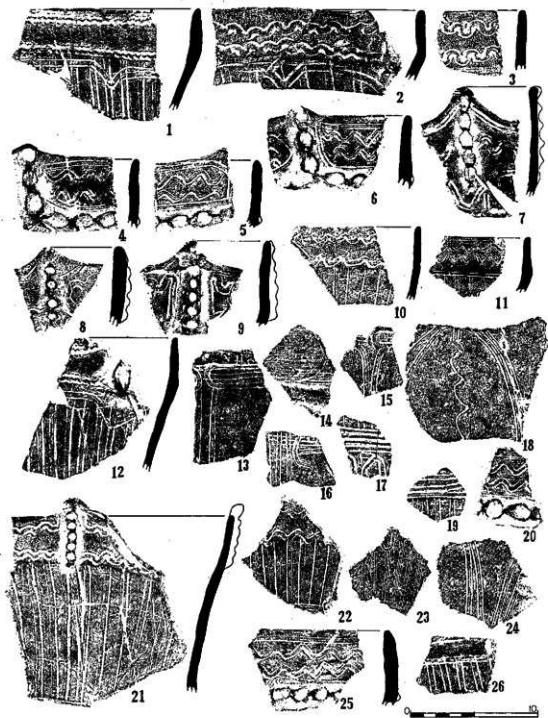
第58區 山海遼陽8号住居址出土土器 (1:3)



第59图 山溪遗址8号住居址出土之器(1:3)

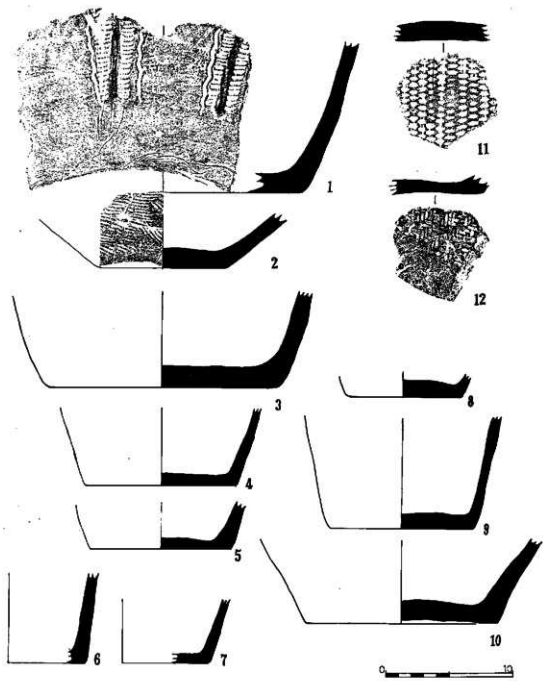


第60图 山湾遗址8号土窑址出土土器(1:3)



第61图 山阴道路8号位置址白土器 (1:3) (21-26 皮面)

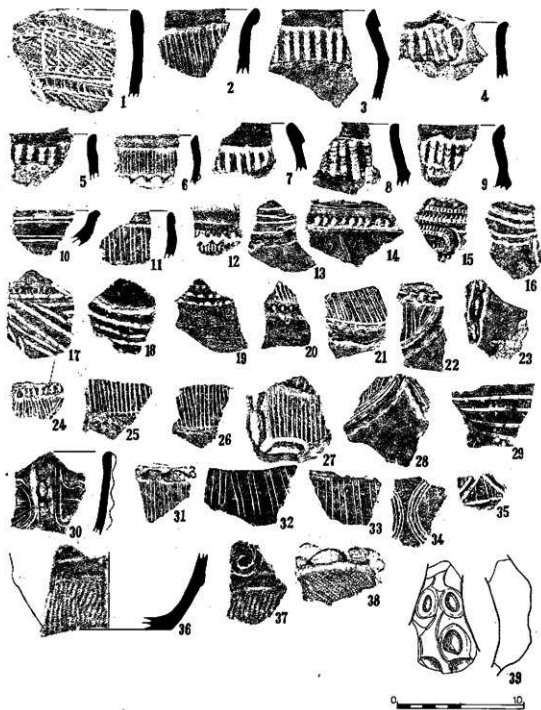




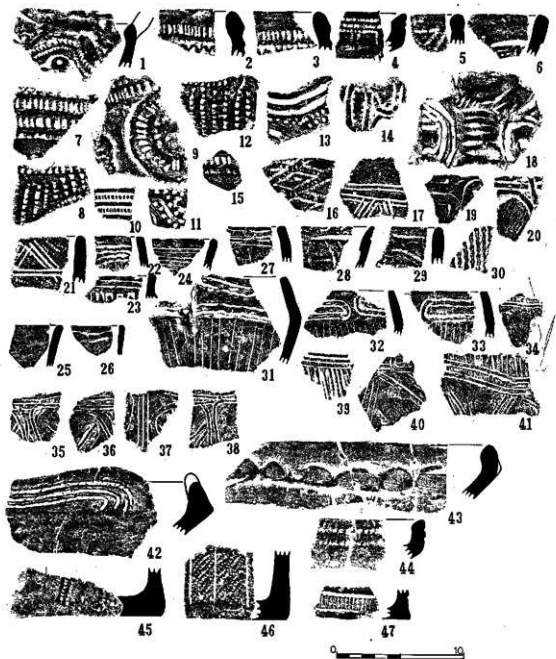
第62圖 山澗遺跡8分生居址出土土器(1:3)



第63图 山湾遗址9号住居址出土土器(1:3)



第64图 山海关第9号住居址出土土器 (1:3)



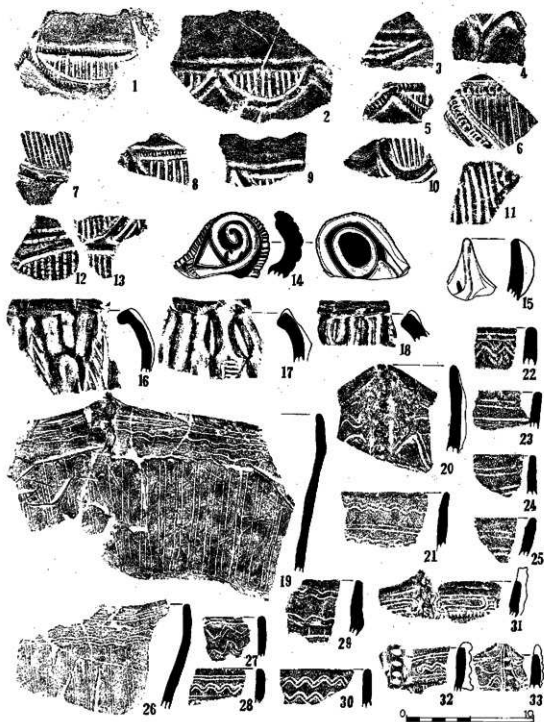
第65圖 北溝遺跡11号住居址出土土器(1:3)



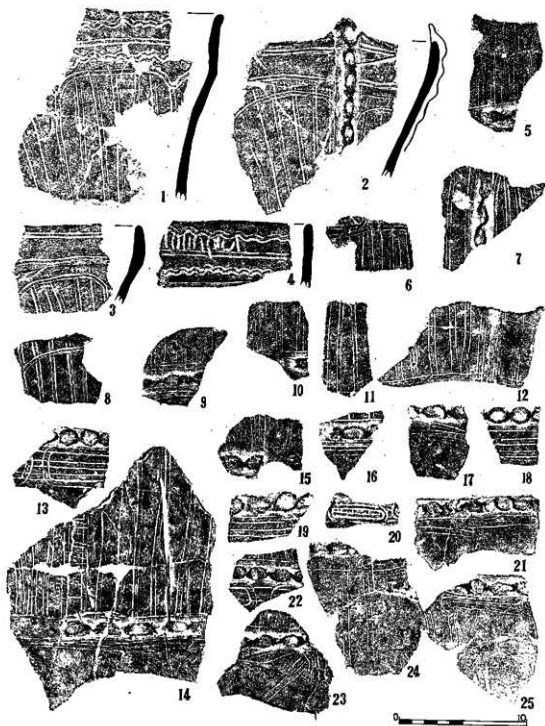
第66图 山清遗址14号生厝址出土石器(1:3)



第67图 山湾遗址14号住居址出土土布 (1:3)

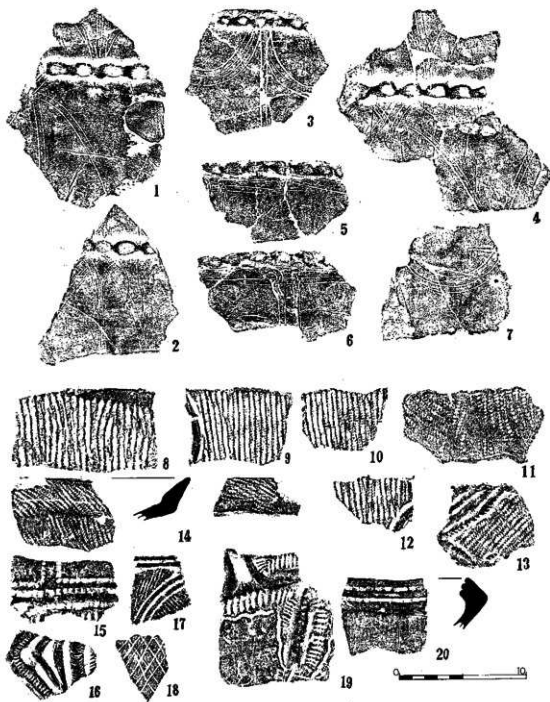


第68圖 山澗遺跡14号件附址出土土器 (1:3)

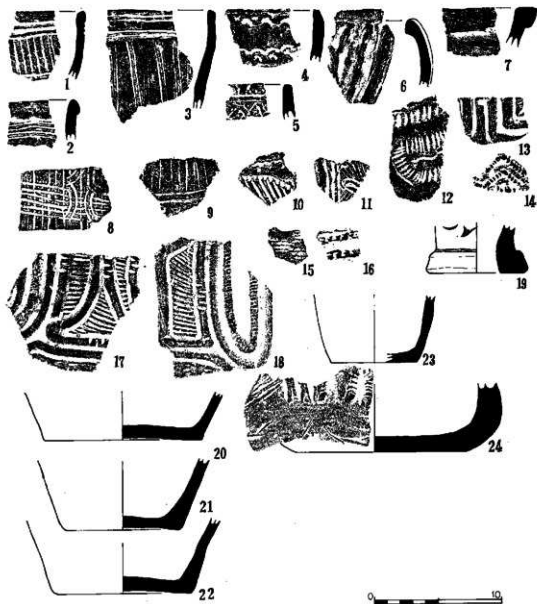


第69图 山海通第14号住居址出土土器（1：3）





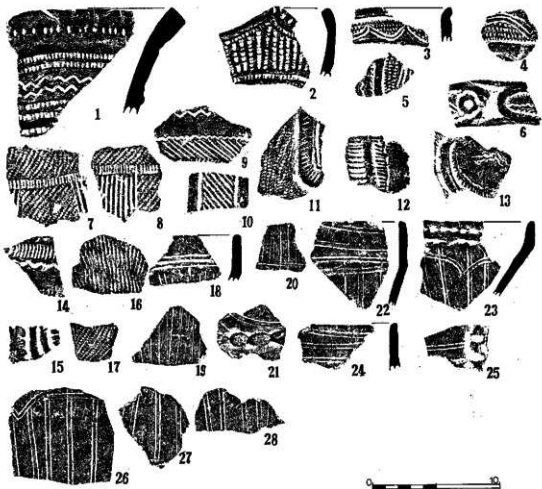
第70图 山海遗址14号住居址出土土器 (1:3)(15~20 底面)



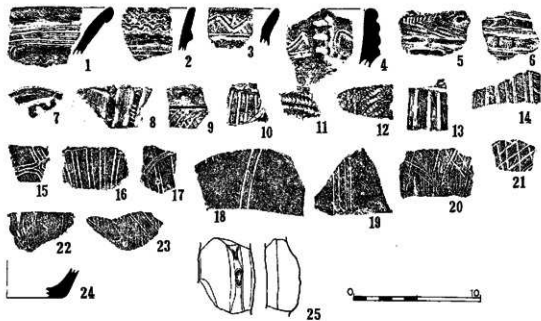
第71图 山满遗址14号住址出土土器 (1:3) (1~18 床面)



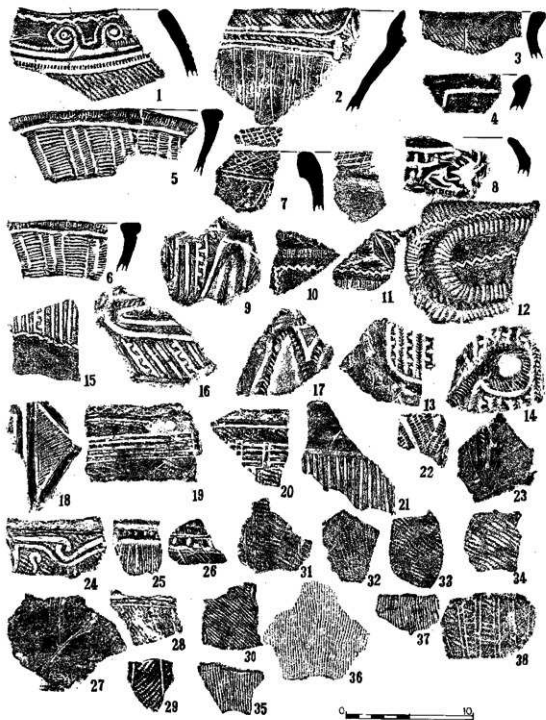
第72图 山湾遗址15号生土层出土土器(1:3) (17~29 依原)



第73图 山满遗址16号伴居址出土器(1:3) (22-28 东南)



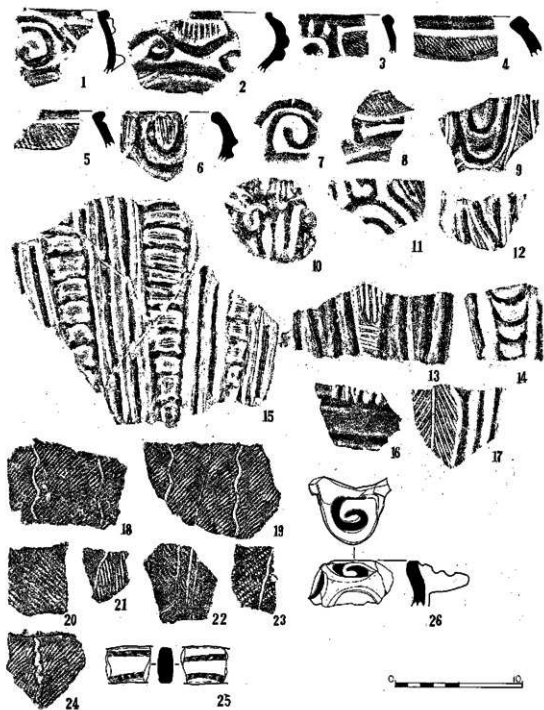
第74河 山溝遺跡17号住居址出土土器 (1:3)



第75号 山清遗址18号住居址出土土器 (1:3)

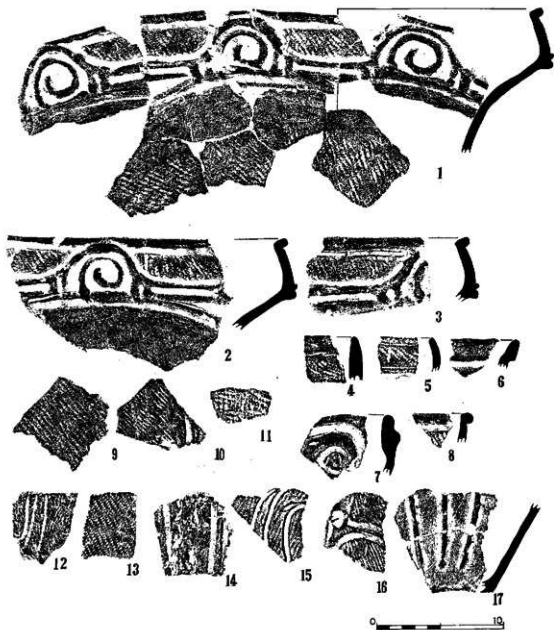


第76图 止洞遗址18号件遗址出土土器(1:3)

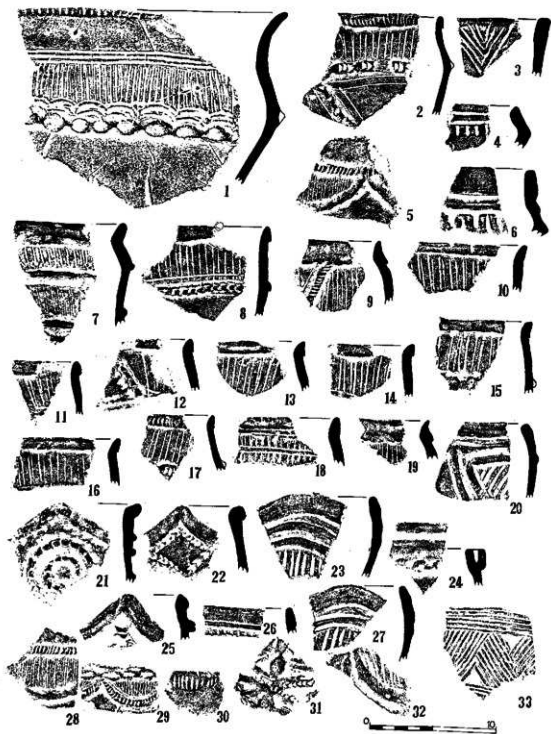


第77图 山海遺跡19号住居址出土土器(1:3)





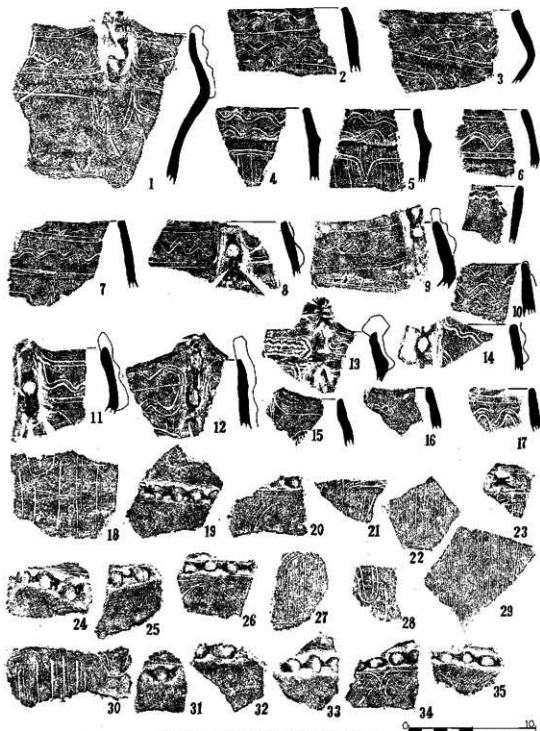
第78图 白溝遺跡19号住居址出土土器(1:3) (1-17 断片)



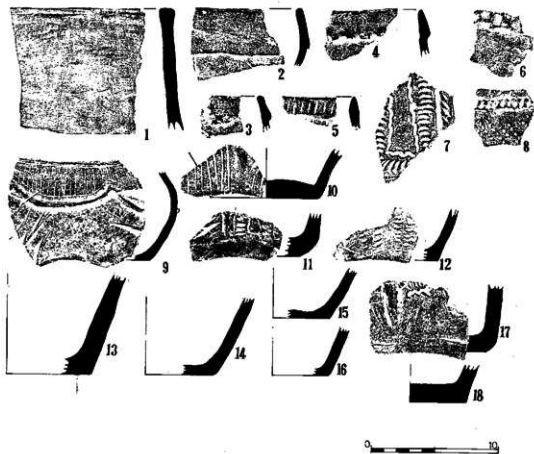
第79图 山溪遗址20号住居址出土土器 (1:3)



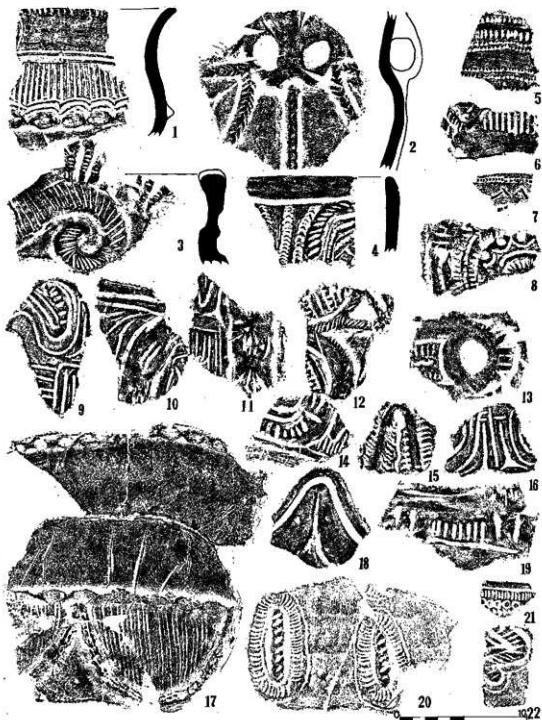
第80图 白濠洞20号住址出土土器(1:3)



第81圖 山灣遺跡20号住居址出土土器 (1:3)



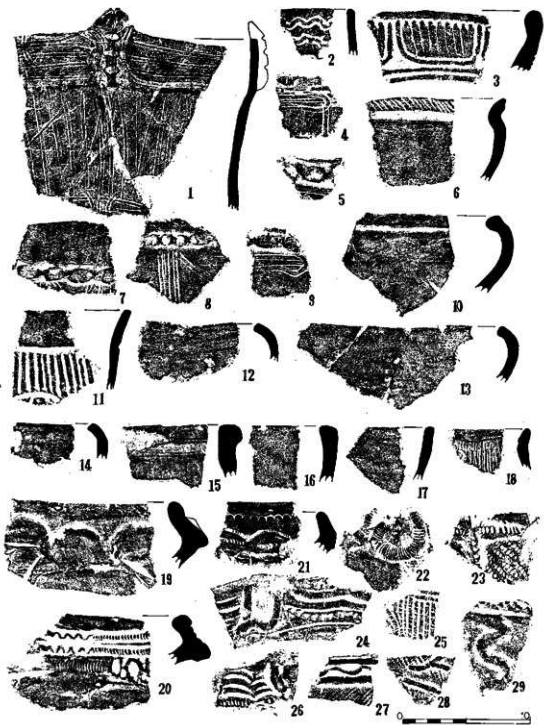
第82圖 山溝遺跡20号住居址出土上土器(1:3)(1~10 断面)



第83河 止溝遺跡21号住居址出土土器 (1:3)

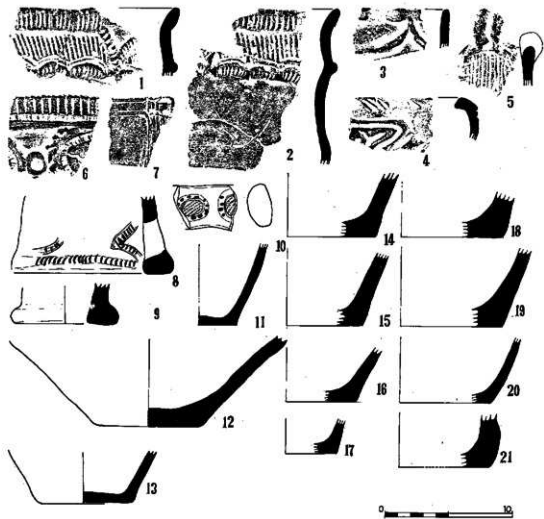


第84图 山湾遗址21号伴居址出土土器(1:3)



第85图 山溝遺跡21号住居址出土土器(1:3)

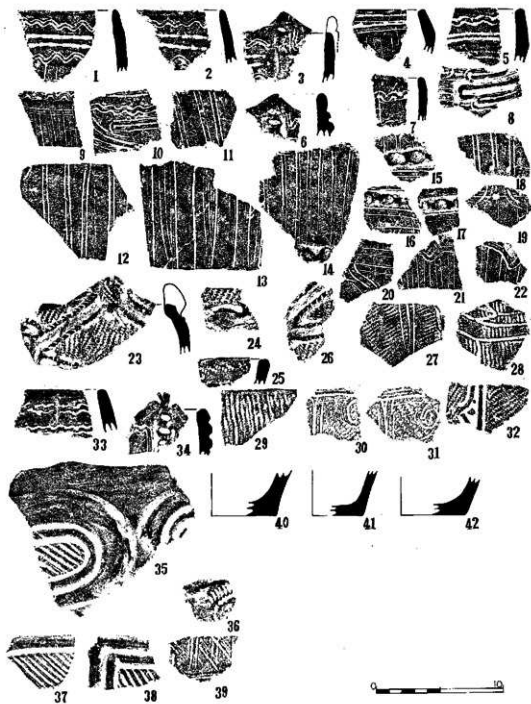




第86图 山溝遺跡21号住居址出土土器(1:3)(1-7 床面)



第87图 山溝池跡22号住居址出土土器(1:3)



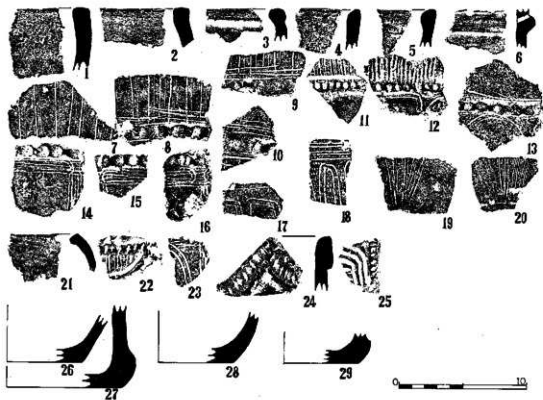
第88图 山清遗址23号住居址出土器(1:3) (33-39 剖面)



第89圖 山溝遺跡23号住居址出土土器(1:3)



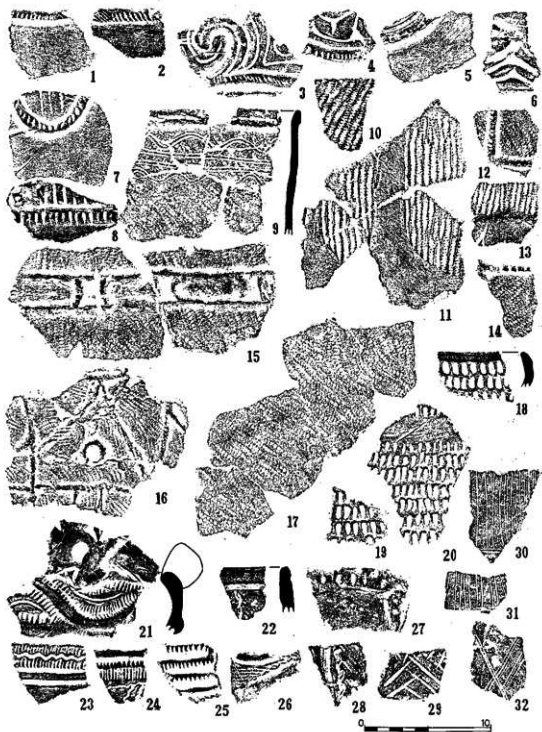
第90圖 山溪遺跡23号伴器址出土土器(1:3)



第91图 山满遗址24号伴埋址出土之器 (1:3)

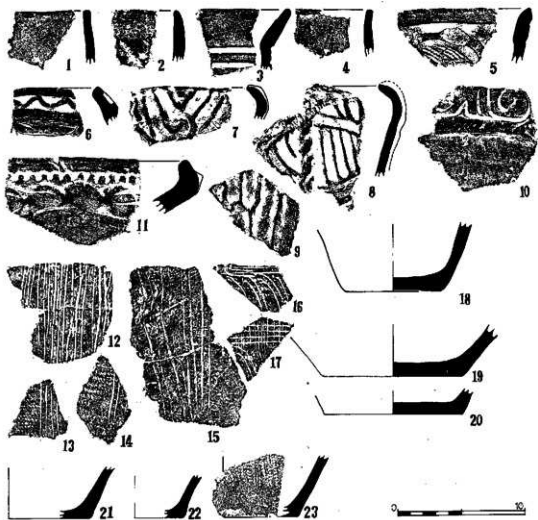


第92图 山海遗址24号住居址出土土器 (1:3)

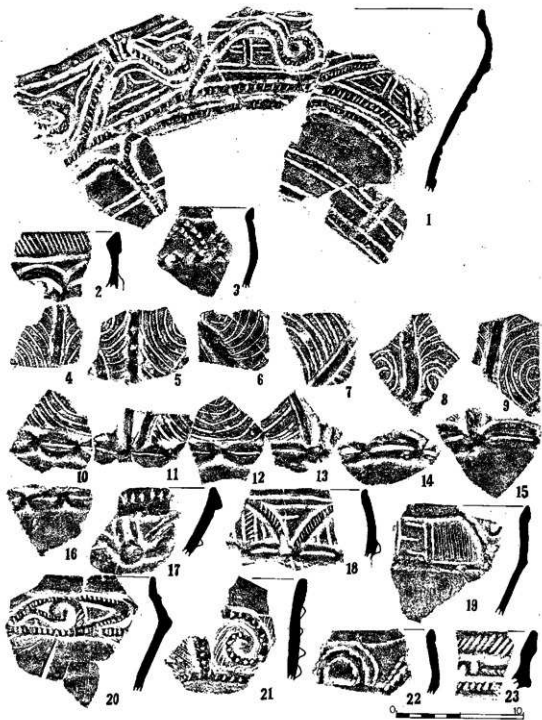


第93图 山南遗址24号生居址出土土器 (1:3)

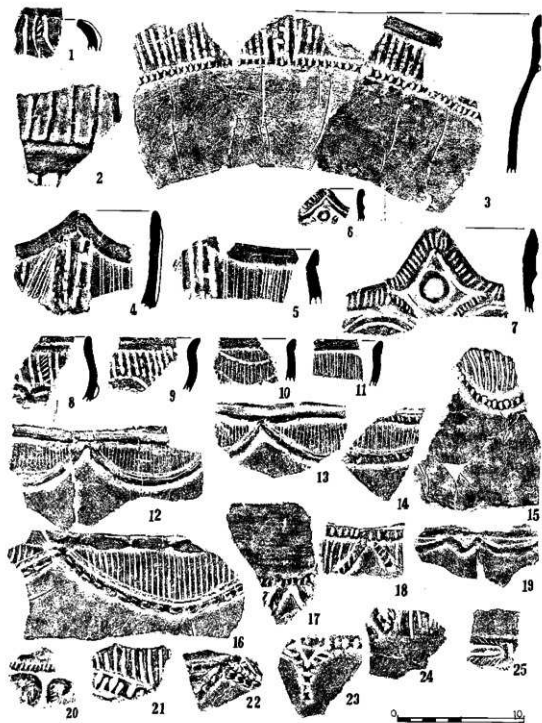




第94图 山溝遺跡24号住居址出土土器(1:3)



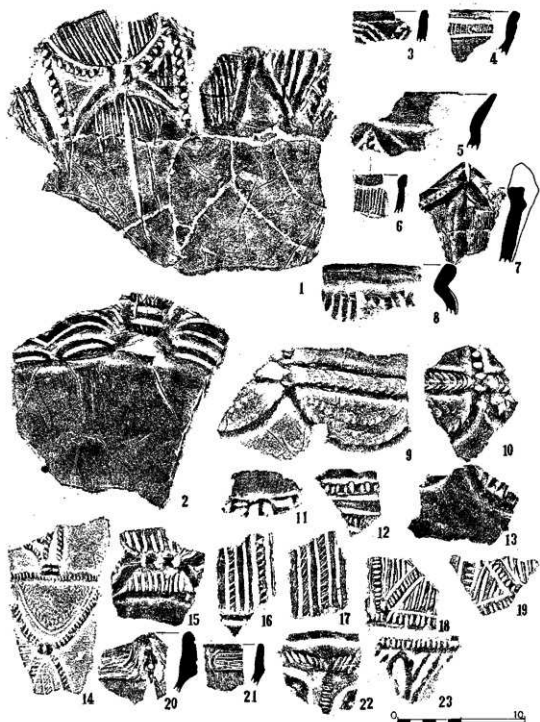
第96图 山清遗址25号住居址出土之器(1:3)



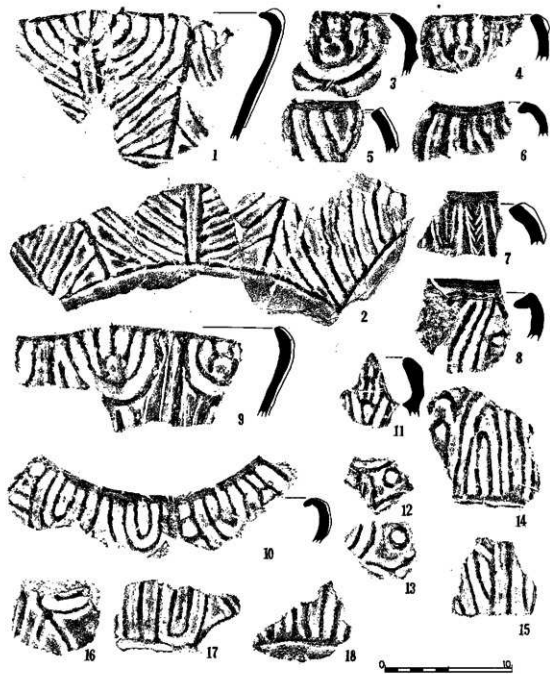
第96图 山涧遗址25号住址出土土器(1:3)



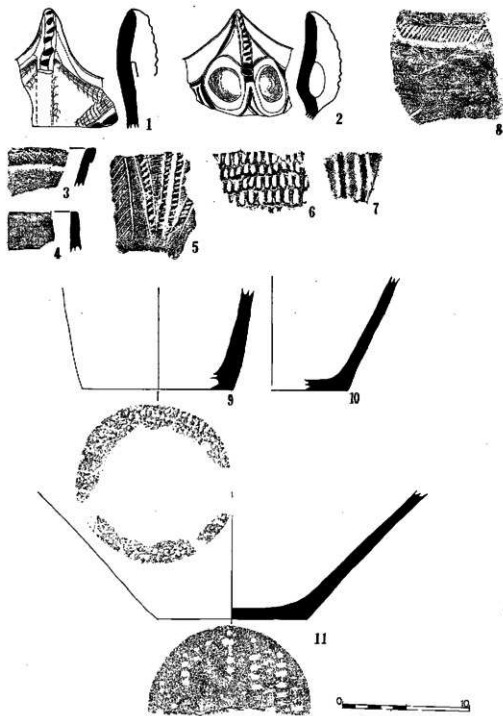
第97图 山溝遺跡25号住居址出土土器 (1:3)



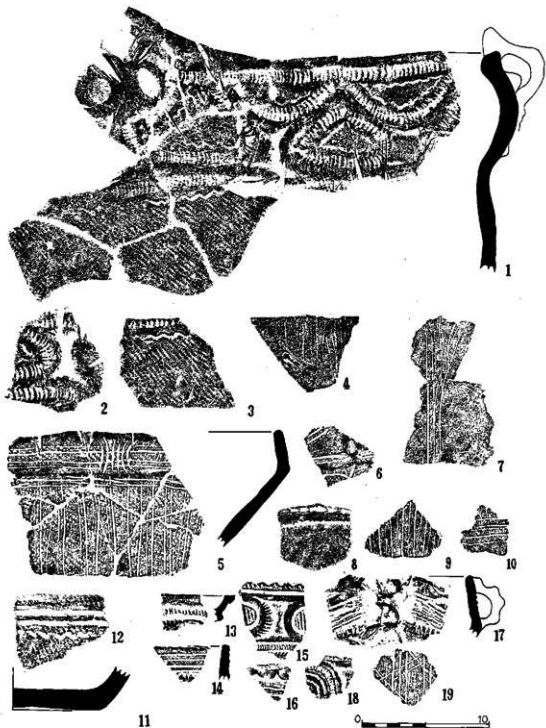
第98图 山湾遗址26件灰陶出土器(1:3)



第99圖 山漢遺跡26号生厠址出土土器 (1:3)

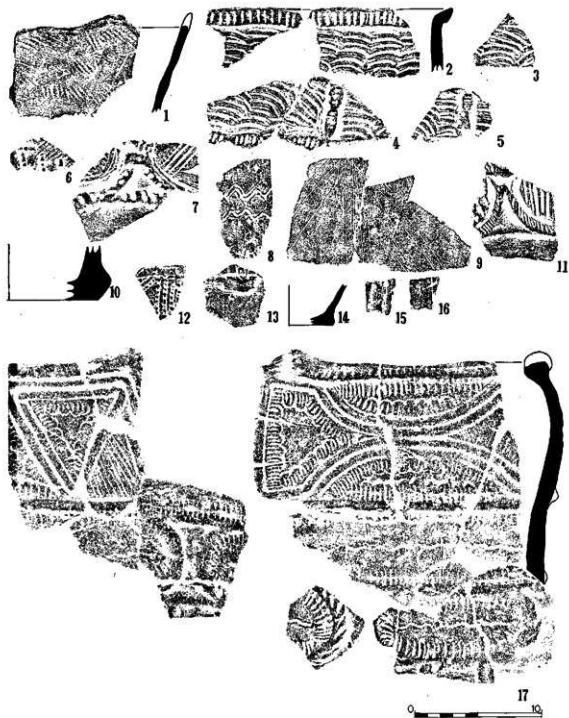


第100图 山湾遗址26号住区出土上器(1:3)

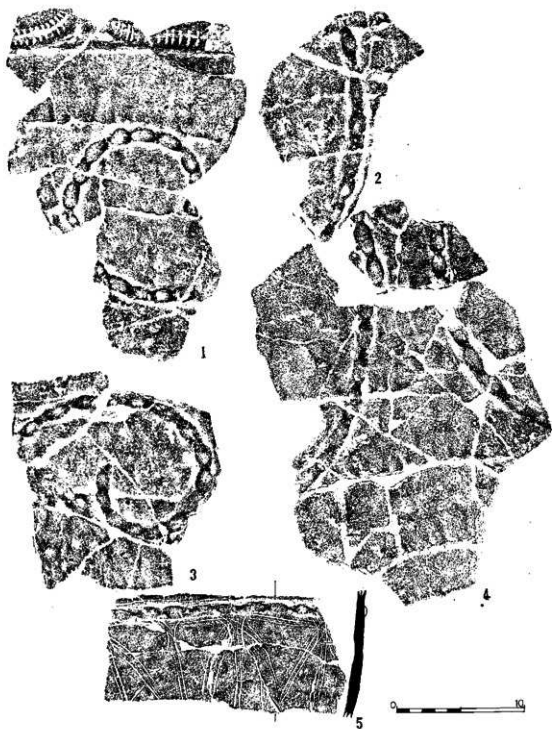


第 101 图 山汉遗址出土土器 (1 : 3) (1~4 ± 2 5~7 ± 3 8~10 ± 5 11 ± 6 12~19 ± 7)

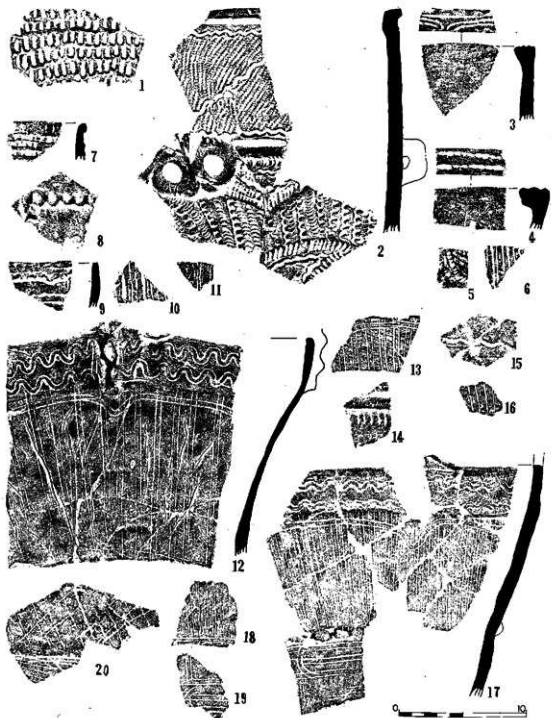




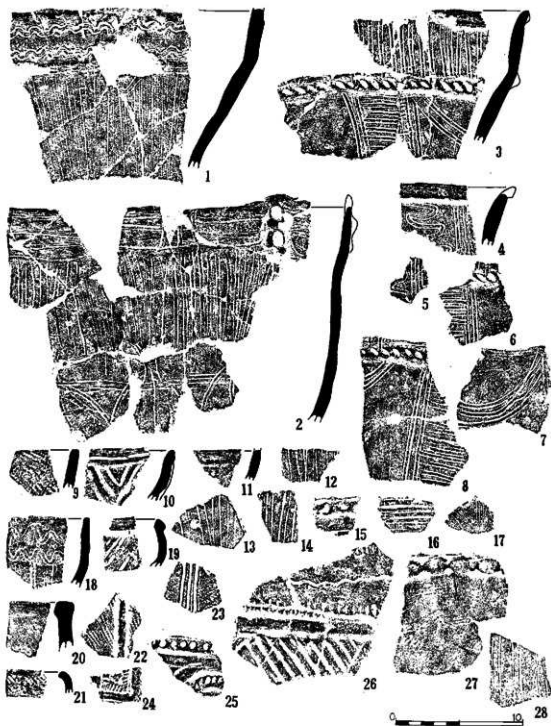
第 102 圖 山溝遠跡土城出土土器 (1 : 3) 1~10±7 11~14±8 15~16±12 17±13)



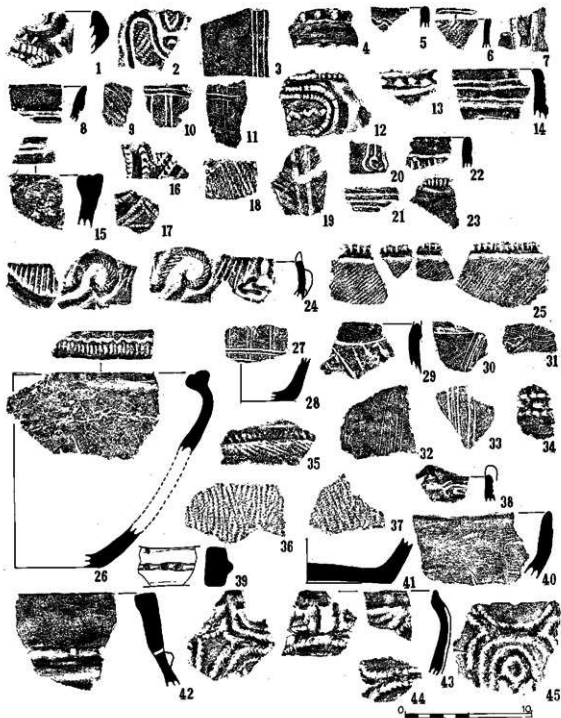
第 103 圖 山溝遺跡土城 13 凡十七器 (1 : 3)



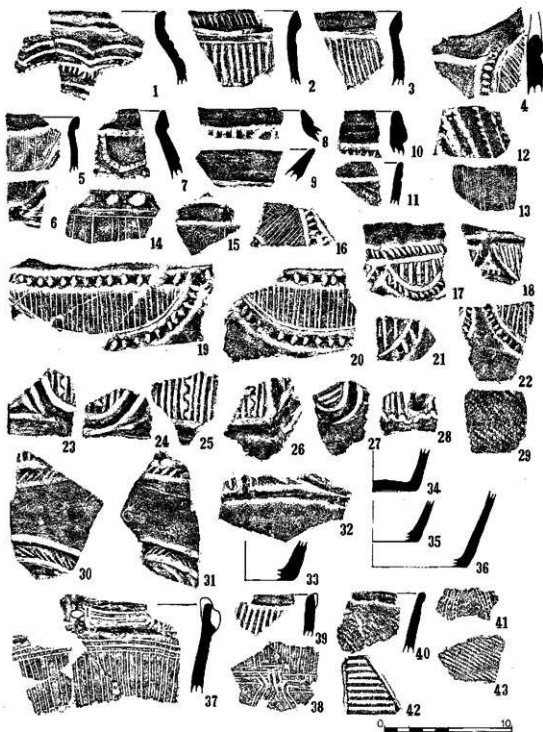
第 104 圖 山溝遺跡十續出土土器 (1 : 3) (1 ± 16 2 ± 18 3 ± 19  
4 ~ 6 ± 20 7 ~ 8 ± 21 9 ~ 11 ± 22 12 ~ 15 ± 24 16 ± 26 17 ~ 20 ± 27 No. 1)



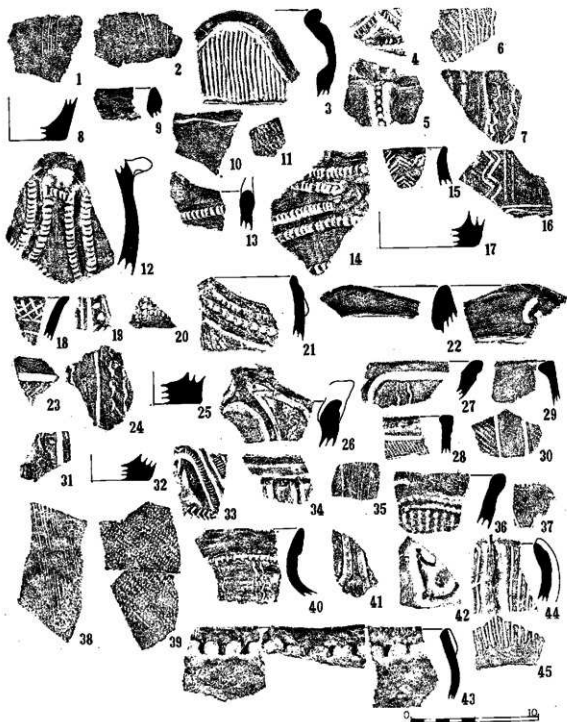
第 105 图 山海遗址土崖出土土器 (1:3) (1~9±27 (No.1 2~9 No.2) 10~17±28 18~26±29)



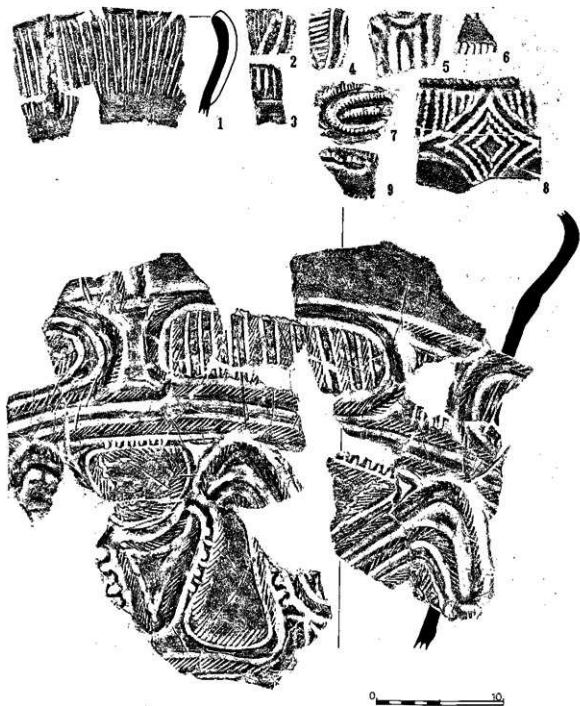
第 106 回 山崎遺跡土坑出土土器 (1 : 3) (1~4 土器 5 土器 6~7 土器 8~9 土器 10~11 土器 12~13 土器  
 14~19 土器 20 土器 21 土器 22~23 土器 24~25 土器 26~28 土器 29~37 土器 38~39 土器 40~41 土器 42~45 土器)



第 107 区 山海遗址土寨出土土器 (1:3) (1~36±60 37~43±62)



第 108 图 山海遗址土质出土石器 (1:3) (1~2±62 3~8±63 9~10±65 11±66 12~14±67  
 15~17±68 18~20±70 21±71 22±75 23~24±76 25±78 26~30±79) 31~32±80 33~35±82 36~39±83

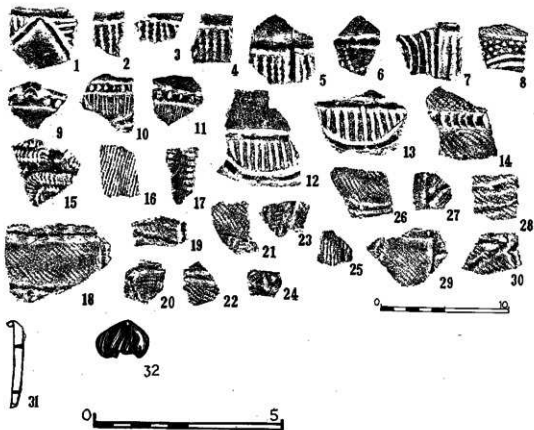


第 109 圖 山溝遺跡土壇出土土器 (1 : 3) (1 ± 86 2 ~ 3 ± 87 4 ~ 10 ± 90)





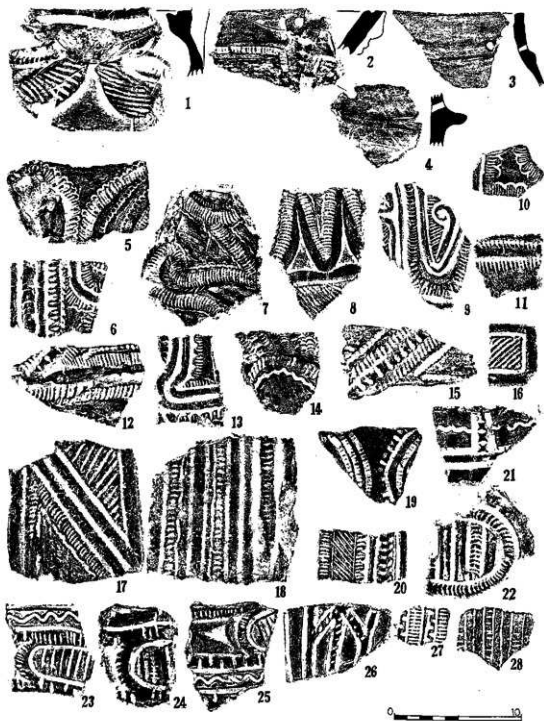
第 110 图 山溝遺跡上出土土器 (1 : 3) (1-5 ±90 6-29 ±91)



第 111 図 山溝遺跡土城91出土土器 (1 : 3) (32のみ 1 : 1) (1-30±91 31 ±9) (32 ±54)



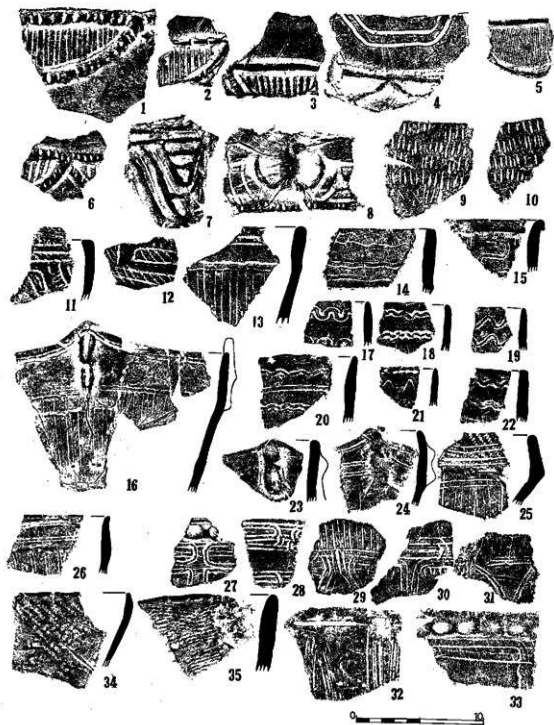
第112图 山海遗址区出土的土器(1:3)



第113图 止海满路E区所出土器(1:3)



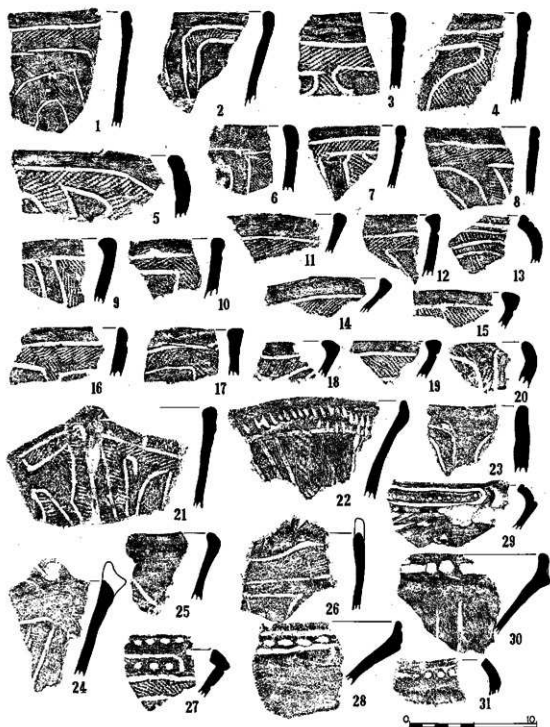
第114图 山海关附近E区出土土器(1:3)



第115图 山海关地区出土土器(1:3)

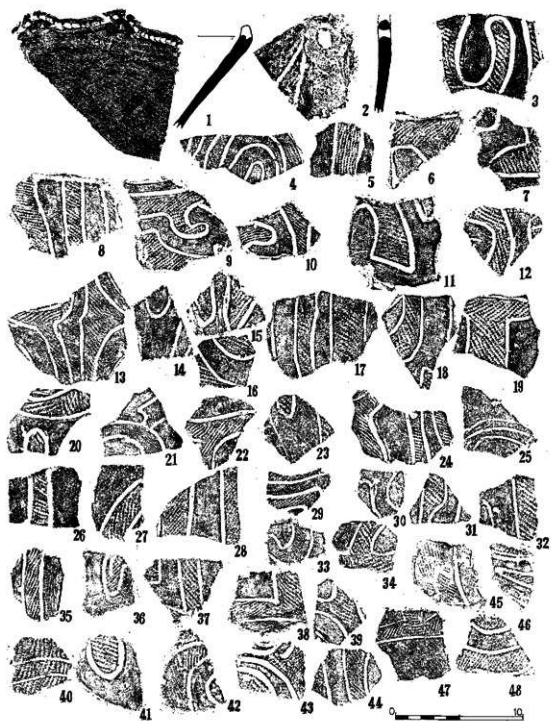


第116图 山岭遗址F区出土陶器(1:3)

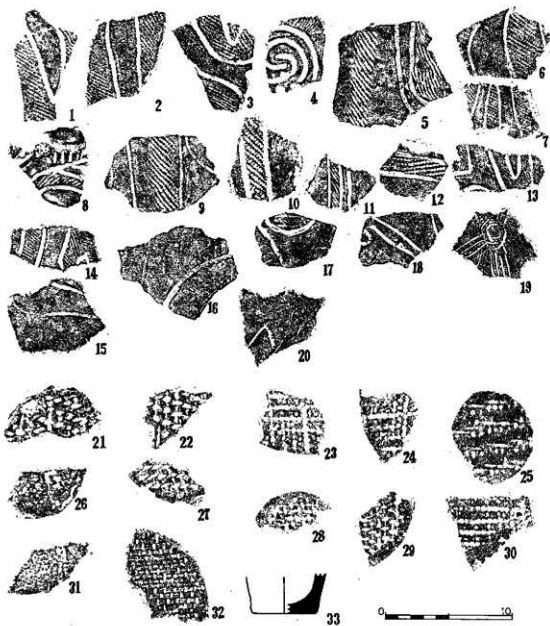


第117图 正源庙遗址出土土器(1:3)

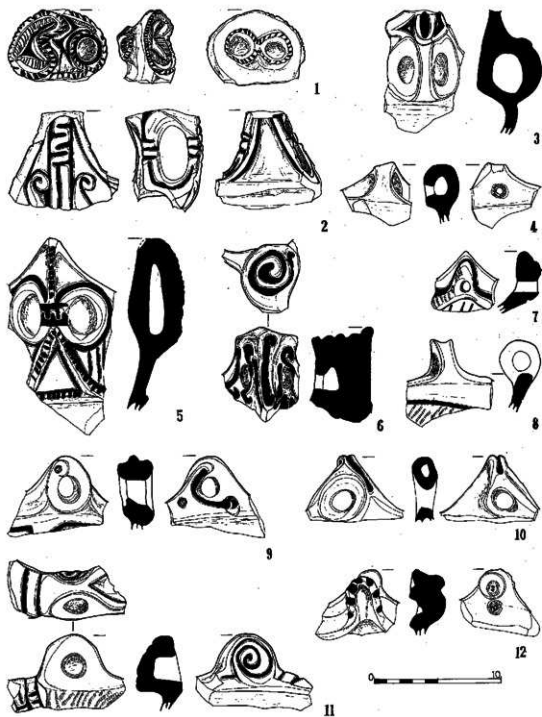




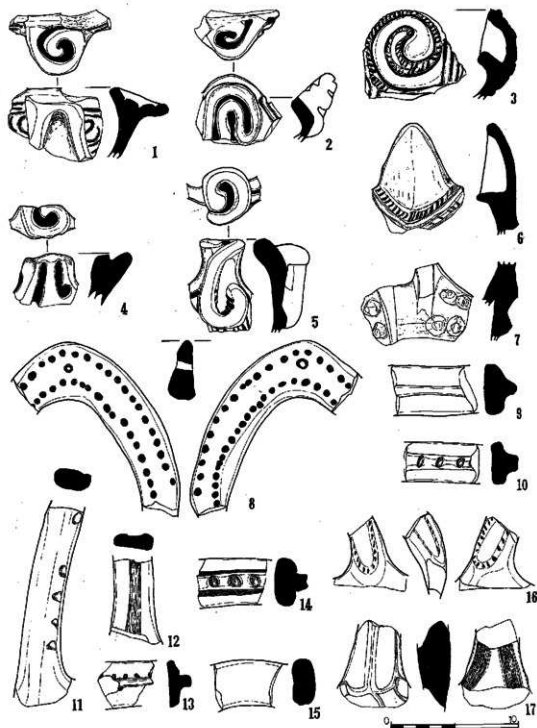
第118号 山海遗址区出土土器 (1:3)



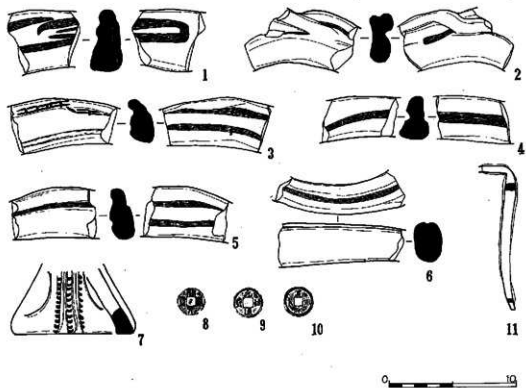
第119图 山湾遗址E区出土石器(1:3)



第120图 山阴地脚E区出土土器(1:3)



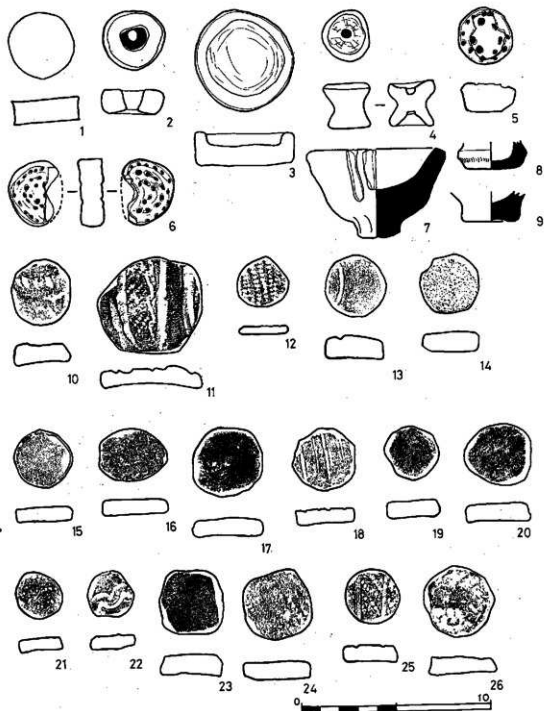
第12区 山河遗址K区出土石器 (1:3)



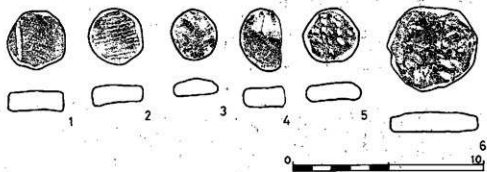
第122图 山西襄汾E区出土西周·古钱·铁器(1:3)



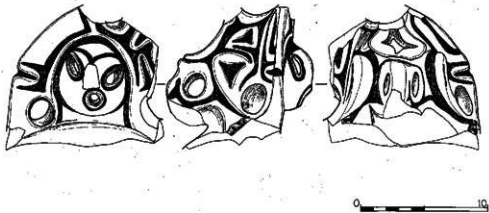
第123図 山溝遺跡出土土偶(1:2) (1 8住, 2 14住, 3 15住, 4 18住,  
5 24住, 6 25住, 7 B区その他, 8~13 E区その他)



第124図 山溝遺跡出土土製品小形土器 (1:2) (1 5住, 2~3 14住, 4 18住, 5 24住, 6 E区その他, 7~8 25住, 9 E区その他, 105住, 11 6住, 12 9住, 13 11住, 14~15 14住, 16 15住, 17~20 18住, 21 20住, 22 22住, 23 25住, 24~25 B区その他, 26 E区その他)

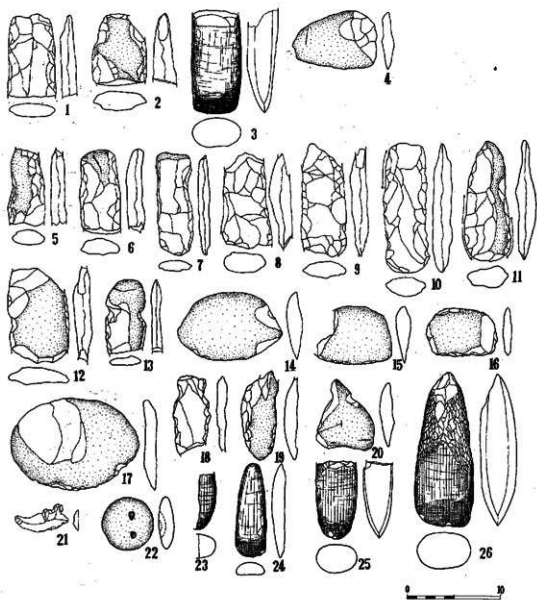


第125图 山溝遺跡E区出土土器 (1:2)

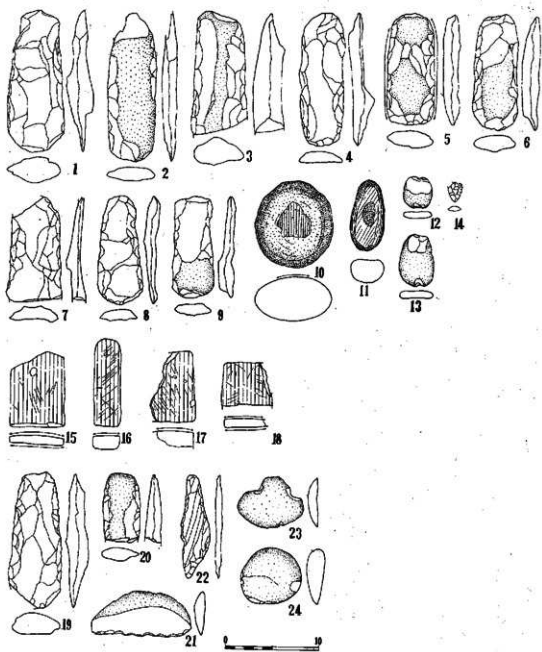


第126图 山溝遺跡出土 9号住居址出土顔面把手 (1:3)

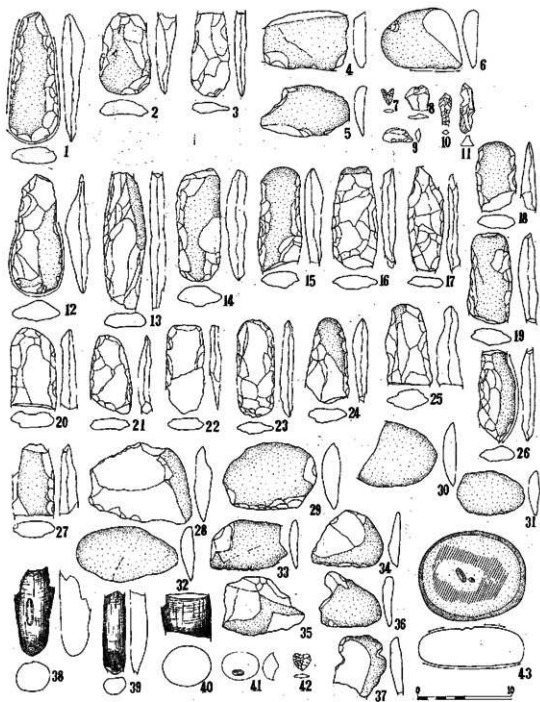




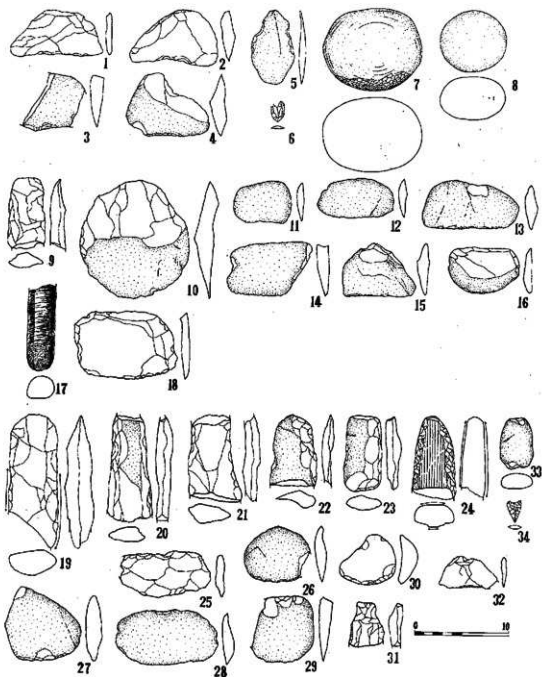
第 127 图 山溝遺跡 8 号住居址出土石器 (1:4) (1-4 漆面, 5-26 耀土)



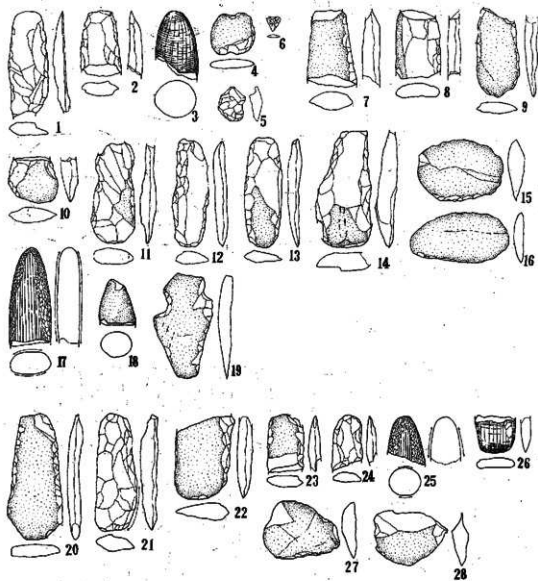
第 128 图 山湾遗址 9·10·11 号住居出土石器 (1:4)  
 (1~14 9 住 15~18 10 住 19~24 11 住)



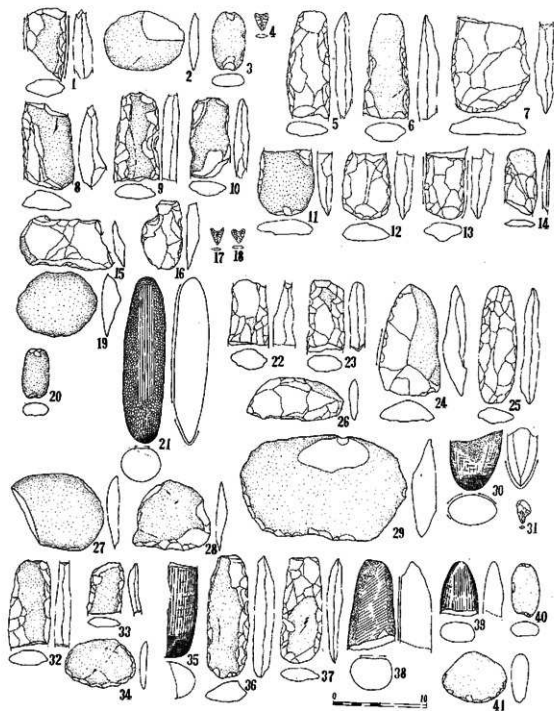
第 129 図 山溝遺跡(4)分住居址出土石器 (1:4) (1~11 稜面 12~43 覆土)



第 130 图 山湾遗址 15·16·18 号住居址出土石器 (1:4)  
 (1~2 15住灰面 3~8 16住灰面 9--18 16住灰土 19~34 18住灰土)



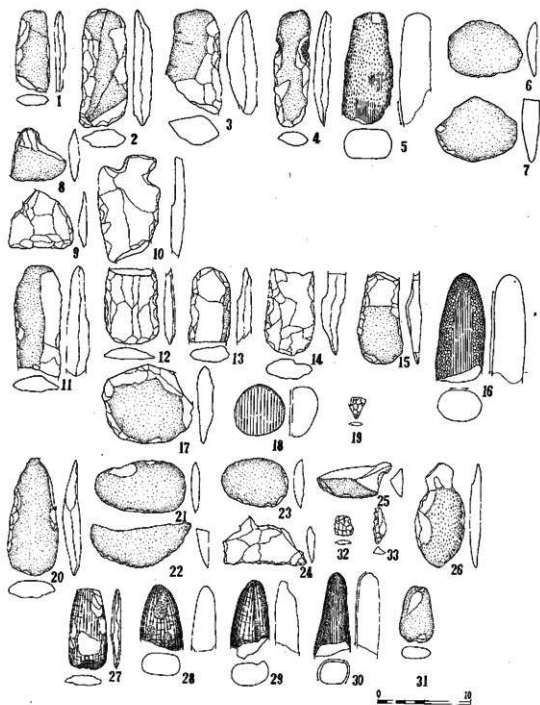
第 131 区·山溝遺跡 19·20 号住居址出土石器 (1:4)  
 (1~6 19 住居土 7~19 住居土 20~28 20 住居土)



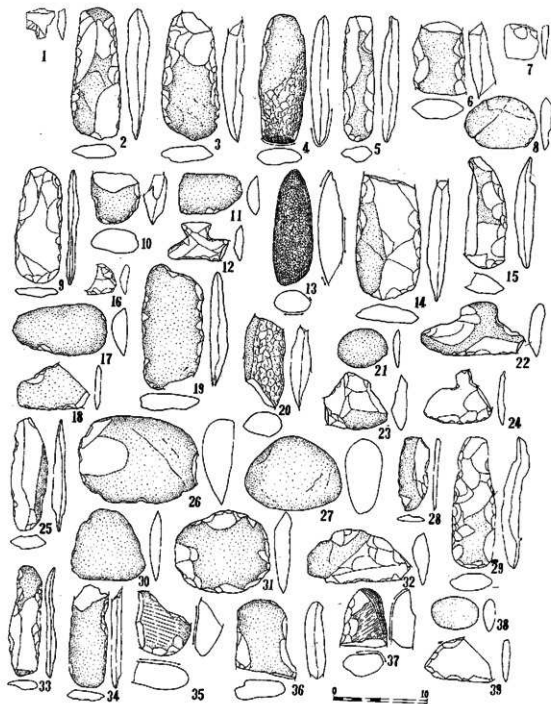
第 132 区 山溝遺跡 21・22・23 号住居址出土石器 (1:4)

(1~4 21住床面 32~35 23住床面 5~18 21住覆土

36~41 23住覆土 19~21 22住床面 22~31 22住覆土)



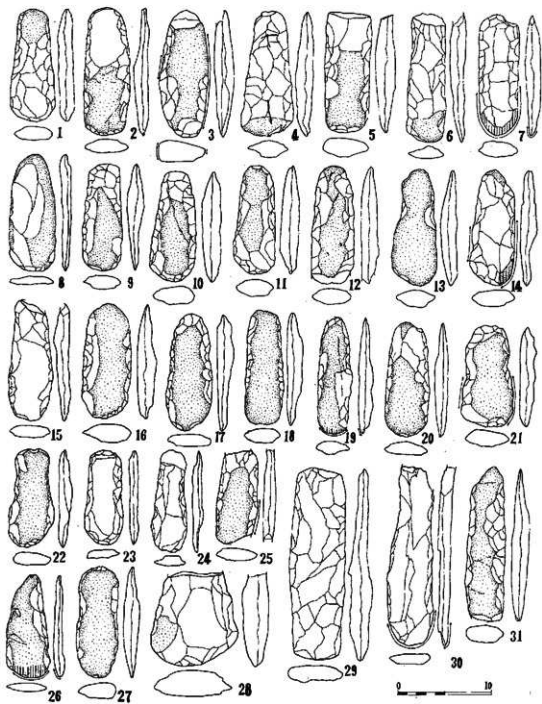
第 133 图 山溝遺跡 24・25・26 号住居址出土石器 (1:4)  
 (1-10 24住居址 11-19 25住居址 20-33 26住居址)



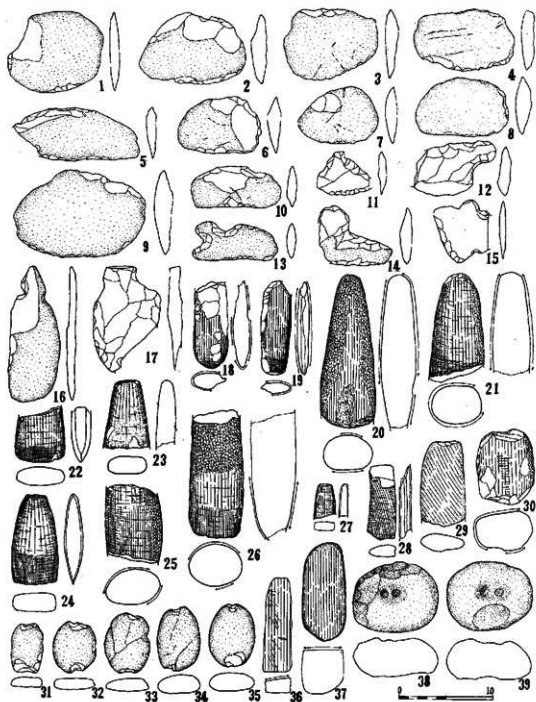
第 134 图 山湾遗址土城出土石器 (1 : 4)

(1 ± 1 2~6 ± 2 7 ± 7 8 ± 12 9 ± 19 10 ± 20 11~12 ± 24 13 ± 28 14 ± 29 15 ± 30 17 ± 48  
 18 ± 52 19~20 ± 57 21 ± 58 22 ± 59 23 · 24 ± 60 26 ± 61 16 · 25 ± 62 27 ± 63 28 ± 66 29 ± 68 30 · 33 ± 70  
 31~32 ± 75 34 ± 78 35~36 ± 82 37 ± 83 38 ± 86 39 ± 87)

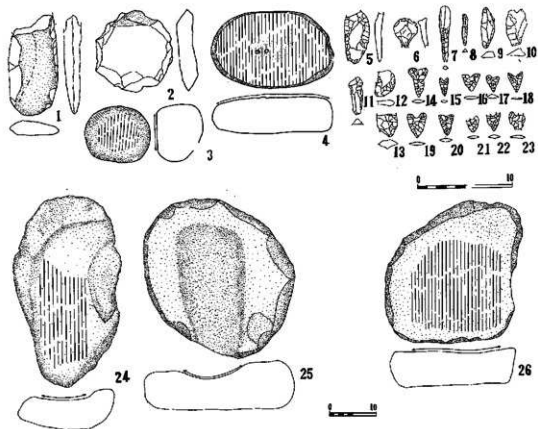




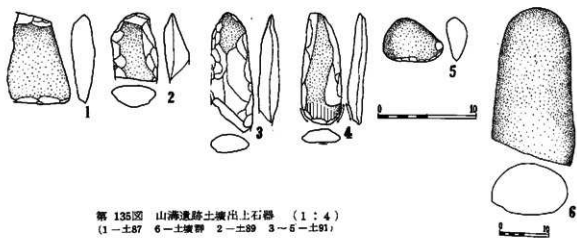
第 136 图 山满遗址 B 区出土石器 (1 : 4)



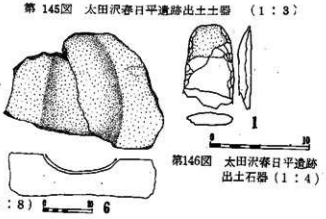
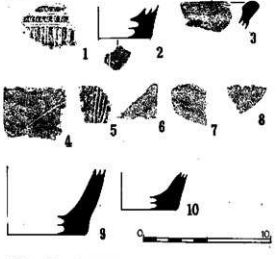
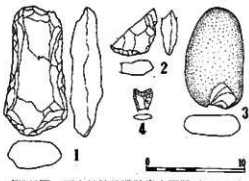
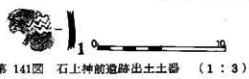
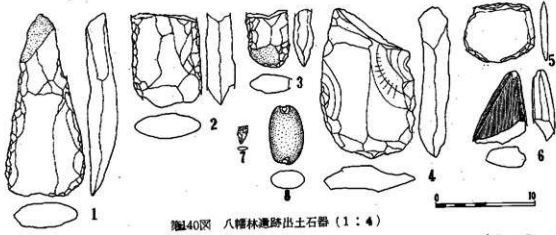
第 137 図 山溝遺跡 E 区出土石器 (1 : 4) 29 は自然面, 磨てある遺物?

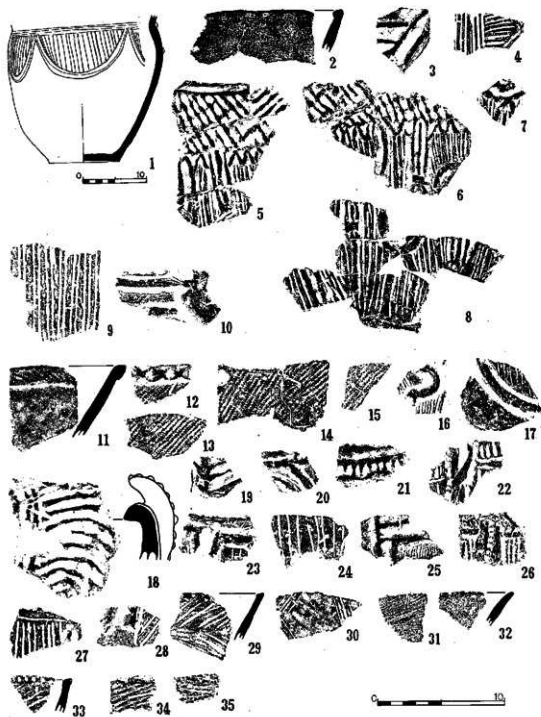


第 138 图 山湾遗址 E 区出土石器 (1 : 4 24 · 25 · 26 1 : 8) (26 24 住)



第 135 图 山湾遗址土坑出土石器 (1 : 4)  
(1—土87 6—土坑群 2—土89 3—5—土91)





第 143 図 庚申平遺跡出土上器 (1 : 3 1のみ 1 : 6) (1~8 1位 9~35 その他)

第1図 うどん坂Ⅱ・うどん坂Ⅰ・山溝遺跡 航空写真



← 山溝遺跡

← うどん坂Ⅰ遺跡

← うどん坂Ⅱ遺跡



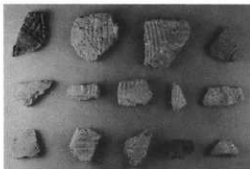
1. 飯島町飯島地区遠景（東より）



2. うどん坂南遺跡（東より）



1. うどん坂南遺跡（北西より）



2. 出土土器



3. 出土石器





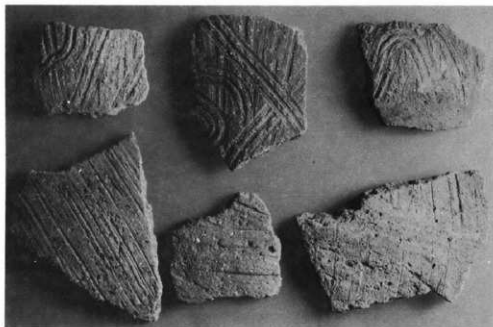
1. うどん坂Ⅱ遺跡（東より）



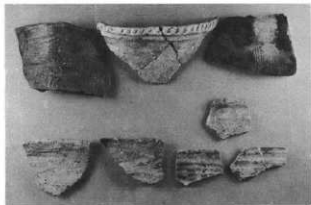
2. うどん坂Ⅱ・Ⅰ遺跡（北西より）



1. 土器片



2. 土器片



1. 土 器



2. 土 器



4. ポイント



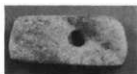
3. 石 器



1. 山溝遺跡遠景（東より）



2. 山溝遺跡遠景（東より）



1. 出土ヒスイ玉



2. 住居址・土壇・配石址(B区)



3. 2号住居址・炉内土器



1. 1号住居址 炉



2. 2号住居址 炉



3. 7号住居址 炉 (上面)



5. 4号住居址



4. 7号住居址



6. 土偶片出土状态



1. 5号住居址 東より



2. 3号住居址 南より



1. 6号住居址 南より



2. 土城群 (B区) 南より





1. 配石 1



2. 配石 3



3. 配石 4



4. 配石 5



5. 配石 6



1. 住居址群 北より



2. 住居址群 南より



1. 山溝遺跡土壌群 (E区) 東より



2. 山溝遺跡土壌群 (E区) 北東より



1. 8号住居址 東より



2. 8号住居址 炉



1. 8号住居址出土土器 (深鉢)



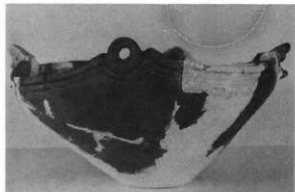
2. 8号住居址出土土器 (浅鉢)



3. 8号住居址出土土器 (浅鉢)



1. 8号住居址土器出土



2. 8号住居址出土土器



3. 8号住居址出土土器



1. 9号住居址 北より



2. 9号住居址遺物出土状態



3. 9号住居址顔面把手出土状態



1. 9号住居址出土顔面把手



2. 顔面把手裏面



3. 顔面把手側面





1. 10号住居址 南より



2. 10号住居址 北より



1. 11号住居址 東より |



2. 11号住居址 炉



3. 11号住居址土器出土状態



1. 12号住居址 東より



2. 12号住居址かまど



3. 12号住居址出土刀子



4. 12号住居址出土小口壺



1. 13・14号住居址 南より



2. 14号住居址が



3. 14号住居址ピット内土器出土状態



1. 14号住居址出土土器 (深鉢)



2. 14号住居址出土土器 (深鉢)



3. 14号住居址出土土器 (深鉢)



4. 14号住居址出土土器 (深鉢)



5. 14号住居址出土土器



6. 14号住居址出土浅鉢



1. 15号住居址 南より



2. 15号住居址 炉



1. 16号住居址 北より



2. 18号住居址 南より



1. 19号住居址 東より

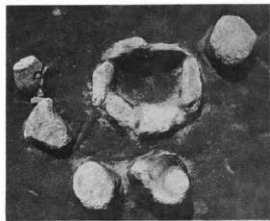


2. 19号住居址 炉





1. 20号住居址 東より



2. 20号住居址 炉



3. 20号住居址出土土器(深鉢)



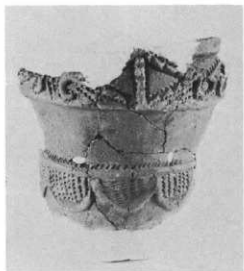
1. 21号住居址 西より



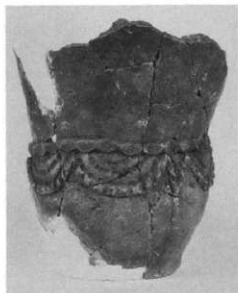
2. 21号住居址土器出土状態



3. 21号住居址出土土器(深鉢)



1. 21号住居址出土土器(深鉢)



2. 21号住居址出土土器(深鉢)



3. 21号住居址出土土器(深鉢)



4. 21号住居址出土土器(深鉢)



1. 22号住居址 西より



2. 22号住居址 炉



1. 22号住居址土器出土状態



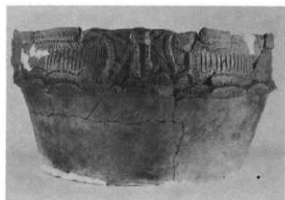
2. 22号住居址出土土器(深鉢)



1. 23号住居址



2. 23号住居址 炉



3. 23号住居址 炉土器



1. 23号住居址出土土器（深鉢）



2. 23号住居址出土土器（深鉢）



3. 22・23号住居址



1. 24号住居址 東より



2. 24号住居址遺物出土状態



3. 24号住居址 炉